

長野県豊科町

MACHIDA

SITE

町 田 遺 跡

都 市 対 策 砂 防 事 業 に 係 る
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

1 9 9 9 . 3

豊科町教育委員会



遺跡遠景（南東から）



遺跡近景（西上空から）

序

町田遺跡は豊科町大字田沢小瀬幅にある弥生時代の遺跡です。今から約2000年前、豊科町で最も早く稻作をおこなったムラのあとで、規模が大きく、南安曇を代表する遺跡として著名でした。

しかし、そのムラも長い年月を経て荒廃し、土に埋まり、やがて水田へと姿を変えてきました。そして、今また都市対策砂防事業によりその景観も大きく変わることになりました。

今回、この都市対策砂防事業に先立ち、長野県豊科建設事務所より豊科町教育委員会が委託を受け、発掘調査を実施いたしました。調査は平成10年7月から9月の炎天下に実施され、本書はその後の整理作業とあわせて結果を報告するものであります。残念ながら、私たちの郷土を築いてきた先人たちの生活の跡は、土に埋まってからというもの、後にも先にも発掘調査に係わった私たちだけしか目にすることができなかったものです。その内容を紹介する本書が多くの方に活用され、また、今後の文化財保護と郷土の歴史の解明に役立つことを期待いたします。

ここに、調査にご理解とご協力をいただきました豊科建設事務所をはじめとする関係機関、また、小瀬幅地区の皆様に対し、深甚の敬意と感謝を申し上げ序といたします。

平成11年3月

豊科町教育委員会

教育長 奥原哲彦

例　　言

1. 本書は平成10年7月1日から9月30日にかけて実施した、長野県南安曇郡豊科町大字田沢4590-1番地他町田遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 本調査は長野県豊科建設事務所より委託を受け、豊科町教育委員会が実施した。
3. 調査の記録にあたっては新平面座標系VIIIによる測量座標を用いた。
4. 本書で使用した層名（土色）は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
5. 本書の編集は事務局が行った。執筆は第2章－2及び第5章－2を関全寿、第4章をパリノ・サヴェイ株式会社、他は山田真一が担当した。
6. 訳・引用文献・参考文献は各章末に一括掲載した。
7. 遺構の焼土及び炭化物、弥生土器の赤彩、黒色土器の黒色処理、灰釉陶器は以下のトーンで表した。



8. 本調査で得られた出土遺物・記録類は豊科町教育委員会が保管し、豊科町郷土博物館（〒399-8205長野県南安曇郡豊科町大字豊科4289-8 Tel・Fax0263-72-5672）に収蔵している。

目 次

第 1 章 調査の経緯と方法	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
3 調査の方法	1
第 2 章 遺跡の概要	3
1 地形と地質	3
2 周辺の遺跡	9
3 既往の調査	10
第 3 章 調査の結果	12
1 調査の概要	12
2 遺構	13
3 遺物	24
第 4 章 自然科学分析の結果	27
はじめに	27
1 試料	27
2 分析方法	27
3 結果	29
4 考察	31
第 5 章 調査の成果	33
1 町田遺跡の発掘成果	33
2 町田遺跡基本層序の埋積過程	36
3 集落景観の復元	38
第 6 章 総括	40

図版目次

卷首図版 1 遺跡 遺跡遠景（南東から）
2 遺跡 遺跡近景（西上空から）

- 図版 1 遺跡 遺跡の位置
2 遺跡 調査区周辺の地形
3 遺跡 A区全体図
4 遺跡 B区全体図
5 遺跡 遺構平面図（1）
6 遺跡 遺構平面図（2）
7 遺跡 遺構平面図（3）
8 遺跡 遺構平面図（4）
9 遺跡 遺構平面図（5）
10 遺跡 遺構平面図（6）
11 遺跡 遺構平面図（7）
12 遺物 S B 1～S B 4 出土土器実測図
13 遺物 S B 5～S B 10・土坑・ピット出土土器実測図
14 遺物 ピット・遺構外・既出土器実測図
15 遺物 既出土器実測図、石器実測図（1）
16 遺物 石器実測図（2）
17 遺物 石器実測図（3）
18 遺物 石器実測図（4）
19 遺物 石器実測図（5）
20 遺物 石器実測図（6）
21 遺跡 1 遺跡近景（南上空から）
2 B区全景（上空から）
22 遺跡 1 S B 1
2 S B 2
23 遺跡 1 S B 3
2 S B 4
3 S B 5
24 遺跡 1 S B 6
2 S B 7
25 遺跡 1 S B 8・9

- 2 S B10
3 S B9 炉
4 S B10 炉
- 26 遺跡 1 S T 1
2 S T 2
- 27 遺跡 1 S T 3
2 S K 1
3 S K 2
4 S K 3
5 S K 4 (右) • S K 5 (左)
- 28 遺跡 1 S K 6
2 S K 7
3 S K 8
4 S K 9
5 S K 10
6 S K 11
7 S K 12
8 S K 13
- 29 遺跡 1 S K 14
2 S K 15
3 S K 16
4 P 16 遺物出土状況
5 溝 (A区南西側)
6 溝 (A区北西側)
- 30 遺物 S B 1 • S B 2 出土弥生土器
- 31 遺物 S B 3 • S B 6 • S B 10, 土坑, ピット, 遺構外出土弥生土器
- 32 遺物 遺構外, 既出弥生土器
- 33 遺物 既出弥生土器
- 34 遺物 石器 (1)
- 35 遺物 石器 (2)
- 36 自然科学分析 花粉化石
- 37 自然科学分析 植物珪酸体・珪藻プレパラート内の状況
- 38 自然科学分析 木材・炭化材 (1)
- 39 自然科学分析 木材・炭化材 (2)
- 40 調査スナップ

挿図目次

挿図 1 遺跡の立地	3
2 地形及び地質図	4
3 近世の洪水経路	5
4 周辺の遺跡	8
5 町田遺跡既出遺物	10
6 S B 1 実測図	12
7 S B 1 遺物出土状況	13
8 S B 2 実測図	14
9 S B 3 実測図	14
10 S B 4 実測図	15
11 S B 5 実測図	16
12 S B 6 杉材出土状況	16
13 S B 6 実測図	17
14 S B 7 実測図	18
15 S B 8 実測図	18
16 S B 9 炉実測図	18
17 S B 9 実測図	19
18 S B 10 実測図	19
19 S B 10 炉実測図	19
20 S T 1・S T 2 実測図	20
21 S T 3 実測図	21
22 土坑実測図	22
23 試料採取地点柱状図と分析層位	28
24 松本平南部の弥生土器	34
25 磨製石鏃の製作工程	35
26 粘土採掘坑	35
27 基本層序土層断面図	36
28 調査地近景（1998年12月、工事中）	40

表 目 次

表 1 花粉分析・植物珪酸体分析結果	30
2 樹種同定結果	31
付表 1 柱穴一覧表	43
2 弥生土器観察表	47
3 石器観察表	50
4 出土石器一覧表	51
5 壇穴建物出土石器一覧表	51

第1章 調査の経緯と方法

1 調査に至る経緯

事業の概要 本調査は都市対策砂防事業に係る緊急発掘調査で、事業の主体者は長野県豊科建設事務所である。事業は降雨等により崩落を繰り返す高松沢の砂防対策として、延長120m、幅18m、深さ4.5mの水路を新設するものである。

埋蔵文化財の保護と調査の実施 事業が明らかになった平成9年10月に、事業者・長野県教育委員会・豊科町教育委員会により、区域内の埋蔵文化財の保護について協議をもった。その結果、遺跡は、過去に本格的調査が行われておらず広がりや内容が不明であること、また、瓦粘土採取により破壊された部分が多く存否が不明であることなどから、用地買収後に試掘調査を実施し、その結果に基づき対応することとなった。試掘調査は平成10年5月13日から15日にかけて実施した。工事区域内にトレンチを入れて土層を観察した結果、一部で破壊されていたものの、弥生時代の遺構が広く分布していることが確認された。これを受け、JR以西については工事前に発掘調査、また、JR及び国道19号との交差部分については立ち会い調査を実施することが事業者と町教育委員会との間で確認された。5月29日には事業者から発掘届（文化財保護法第57条3第1項）が提出され、6月22日に受託契約を締結、7月1日から9月30日にかけて町教育委員会が発掘調査を実施した。整理作業は10月から開始し、11年3月に報告書（本書）を刊行し、すべての事業を終了した。

2 調査体制

調査主体 豊科町教育委員会

調査担当 山田真一（豊科町教育委員会社会教育課社会教育係）

調査員 今村 克 関 全寿

作業参加者 飯田三男 内川京子 太田房枝 太田万喜子 北澤治子 北澤禮治郎 小池定子 関沢美智子 高見澤友子 竹内明雄 竹内 嵩 田中 陽 伝田 幸 中沢雅子 野村正樹 古川厚子 二木佐嬉子 細川 一 細川光義 松沢久由 山崎照友

事務局 豊科町教育委員会社会教育課社会教育係

丸山雄一（社会教育課長） 長谷川幹男（社会教育係長） 藤井 秀 高橋 知 等々
力洋子 山田真一

3 調査の方法

試掘調査の方法 町田遺跡は瓦粘土採取中に発見され、弥生時代の遺跡として著名であった。しかし、発掘調査が行われたことがなく、数度の確認調査を実施していたものの、遺跡の広がり等は不明であった。しかも粘土採取により遺跡の大半が既に破壊されたと考えられていた。また、北方2kmに所在する明科町北村遺跡と立地が共通することから、より下位に縄文時代の遺構が存在する可能性も考えられた(第2章第3節)。したがって、試掘調査は遺跡の存否の確認に重点をおき、さらに弥生面より3mほど深く掘削し、下層に縄文時代面の有無を確認することとした。調査は用地買収が済んだ地点を対象に、5月13日から15日にかけて実施した。

発掘調査の方法 試掘調査の結果、縄文時代の面は確認されなかったものの、弥生時代の遺構が広範囲に広がっていることが明らかになった。遺跡が広範囲に広がっているため、将来の調査も念頭に入れ、国道西側をA区、国道とJRに挟まれた地区をB区、それ以東をC区と大区分した。調査は、工事工程の都合によりB区から着手した。調査地内の表土の入れ替えは効率的でないため、土置き場を工事区域外に確保し、全面的に表土を剝いだ。既に試掘調査によって土層が明らかにされていたので、表土剝ぎには重機を用い、検出は人力で行った。表土剝ぎの過程で、多量の出水があったため、調査地端に排水路を回し、ポンプにより排水した。また、調査区内にも、適宜、排水路を設けた。

遺構には検出順に、堅穴建物址にSB、土坑にSK、柱穴にPの記号を冠し、それぞれ通し番号をふった。Pを付した中には掘立柱建物を構成するものがあり、まとめてSTの記号を付した。遺構名は現場での調査終了後に整理し、変更したり追加したものもある。掘り下げは四分割し、その土手で土層を観察する方法を基本に、適宜応用して実施した。

調査記録 測量は委託設定した国土座標に基づき1/20で行い、必要に応じ、1/10等大縮尺で行った。写真はモノクロネガとリバーサルフィルムを使用し、主として35mmカメラで撮影している。また、遺跡の全容をつかむために航空写真を委託して撮影した。遺構の測量等は調査員が分担して行った。また、古環境と地形形成過程を復元するため、花粉分析等の自然科学分析を委託して実施した。

報告書の作成 整理作業は現場作業が終了した10月から着手した。記録類の整理、遺物の実測・トレースなどは調査員が分担して行った。既出遺物が公にされていなかったので、それらも含めてできる限りの資料の提示をめざした。しかし、時間及び予算の制約のため、十分に行えなかった部分も生じた。これらについては別の機会に報告していきたい。

調査指導・協力 調査中は以下の方々、ならびに諸機関からご指導・ご協力いただいた。

五十嵐孝策 市川二三夫 内川岩雄 内川 廣 大沢 哲 太田圭郁 小口達志 小沢豊美 神沢昌二郎 桐原 健 小林康男 熊谷康治 小松 学 島田哲男 関沢 聰 高桑俊雄 竹内靖長 竹原学 田多井用章 辻本裕也 寺島俊郎 鳥羽嘉彦 直井雅尚 樋口昇一 平林 彰 降旗俊行 古川静 増澤達海 丸山活輝 丸山久子 丸山宗利 三村竜一 村田正幸 望月明義 百瀬新治 百瀬長秀百瀬忠幸 山下泰永 山田瑞穂 横山 憲 和田和哉 小瀬幅公民館 松本市立考古博物館

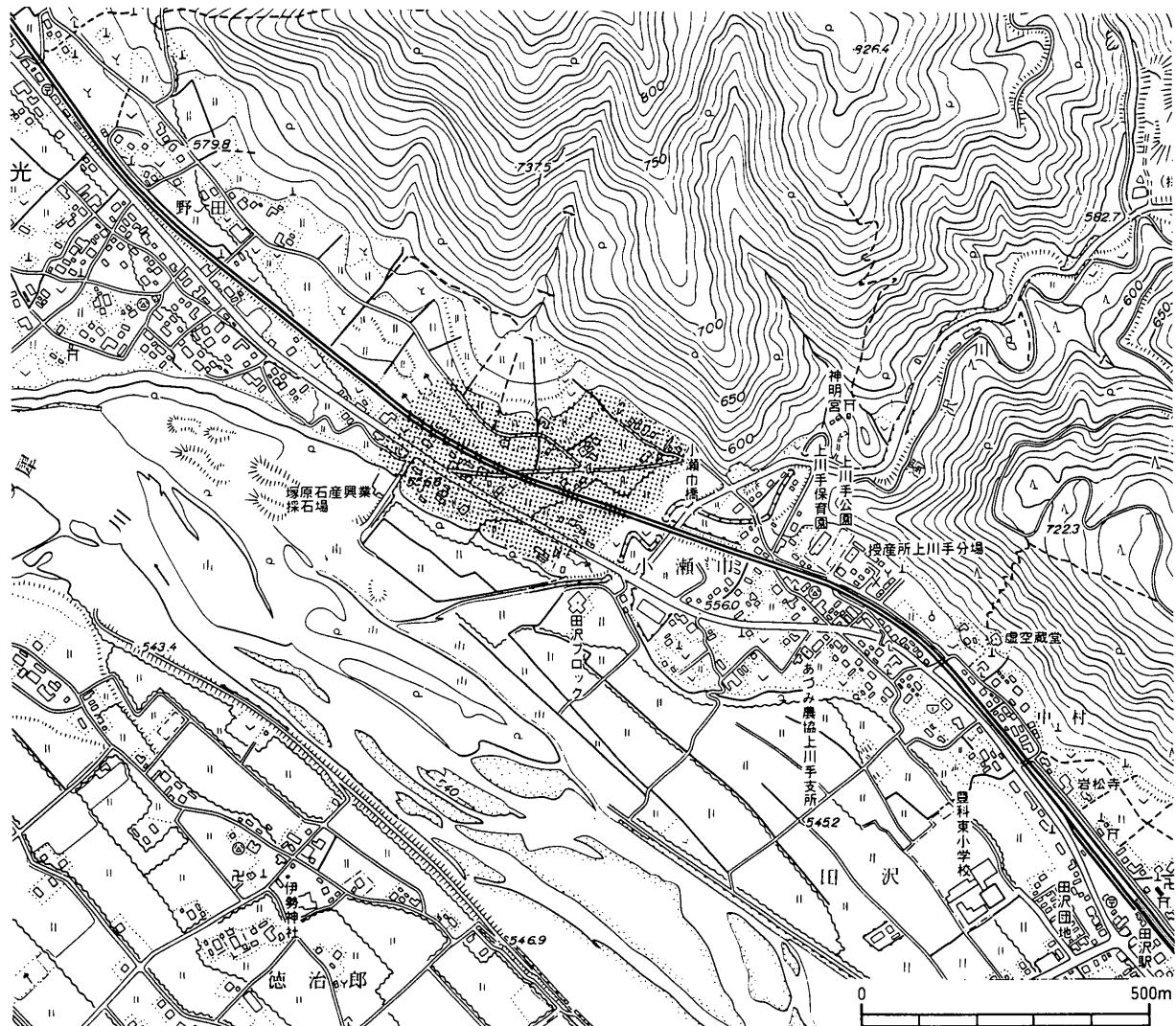
第2章 遺跡の概要

1 地形と地質

(1) 地形 (巻頭図版1・2, 図版1・2・21)

遺跡の位置 町田遺跡は、長野県 南安曇郡豊科町大字田沢字小瀬幅、町田地籍に所在する。長野県の中西部に紡錘形に広がる松本盆地のほぼ中央東縁、犀川右岸段丘上で、南を濁沢川(田沢川)、北を奥沢、西を犀川に面している。この低位段丘には狭義の光段丘第一段丘面野田面と第二段丘面町田面があり、東西300~750m、南北1400m の範囲に分布する。標高は550~580m を測り、ほぼ中央をJR篠ノ井線・国道19号が南北に縦走する。遺跡は町田面の南端部を占めている（挿図1）。

遺跡周辺の地形と地目 遺跡の前方は、犀川の氾濫原を通して安曇野の穀倉地帯が広がる。一方、背後には長峰山地が続き、山麓には、小溪流のつくる扇状地地形や崖錐地形が発達している（挿図2）。



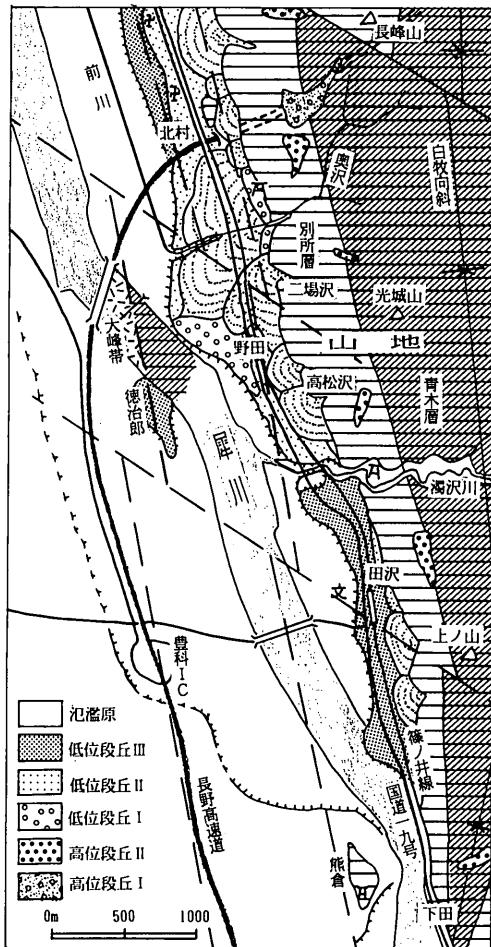
挿図1 遺跡の立地

1 地形と地質

主集落は、野田面に立地する。台地状を呈する野田面は、西半が形成当時の原形面を残す砂礫土地帯で、東半は扇状地地形を呈し用水の確保が困難であったことから、古くから桑園地帯となっている。

両者の交合部は旧奥沢の河道跡で、この部分は、少量ながら浸透水があり古くから水田経営がなされたことから、「野の中の田圃」ということで野田の地名が生れたといわれる。

町田面には比高5mほどの滑走斜面を境として、田切り地形を呈する旧奥沢の河道跡凹地が残り、水田耕作が行われている。水田部分は、明治以降の土瓦生産によって粘土が広範囲に採取されており、町田遺跡内にもこの土取りが及んで破壊攪乱され、原地形面は変化している。また西側段丘崖は、歴史時代以降の度重なる犀川の洪水によって段丘崖が側侵され、遺跡の西端部分は欠落崩壊が目立ち、相当部分を失っている。一方、山麓は高松沢の扇状地堆積物に覆われ畑作地となっている。



挿図2 地形及び地質図

(2) 地形形成史

松本盆地の形成 松本盆地東縁から上田盆地・長野盆地にかけて、標高800~1500mの山地が分布する。更新世前期末（80~100万年前）に形成された隆起準平原で、この起伏面は大峰面群（小林・平林、1955、仁科、1972）と呼ばれている。

更新世中期初め（約60万年前）、大峰面群を切って松本盆地の陥没が始まり、盆地を形成する過程で長峰山地は700~800m内外に二段の緩傾斜面・肩状尾根を残した。上位面は約40万年前、下位面は中期後半の堆積物（松本盆地団研グループ、1972）と推定され、一連の河床礫層が分布する高位段丘である。

その後、高位段丘の堆積面を切って傾動隆起〔長峰～光城山～上ノ山を通る南北方向の稜線を主分水嶺とし、山麓線から東へ2~2.5kmの幅で緩く東に傾動した隆起運動。〕（山下ほか、1980）が起こり、盆地の相対的沈降によって長峰山地西斜面には、断層崖の三角末端面が南北に直線状の配列を生じた。盆地は形態が整うにつれ、梓川など諸川によって大規模扇状地の埋積が進み、砂礫に覆われ、やがて犀川丘陵地帯に出口を求めて、グレードに達して安定した。

盆地内部では、更新世中期の堆積物を覆って多量の砂礫（盆地中央では約360mの厚さ）が供給され、さらにアルプス側の急激な隆起によって盆地西側では、扇状地が形成された。盆地西部と南部に広く発達している波田面最終形成期は、2.7万年前（松本盆地団研グループ、1977）と推定されている。その後、一面に乗鞍岳の剣ヶ峰の降灰に覆われた。更新世の終焉、1万年前である。

丸田段丘面の形成と梓川の変遷 完新世に入って盆地の隆起が進み一面に扇状地端が削られ、次い

で地盤の上昇は停止して砂礫の堆積が始まり、安曇野の主要部分である丸田段丘面が形成された。丸田面の存分な堆積が終了すると梓川は、北進の流路を捨て東進への河道を求め、直線的に東へ進むようになった。また乱流によって丸田段丘縁を洗っていた流れは、平瀬西で奈良井川を合わせて北流の河道をとるようになり、熊倉西に低地帯をつくって流れた。そして河道の遷移は差別侵食を伴い、熊倉－徳治郎西側の西河原および現河道沿いの東河原との両者を交互に流れた。熊倉の分離丘陵である台地は三方を侵食崖で切られ、丸田面形成以降の変遷のあとを残している。

光段丘の形成 一方、東縁山麓では、南北に細長く張り付いて光段丘が続く。この段丘は岩石段丘で、最上位の野田面は基盤岩の上を3m内外の河床礫層が覆っている。これは完新世初期の丸田面相当層の扇端が、この地域まで飛び地的に延びていたことを示すもので、その後、押野橋－徳治郎西－熊倉西－平瀬西を結ぶ線を境にして間欠的な隆起また上昇の停止が繰り返されることによって、光段丘は犀川の大幅な侵食を被り、下流に向かって階段状に北村面や明科面を刻んでいく。

町田遺跡や北村遺跡の立地する第二段丘面は、野田面の侵食が進んだ後、上昇の停止によって形成された。北村遺跡では遺跡の発掘を通して、段丘面の離水期を完新世前期と推定している。

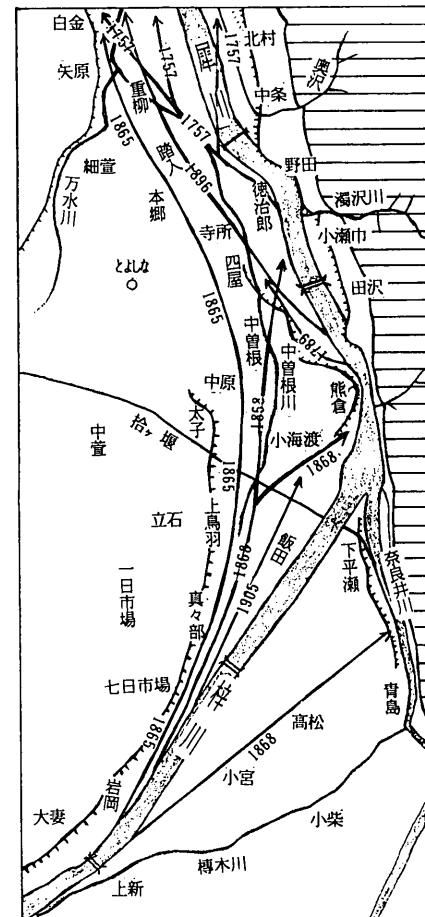
犀川河道の変遷 やがて、東の河道をとっていた犀川は熊倉川原田から西へ曲流して小侵食崖をつくり、徳治郎の西の中曾根川筋に流路をとった。それによって徳治郎地域は自然堤防化して背後の濁沢川合流地付近には、後背湿地が形成された。町田遺跡の人々は、ここに水田経営を求めたものと思われる。

歴史時代になって東縁部は隆起期に転じて、特に堤防のなかった近世以前は犀川河道の変遷はおびただしく、徳治郎地域の西側や東側を交互に流れて堆積面を洗い、野田地籍の字「白崖」付近は側侵を受けて欠落し後退を強いられていった。

近世以降も、幾度も洪水に見舞われる(挿図3)。元禄11年(1698)の書上帳によると、寛文9年(1669)の大洪水により、徳治郎北の粟田口から瀬筋が中条・北村の崖下に向かい、その瀬筋が新川となった。下流の塔の原では延宝2年(1674)の洪水で川筋が東へ寄ってしまい、宝暦10年(1760)堤防を作るに当たり、郡境(松本藩領と幕府領との境)が裁定された。これに基づき、その後、当時の氾濫河道境がそのまま郡境や町境に踏襲されて、現犀川河道西方に境界が所在する所以とされている。

(3) 地質

地質の概観 松本盆地の西には、約2000mの標高差で、中・古生層の北アルプスが連なっている。



挿図3 近世の洪水経路

1 地形と地質

一方、東側には標高差1000m内外の筑摩山地が広がり、南端には八ヶ岳連峰などの火山群が噴出している。

この両者を分ける境界線が糸魚川—静岡構造線である。この構造線より東側は、中生代末（6500万年前）から第三紀中新世前期末（約1800万年前）にかけて生じた陥没に海浸して底に厚い地層を堆積したフォッサマグナ（大地溝帯）と呼ばれる地域である。

地層は、約1600万年前～400万年前にかけて海に堆積した泥岩・砂岩・礫岩・凝灰岩などと、約500万年前～300万年前に噴出した火山岩類を含めた第三紀層、さらに約180万年前から現在までの間に、陸上で堆積した泥や砂礫・火山灰などの第四紀層から構成されている。

この地域に分布する地層は、第三紀中新統の別所層・青木層と一部鮮新統の大峰帶である。段丘や氾濫原はこれらの地層を基盤として、凹凸面を2～10mほどの河床礫が覆い、その上面は粘土層や砂層・細角礫層などが堆積し、扇状地地形や崖錐地形を形成している（挿図2）。

（ア） 基盤岩

別所層 松本市宮淵付近から奈良井川の川底を熊倉の台地へと延び、松本市下田の犀乘沢付近から東は四賀村、北は長峰山地の西斜面を通り、犀川に沿って生坂村に延びる。

岩相は、一般に静穏な堆積環境を示す黒色頁岩や泥岩からなる。ところによっては泥岩と砂岩の互層がはさまり、基盤の展張部にできる海緑石を含む岩脈状砂岩も多数見られる。泥岩は、剝離性に富んでいて風化すると小塊片にくずれ易い特長をもつ。そのため各地で山肌を現わし、小渓流の出口には扇状地の形成が目立つ。地層の厚さは、東方の四賀村で最も厚く2470mに達し、田沢付近では800m内外、生坂村では150mほどと急速に薄くなって尖滅する。

化石は多種多量に産出する。四賀村ではハクジラ・マッコウクジラの全身骨格が発見されており、各地でニシン科・イワシ科などの魚骨やうろこの化石が産出する。

青木層 砂質泥岩・砂岩・礫岩などから構成されるが、最も一般的なものは砂質泥岩と砂岩の互層である。軟弱な岩質のため風化して崩れやすく、水に溶解してしばしば地すべりを発生させる。濁沢川下流の田沢鉱泉付近や奥沢付近では、比較的連續性に富む礫岩または礫質砂岩を基底部とした泥岩砂岩互層からなる。厚い砂岩（厚さ1m以上）や砂優勢互層もはざまれる。泥質部や互層部は暗灰色の砂質泥岩で、海底地すべりによる地層が変形した部分が各所に見られる。また板状の砂岩部分には漣痕などの堆積構造も発達して、浅い海底での堆積環境を示している。濁沢川支流の柏沢と小松沢にはさまる白牧向斜に沿う地域では、含礫砂質泥岩層に花崗岩などの巨大礫（250×180×220cm, 他）が多数埋没しており、フォッサマグナの古地理復元に新たな問題を提起している。田沢神明宮の船石（360×140×110cm）は、これの抜け出したものである。

化石は貝類の産出が多い。柏沢と四賀村麻生からは、アロデスマス（トドやセイウチの先祖でアシカに似た海棲哺乳類）の頭骨化石が発見されている。

大峰帶 北部フォッサマグナの海は、中新世後期末に生坂村地域を最後に北方へ退いていったが、明科町押野地域では最後まで、堆積盆としての海が北から奥深く湾入して残っていた。この海は、糸魚川—静岡構造線の活動に伴って形成されたもので、北安曇郡小谷村から明科町西部まで東西2～7km,

南北65kmの範囲におよんでいる。この地帯を大峰帯と呼ぶ。

大峰帯は、鮮新世後期～前期更新世の頻海デルタ相またはデルタ相の礫岩など粗粒堆積物からなり、一部に酸性凝灰岩をはさんでいる。凝灰岩のK-Ar年代は290万年前（加藤・佐藤, 1981）といわれる。礫種はチャートなど古生層のものが主だが、第三紀の砂岩も含まれ、礫はもろく割れ易い。

最近、犀川の洪水で発電所堰堤下流の河床が洗われた折に光橋付近で、くさり礫化した凝灰質礫岩や薄い凝灰岩と断層で接した青木層の泥岩が露出した。また長野道工事の際、北村の段丘端に同様な地層が現われた。これによって大峰帯の地層は、盆地砂礫層の基盤となって徳治郎および光地域まで延びていることが確認された。

(イ) 段丘礫層

第一段丘礫層(高位段丘I) 長峰林道のデータボッチ付近に分布する。礫種は花崗岩や硬砂岩・チャート・粘板岩など指頭大～人頭大の円～亜円礫で、礫間を中粒砂が埋めている。

上部に風化して金色になった黒雲母が散在することから、梨ノ木礫層の結晶火山灰（松本団研グループ, 1977）に対比される。梨ノ木礫層の結晶火山灰フィッショントラック年代は、約40万年前（鈴木, 未公表）とされているので、本礫層の形成年代も同程度と推定される。河床から250mの高所に分布しており、長峰林道の礫層は11mの厚さを示す。

第二段丘礫層(高位段丘II) 長峰山地西斜面の肩状尾根を形成する。解析が進んでいるため、礫層の分布は法音寺山など一部に限られる。礫種は第一段丘礫層と大差ない構成である。

同層準の四賀村反町松原では、礫層上部の火山灰質シルト層に白色軽石などが含まれ、風化火山灰に覆われることから片丘礫層（松本盆地団研グループ, 1977）に対比され、約15万年前の形成と推定される。河床からの比高は180mほどで、先端は断層崖となっている。

第三段丘礫層(低位段丘I) 松本－明科間では、第二段丘礫層の堆積面を切って断層崖の三角末端面が直線的に配列している。この直下に一段と高くなつて分布する野田などの段丘面を形成する礫層である。

野田面では、基盤岩を淘汰良好な砂礫層が3～5mの厚さで埋めている。礫種は現河床礫と同様の構成で、砂土のレンズ状薄層を挟んでいる。風成火山灰の被覆は見られない。段丘端付近では押し出し堆積物の被覆が及ばず礫層が露出する。河床より25mほどの高さに広がる。

第四段丘礫層(低位段丘II) 堆積が進行した盆地は隆起に変わり、河川は曲流して低位段丘Iを側侵下刻していく。やがて離水して形成されたのが、低位段丘IIの町田面である。滑走斜面を通して、基盤岩に厚さ2m内外の砂礫層が重なり、その上面を3mほどの泥土が覆う。

北村遺跡の発掘により、「遺構が縄文時代中期中葉を遡らない。東縁断層の垂直変移速度は3.5～2.7mm／年（小口, 1990）」という資料が得られ、形成年代を縄文時代早期末～前期（関, 1993）と推定した。町田面の形成年代も同程度と思われる。河床から20mほどの高さに分布し、段丘崖の保存は良好である。

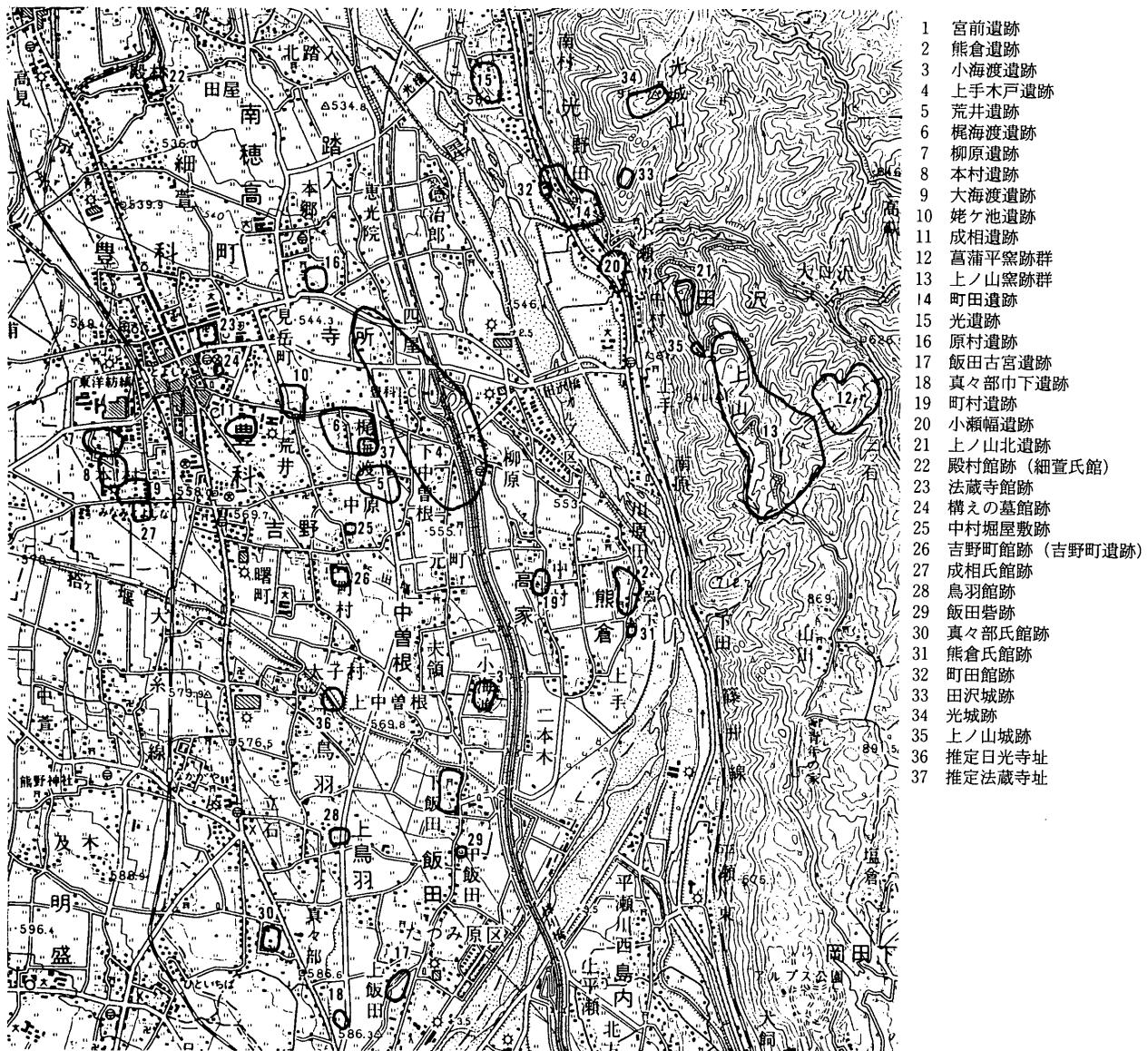
第五段丘礫層(低位段丘III) この段丘面は、光橋付近から始まり、北方へ河床との比高を増して明科に至り会田川に限られる。末端の明科では、河床からの高さは10mほどで、段丘崖は明科町宮本で一部不明瞭になるものの全般的に保存は良好である。段丘端の竜門淵遺跡からは、弥生～古墳の祭祀遺物

1 地形と地質

が出土している。基盤岩を覆い、3 m 内外の河床礫が重なる。表土は50cmほどで、粘土分に富んだ土壤が被覆する。山麓から離れているため、扇状地は形成されていない。

氾濫原堆積物 犀川の現河床付近に発達した河原の堆積物である。梓川および犀川の氾濫による砂礫層が中心で、熊倉付近を境として地質構造が反映される。以南では隆起傾向にあって河床に基盤岩が表われ表床流となっており、以北では逆に沈降して砂礫が堆積中で、しばしば洪水に直面して湧水地帯を形成している。

押し出し堆積物 後背山地の地質を反映しており、一般的に小溪流が運んだ別所層起源の泥岩細角礫土からなる。山麓沿いに段丘面を覆い、半径170~300m 内外の小高い小扇状地や崖錐をつくる。出水期の堆積が顕著で、天井川の性質を持つ。粗粒で粘土分を欠き保水性に乏しいため、現在なお堆積が進行している。



挿図4 周辺の遺跡

2 周辺の遺跡

町内の遺跡 豊科町は北アルプス山麓に広がる安曇野の南東に位置し、地形的には肥沃な水田地帯となっている平地と犀川右岸の東山に大別される。

扇状地の複合より成る平地では、梓川をはじめとする各河川の影響で各所に砂礫の厚い堆積がみられる。一方、100cm以上の深い耕土帯も存在する。したがって、遺跡はわずかな遺物出土地が「点」として知られているのみで、その広がり・性格等は不明なものが多い。また、過去に紹介されている遺物もその所在が不明であったり、出土地点が明確でないものが多い。発掘調査も今までに数例しか行われていない。このように町内の遺跡を述べるには必ずしも資料に恵まれていないが、以下、時代毎に概観していきたい（挿図4）。

縄文時代の遺跡 先土器時代にさかのぼる遺跡は現在のところ発見されていないが、縄文時代には犀川段丘上から東山にかけて遺物の出土が知られている。犀川左岸段丘上の熊倉遺跡で打製石斧・凹石、右岸段丘上の光遺跡では中期土器の出土が記録されている。東山山中では1986・87年に行われた窯跡群の発掘調査の際、五領ヶ台式土器を主体に早期から中期にかけての土器と石鏃が出土している。また、平地部では、1990年発掘の吉野町遺跡（吉野町館）、1992年発掘の鳥羽遺跡（鳥羽館）で石鏃が出土しており、成相遺跡でも打製石斧の出土が報告されている。

弥生時代の遺跡 弥生時代には、光城山山麓から犀川段丘上にかけて町田遺跡が形成される。瓦の粘土採取中に発見された遺跡で、多くの土器・石器が採集されている。また、東山山中（菖蒲平窯跡群）で磨製石鏃の出土がある。

古代の遺跡 古墳時代の遺構・遺物は現在のところ確認されていないが、奈良・平安時代には、宮前遺跡・小海渡遺跡・真々部巾下遺跡・鳥羽遺跡・吉野町遺跡・荒井遺跡・梶海渡遺跡・柳原遺跡・本むら村遺跡・大海渡遺跡・姥ヶ池遺跡・成相遺跡・原村遺跡等、各所で遺物の出土が報告されている。このうち、鳥羽遺跡・吉野町遺跡・梶海渡遺跡で発掘調査が行われ、それぞれ1棟・8棟・1棟の竪穴建物（住居）が発見された。広大な沖積地の開発が進んでいたことが窺われるが、建物はいずれも9世紀後半に位置づけられ、集落は継続していない。

一方、東山山中では須恵器窯跡群が形成される（上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群）。1986・87年、ゴルフ場造成に伴い行われた発掘調査では8・9世紀代の須恵器窯跡17基、竪穴建物26棟などが発見された。芥子望主山から会田盆地にかけて形成された窯跡群の一つの中心をなし、その製品は広く松本平に供給されている。

中・近世の遺跡 中世～近世には殿村（細萱氏）館跡、真々部氏館跡をはじめとする多くの城館が築かれる。とりわけ、大伴氏の系譜に連なる細萱氏の居館殿村館の築造は中世前期に遡るとされており、安曇野の開発の拠点として果たした役割は大きい。他は戦国期以降の築造とされる。いずれも松本から安曇への交通の要衝で、以後集落の中心として現在に至っている。吉野町館と鳥羽館では発掘調査が行われ、その内部構造が明らかにされている。

一方、この時代の集落址に上手木戸遺跡がある。1986年、長野自動車道の工事に先立ち発掘調査が行

3 既往の調査

われ、内耳土器を伴う竪穴建物、掘立柱建物等が検出されている。また、1991年に発掘された梶海渡遺跡では多くの墓址が発見され、1506～1611年に当地に所在したと伝えられる法藏寺址ほうぞうじに関連する遺構と考えられている。

3 既往の調査

遺跡の発見 遺跡のある豊科町大字田沢字小瀬幅は江戸時代（天保年間）から昭和59年にかけて製瓦が盛んで、最盛期には9軒、11基の窯が操業していたという。その粘土が町田の水田で求められ、広範囲で土取りされたという。その際に多量の土器・石器が出土したことにより、遺跡が発見された。

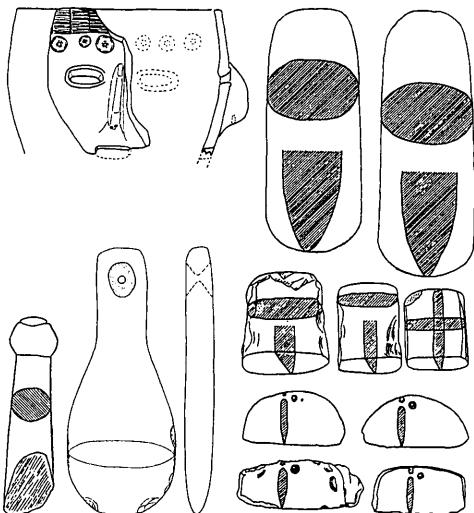
1968年発行の『南安曇郡誌』によれば、「採土跡のいたるところで遺物が採集され」とあり、簾状文を施した甕や壺、大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・磨製石包丁、さらには石棒などが紹介されている。また、その後も、田の畦等から遺物が採集されており、石鍬や、人面付土器などが報告された（⁽¹⁾ 挿図5、山田1984・島田1995）。

町郷土博物館収蔵の遺物 これらの遺物の多くは個人蔵であるが、一部は豊科町郷土博物館が収蔵している。長らく未整理のままであったが、1992年から洗浄を実施し、次第に内容が明らかになってきた。今回その一部を提示したが、土器には弥生時代中期後半に属するもの他に後期終末と考えられるもの、平安時代の須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器なども含まれていた（第3章参照）。従来知られていた弥生時代だけでなく、古代にも集落が広がっていたことが予想されることとなった。

確認調査 1980年以降、遺跡内への仮設事務所設置、水道管敷設等に伴い立ち会い調査を、また宅地開発計画に伴い、数度の確認調査を実施した。その結果、JR東脇で、地表下3mに弥生土器を包含する層を確認した他、数地点で遺物の出土を認めた。しかし、厚い堆積とおびただしい出水、粘土採取による破壊等によって遺跡を十分に把握することはできなかった。

北村遺跡の調査 町田遺跡の北方2kmには縄文人骨を多量に出土したことで著名な北村遺跡（東筑摩郡明科町）がある。町田遺跡とほぼ同様の立地で、1987年の調査で古代の竪穴住居址19棟、掘立柱建物址48棟、弥生時代の竪穴住居址1棟に加え、現地表下6mに縄文時代の住居址58棟と墓壙469基が発見された。遺跡は粘土層に挟在しており、町田遺跡でも同様に縄文時代の遺構が存在する可能性を考えられた。

町田館 町田遺跡付近は応永7（1400）年の大塔合戦に出陣した田沢氏の居館のあったところで、長子あるいは夫人が所持していたとみられる「部屋田」などの字名も残っている。また、背後の山上には光城・田沢城がある。しかし、現在のところ、館跡に係る遺構・遺物は発見されていない。



插図5 町田遺跡既出遺物
(山田1984、島田1995より)

註

(1) この他に、1950年ころ、松商学園高等学校地歴部により調査(採集)されていることを、桐原健氏からご教示いただいた。しかし、今回、その遺物を確認することはできなかった。

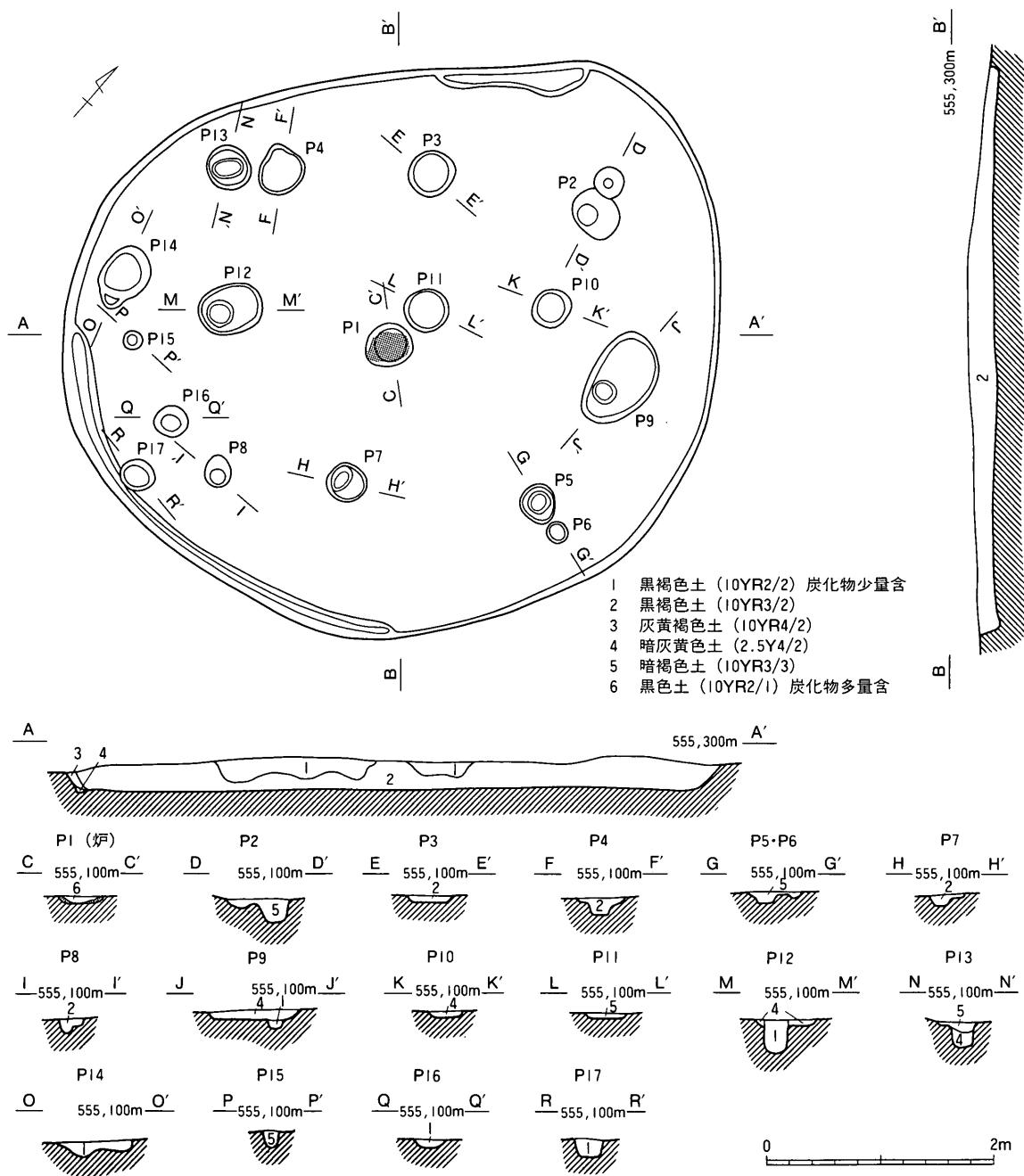
参考文献

- 小口 高 1990 「松本盆地中部における活断層の垂直変移速度」『活断層研究』No.8
- 小林国夫・平林照雄 1955 「松本盆地周辺のいわゆる“山砂利”について」『地質学雑誌』61巻712号
- 島田哲男他 1995 「考古」「豊科町誌」
- 関 全寿 1962 「松本市北部の地質構造」『信大教育学部松本分校科学教育報告書』No.1
- 関 全寿 1984 「地形地質」『明科町史上巻』
- 関 全寿 1989 「松本盆地東縁河岸段丘面に於ける埋積過程の一様相－北村遺跡の発掘を通して－」『田中邦雄教授退官記念論文集』
- 田中邦雄・関 全寿 1966 「松本市北方の第三紀層」『信大教育学部研究論集』No.18
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14 北村遺跡』
- 仁科良夫 1972 「大峰面の形成過程」『地質学論集』No.7
- 仁科良夫 1983 「松本盆地北部の陥没過程」『地球科学』37号
- 仁科良夫 1991 「松本盆地東方、田沢～大口沢の巨大礫の起源」『地質学雑誌』97巻9号
- 松本盆地団研グループ 1972 「松本盆地の第四紀地質の概観」『地質学論集』No.7
- 南安曇郡郡誌改訂編纂会 1956 『南安曇郡誌、第一巻』
- 南安曇郡郡誌改訂編纂会 1968 『南安曇郡誌、第二巻歴史(上)』
- 山下昇・他2名 1980 「松本盆地東縁、明科～田沢間の山麓の地質と地形」『島弧変動』No.2
- 山田瑞穂 1984 「町田遺跡出土の石鉤」『中信考古』創刊号

第3章 調査の結果

1 調査の概要

調査の概要 調査はJR及び国道との交差部分を除く工事区域内全面を対象にした。発掘面積は1350m²である。各所で瓦粘土採取及び暗渠設置による攪乱を受け、遺構の遺存状況は悪い。特に、A区東側はほとんど面として残っていなかった。また、幅16mと細長い調査区となったため、部分的な調査



挿図6 SB1実測図

にとどまった遺構も多い。なお、調査区の層序は第5章に示し（挿図27）、考察を加えた。

遺構と遺物の概要 検出した遺構は竪穴建物10棟、掘立柱建物3棟、土坑18基、ピット232個、溝22本である。土坑のうち、攪乱の著しいA区東側に認められた2基は焼けており、これらを炉とする建物（住居）が存在した可能性も高い。また、ピットの中には柱痕をもつものが多く、掘立柱建物もさらに多くあったとみられる。遺物には多くの弥生土器及び石器・石材がある。その量は整理用コンテナ40箱に及ぶ。なお、遺構検出中、A区西側の広範囲でまとまった量の遺物を得た（遺物包含層）。これらは攪乱によるものと判断し、一括して取り上げている。

時期的には、いずれも弥生時代中期後半におさまる。なお、調査区端から須恵器を2点採集した。既出遺物にも須恵器・黒色土器・灰釉陶器がみられることから、古代の集落も在った可能性が高い。しかし、遺構は確認できず、土層の状況からも、調査区内では粘土採取・開田により既に失われたものと考える。また、町田館跡に係る遺構・遺物の発見もなかった。

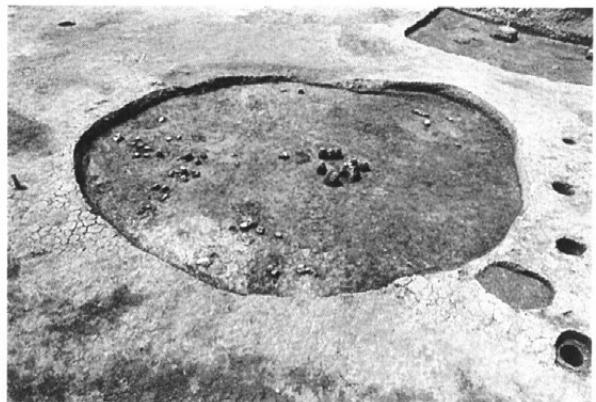
2 遺構

（1）竪穴建物（図版22～25）

A区で3棟、B区で7棟の計10棟確認した。また、この他にA区中央東寄りに焼土の堆積した土坑2基（SK6・7）を確認した。既に削平されてしまったものの、これらを炉とする竪穴建物が存在した可能性が高い。建物はいずれも住居址として認められるものである。

S B 1 B区東側中央に位置し、北西側は粘土採取により攪乱を受ける。にぶい褐色土を掘り込んで構築されており、平面形は6.0×5.0mの長楕円形を呈す。壁高は25cmで、ほぼ直に掘り込まれる。床面はやや凹凸があるものの平坦で、南側及び北西側に浅い周溝を認めた。炉は中央にある。径40cmの浅い地床炉で、壁面が焼け、内部に炭化物が多量に詰まっていた。ピットは14個あった。ほぼ、二列に通っており、うち、P2・3・5・7・8・13が主柱穴と考えられる。覆土は黒褐色土で、中央にプロック状に炭化物を含んだ層（1層）が入る。また、南西壁際には、壁または周堤の崩落と考えられる層を認めた。

遺物は、中央の覆土中位と南東側床面から集中的に出土している（挿図7）。石器・石材は計69点あり、特に南東側からの出土が目立った。製品では磨製石鎌・扁平片刃石斧・打製石斧・スクレイパーなどがある。特にスクレイパーが14点と多い。また、磨製石鎌の未製品も多く認め、建物内で製作されていたと考えられる。土器には壺・甕・鉢等がある。1は南西側床面、2～4は南東側床面、5は炉の東横からの出土である。6は1層からの出土で混入と見るべきか。



挿図7 SB1 遺物出土状況

S B 2 B区東側南端に位置する。調査地端の

2 遺構

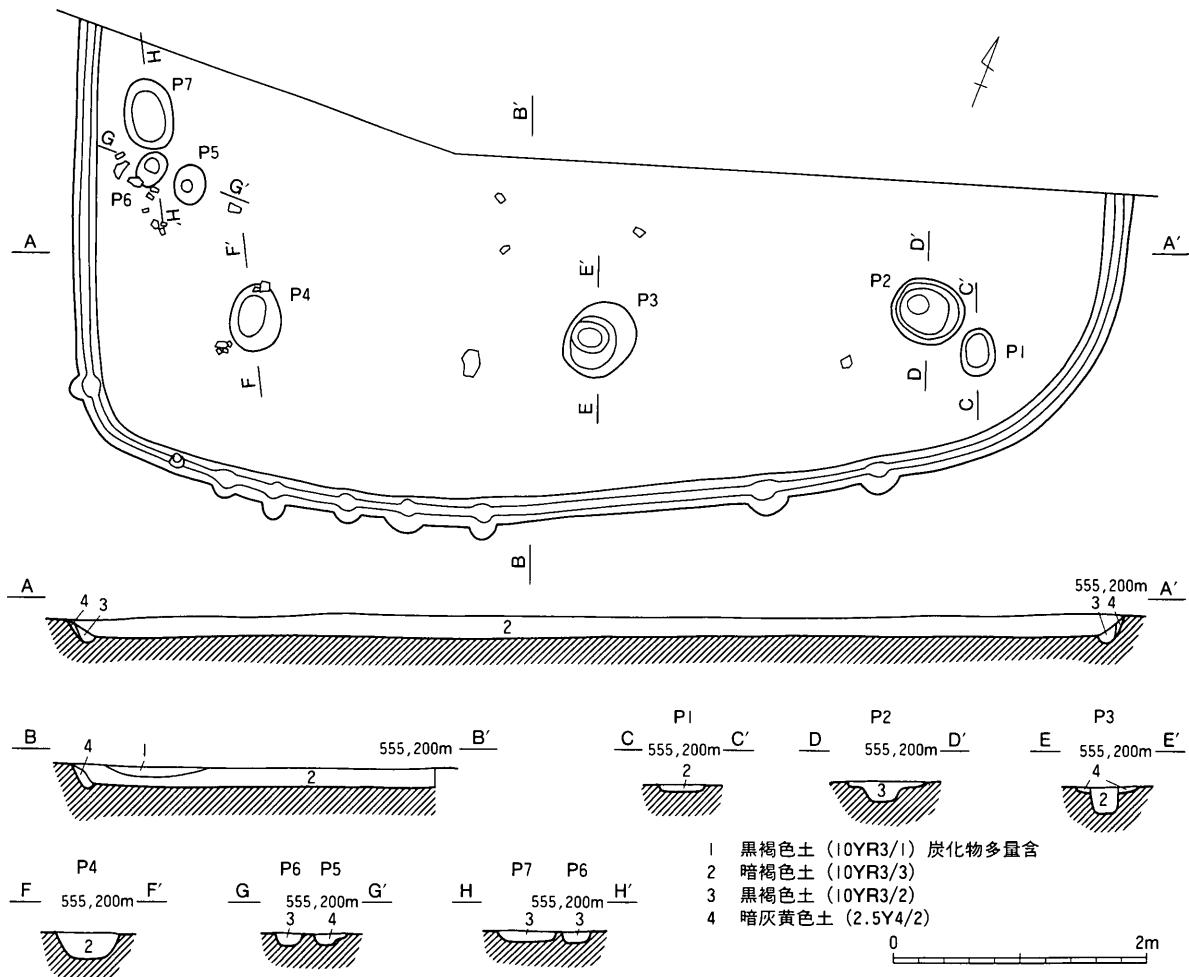
ため、隅部を発掘できただけである。全体的に粘土採取による攪乱を受け、壁が不明瞭であった。また、中央部床面にも溝状に攪乱が及んでいる。覆土は暗褐色土の単層で、床面は平坦で堅緻だった。

ピットを2個認め、う

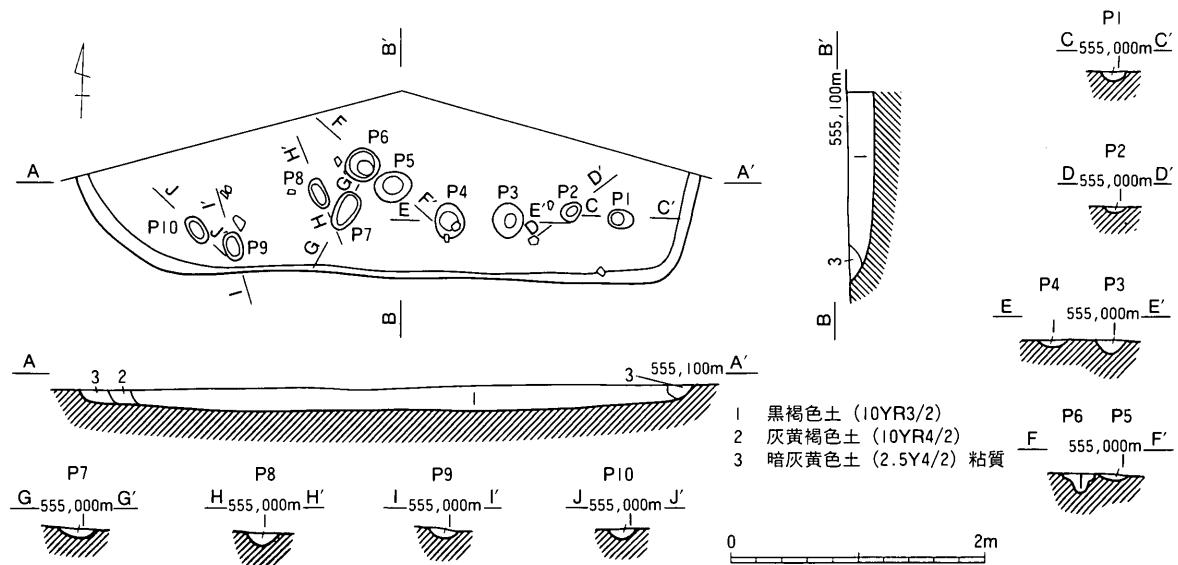
ち、P1の中位以下からいれこ状になった2個体分の土器大片(15・16)を得た。うち、甕(15)には使い込みによる多量の炭化物の付着が認められた。

遺物はP1から出土したもの以外に、土器小片と打製石包丁などが得られたのみである。

S B 3 B区東側北端に位置する。調査地端のため、南側約三分の一を発掘しただけである。小礫混じりのにぶい褐色土を掘り込んで構築しており、平面形は西壁が角張る長楕円形を呈す。長径が8.3mを測り、S B 5とともに、今回発掘した中では最大規模の建物である。上位は粘土採取によって飛ばさ



挿図9 S B 3 実測図



挿図10 SB 4 実測図

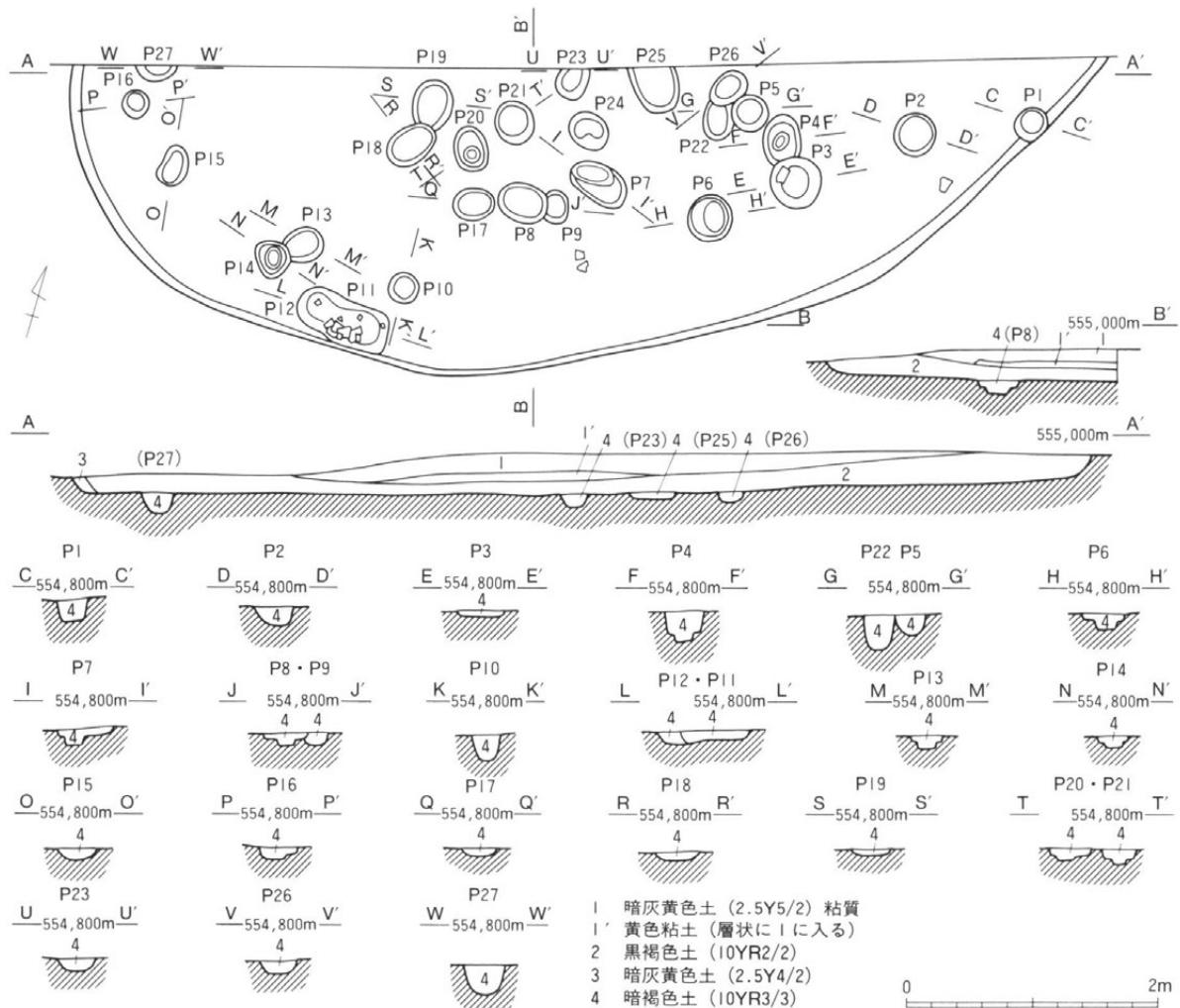
れており、残存する壁高は約15cmを測る。覆土は炭化物を少量含んだ暗褐色土で、壁際には黒褐色土・暗灰黄色土が流れ込んだように堆積していた。床面は平坦で、壁際に2～3cm掘り窪めた周溝が巡る。周溝内に、約50cm間隔で浅く小さいピットを認めた。壁の上面も対応してわずかに突出しており、壁構築に伴い杭材をいたれた痕と理解する。床面ピットは7個認め、うち、P2・3・4を主柱穴と考えた。炉は発見されなかった。

遺物は西側床面から集中して出土した。特に石器・石材が67点と多い。剝片、碎片が主体だが、磨製石鏃及びその未製品、スクレイパーなどの出土がある。また、中央やや南寄りの床面に径20cmの砂岩平石を認めた。土器には口縁部のやや立つ壺、等間隔止めの簾状文を施した甕、高壺などがある。高壺(24)は南西側周溝からの出土。

SB 4 B区やや東側の北端に位置する。調査地端のため南側がわずかに調査できただけである。小礫混じりの褐色土を掘り込んで構築しており、平面形は西側が丸みをもつ不整方形を呈す。壁は南と東が斜めに、西は緩やかに掘り込まれる。覆土は炭化物を含む黒褐色土で、壁際にはやや粘質の灰黄褐色土及び暗灰黄色土が流れ込んだように堆積していた。周堤の粘土が入り込んだものであろう。床面は平坦で、10個もの小ピットが並ぶ。いずれも浅く、埋土も著変ないことから、主柱穴と考えられるものはない。

遺物は床面よりやや浮いて出土した。石器には磨製石鏃未製品、スクレイパー、敲石があり、土器には赤彩を施した鉢、壺、甕などがある。

SB 5 B区中央北端に位置する。上位及び西側に粘土採取による攪乱が及び遺存状況は悪い。残存部で径8.2mを測る大型の建物であるが、調査地端のため南側約三分の一を調査できただけである。褐色土を掘り込んで構築しており、平面形は楕円形を呈す。壁はほぼ直で、残存する最大壁高は約30cmを測った。覆土は三層に分かれ。上位が暗灰黄色土で、黄色粘土の間層を挟んで、下位に黒褐色土が堆積する。全体的に粘性に富む。床面は中央でやや凹凸が認められるものの平坦だった。ピットは27個認



挿図11 SB 5 実測図

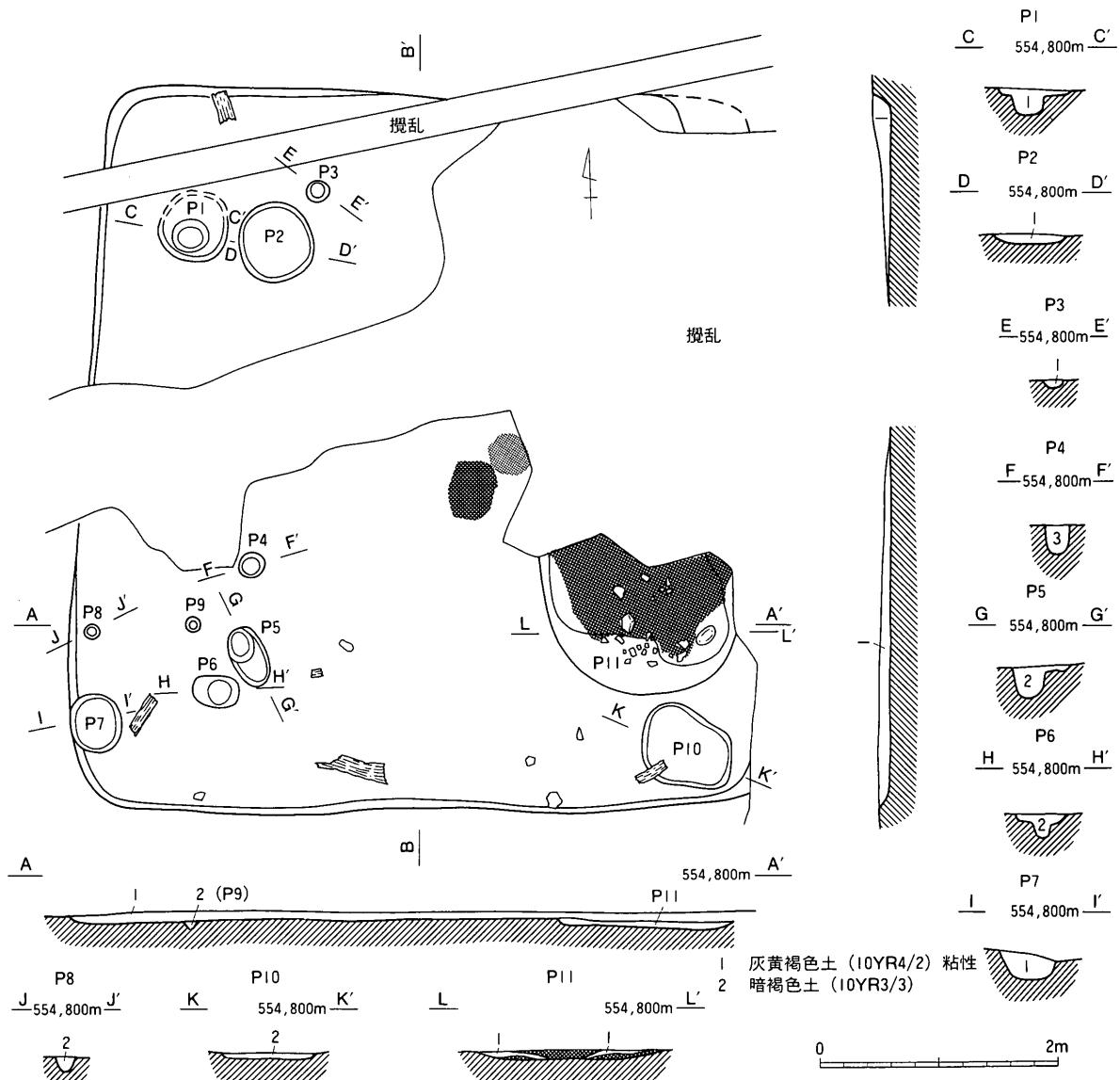
めた。いずれの埋土も暗褐色土で、浅く皿状のものが多い。

遺物は東側覆土中と P11からまとまって出土した。石器は砥石・磨製石鏃未製品、スクレイパーなどと多量の剝片、碎片が出土している。土器には壺・甕・高坏の脚部と思われるものなどがある。

SB 6 B区中央に位置する。粘土採取による削平及び暗渠により大きく攪乱を受け、遺存状況は悪い。特に東側は壁が残らない。褐色土を掘り込んで構築しており、平面形は、一辺5.9mの方形に復元できる。残存する壁高は約10cmで、ほぼ直に掘り込まれている。床面は平坦で、中央に焼土と炭化物の散布を認めた。また、壁際の床面直上で、幅10cm、長さ20cmほどの薄いヒノキ科の材を多く認めた（挿図12、第4章参照）。ピットは11個ある。うち、P 1・6 が主柱穴になろう。南東隅のP 10・11は大型で皿状のものである。



挿図12 SB 6 材出土状況



插図13 SB 6 実測図

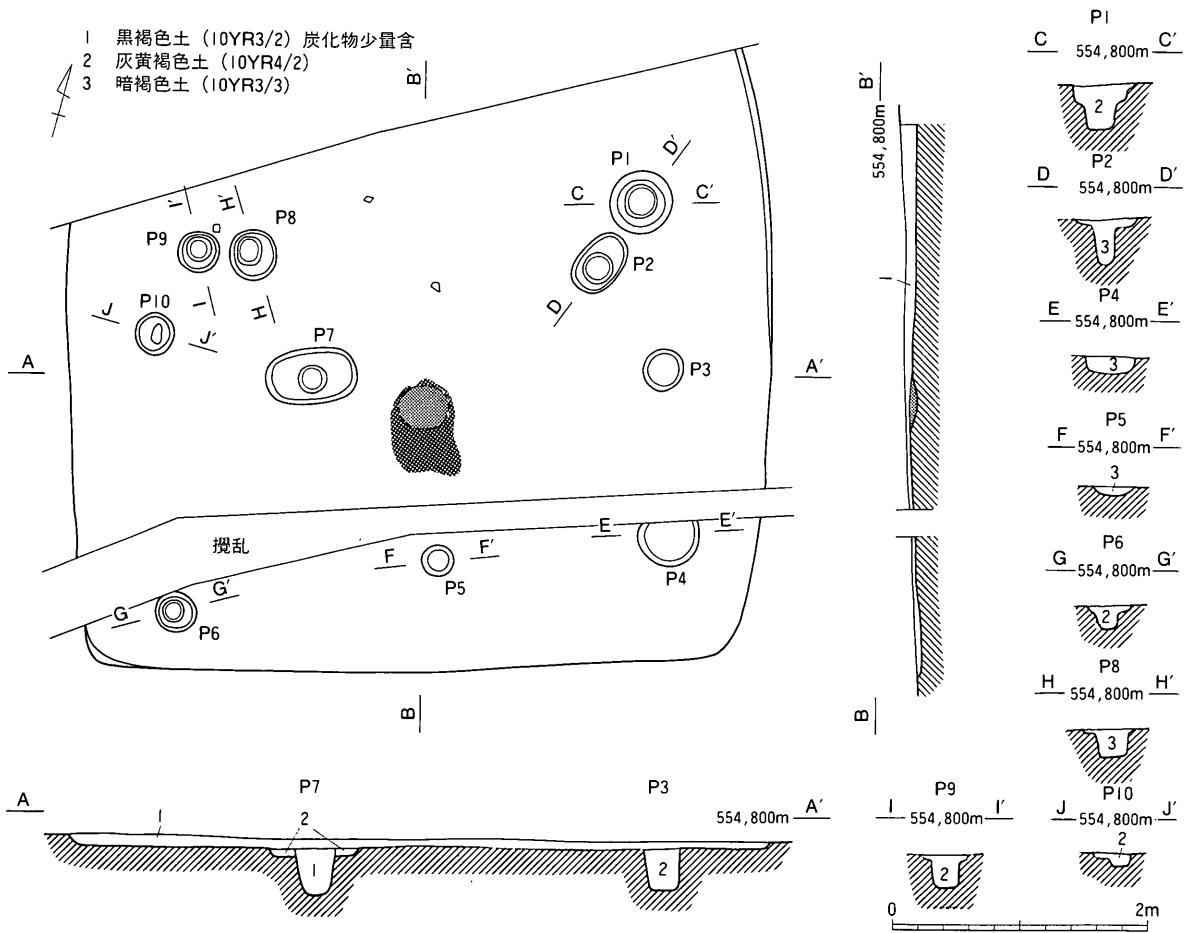
遺物は南東隅から集中的に出土している。特にP11の中央からは炭化物とともに多量の土器・石器を認めた。土器には壺・鉢・甕がある。石器には扁平片刃石斧、打製石鏃、磨製石鏃未製品などと多量の剝片・碎片がある。また、砥石と考えられる花崗岩の台石も出土している。

S B 7 B区西側北端に位置する。S T 2に切られ、粘土採取及び暗渠により攪乱を受ける。壁の立ち上がりは、調査地端以外ほとんど残っておらず、南側はしまった面を床面ととらえ、プランを確認した。平面形は一辺5.6mの方形で、中央に地床炉を持つ。床面は平坦で、10個のピットを認めた。位置的にはP1・3・4・6・7・9が主柱穴にふさわしいが、P2・8も柱痕を持っている。北側の柱は建て替えられたとみた。

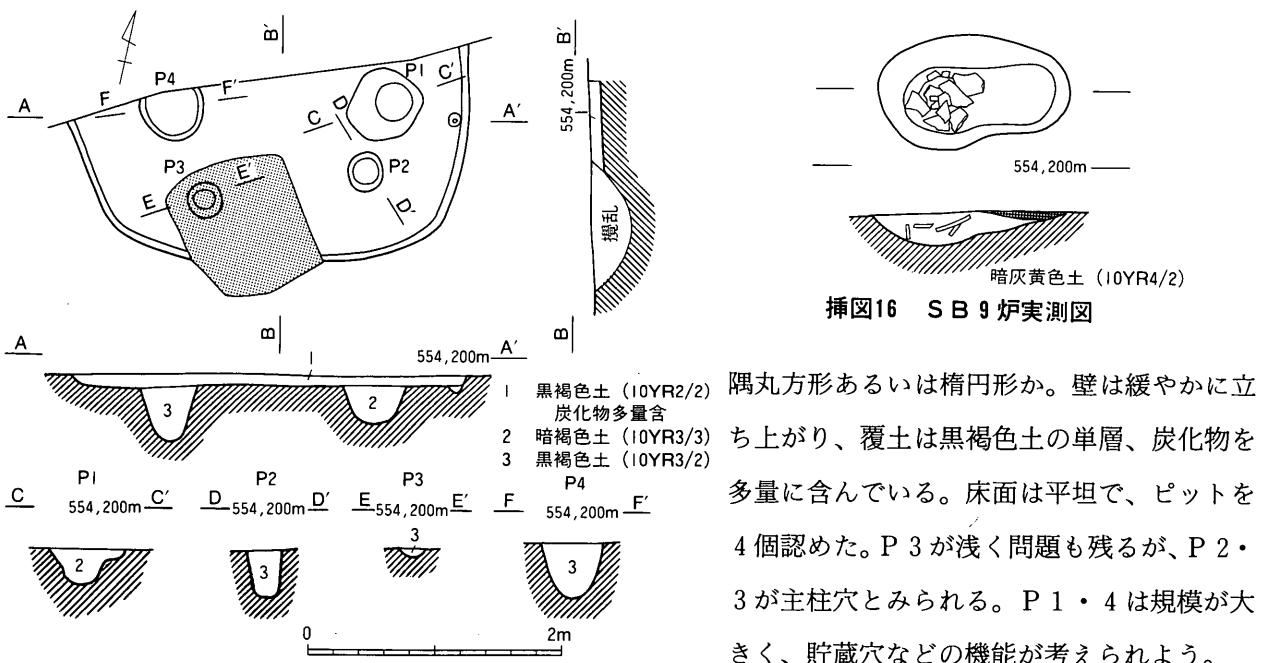
遺物は北西側床面からまとまって出土しているが、量的には少ない。土器には壺・鉢・甕があり、石器には磨製石鏃未製品・スクレイパー・石錐がある。

S B 8 A区西側中央に位置し、褐色土を掘り込んで構築している。S B 9・S D 8を切るが、南側は攪乱を受け、東半は試掘トレンチにより失われている。平面形は明らかでないが、一辺3.2mほどの

2 遺構



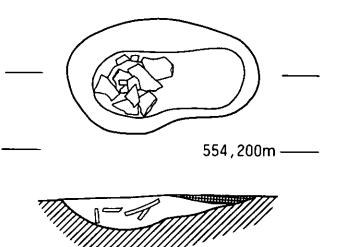
插図14 SB 7 実測図



插図15 SB 8 実測図

品・剝片・碎片が出土している。

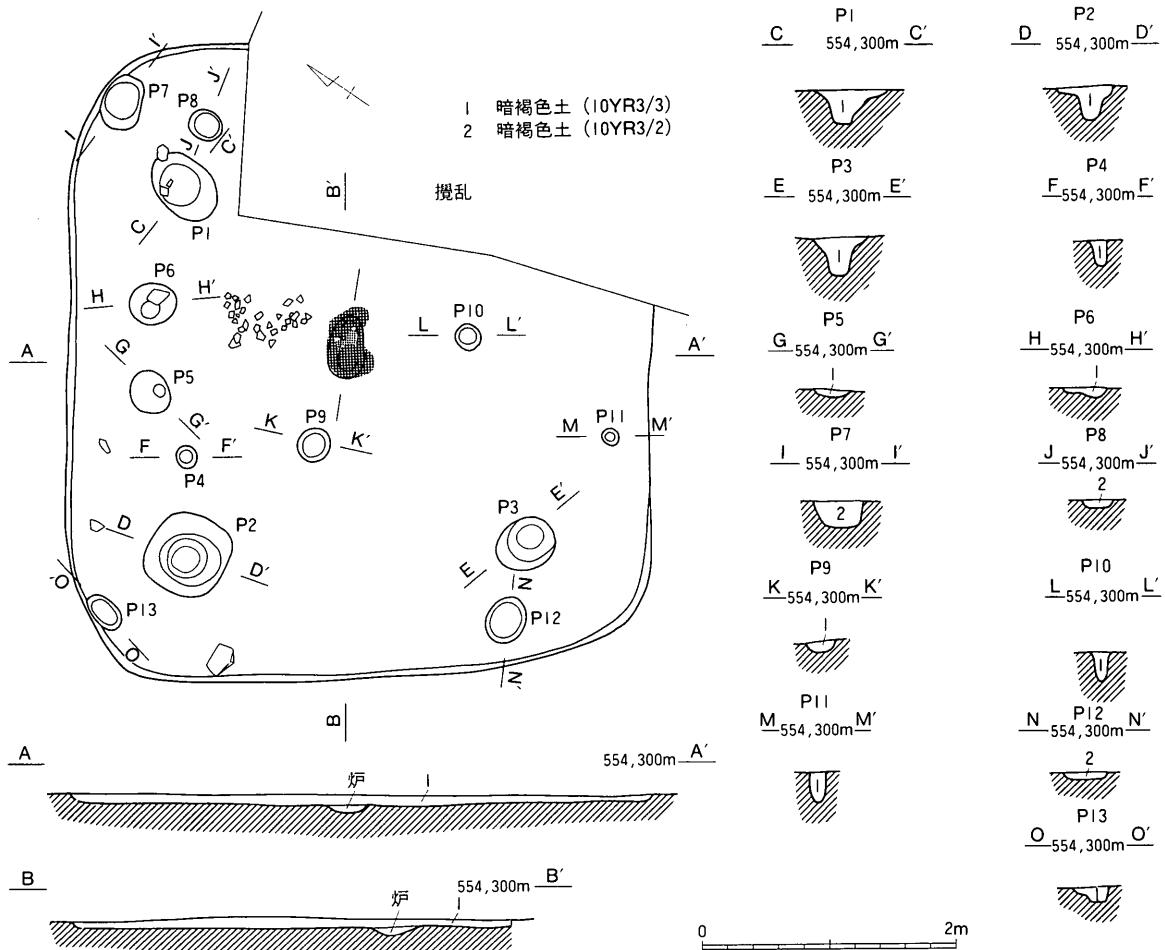
SB 9 A区西側中央に位置し、SD 4・8・22を切り、SB 8に切られる。東側は試掘トレンチにより失われている。褐色土を掘り込んで構築しており、平面形は4.6×5.0m の方形を呈す。残存する



插図16 SB 9 炉実測図

隅丸方形あるいは楕円形か。壁は緩やかに立ち上がり、覆土は黒褐色土の単層、炭化物を多量に含んでいる。床面は平坦で、ピットを4個認めた。P 3 が浅く問題も残るが、P 2・3 が主柱穴とみられる。P 1・4 は規模が大きく、貯蔵穴などの機能が考えられよう。

土器は壺・甕・高坏、石器は磨製石鏃未製

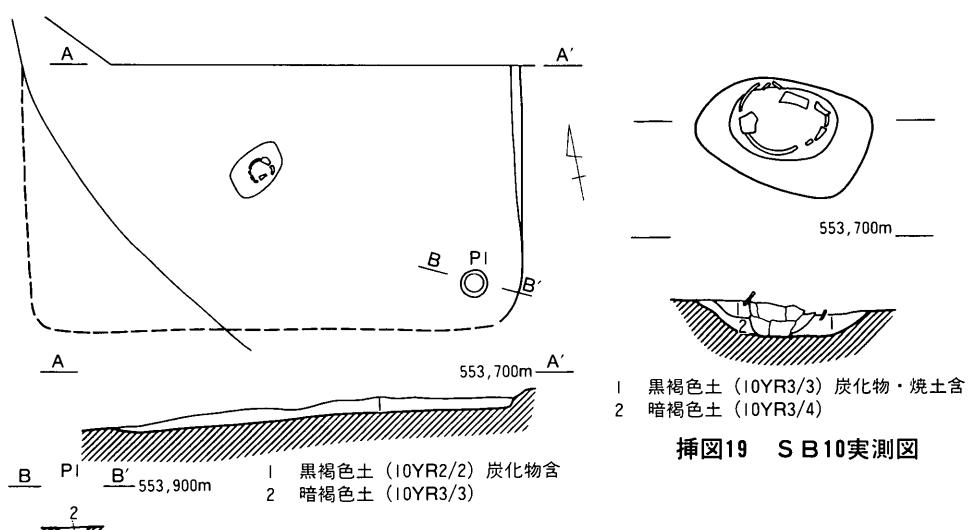


挿図17 S B 9 実測図

壁高は約10cmで、覆土は暗褐色土の単層である。床面は平坦で、中央に埋甕炉を持つ。ピットは13個認められた。P 1・2・3が主柱穴になる。

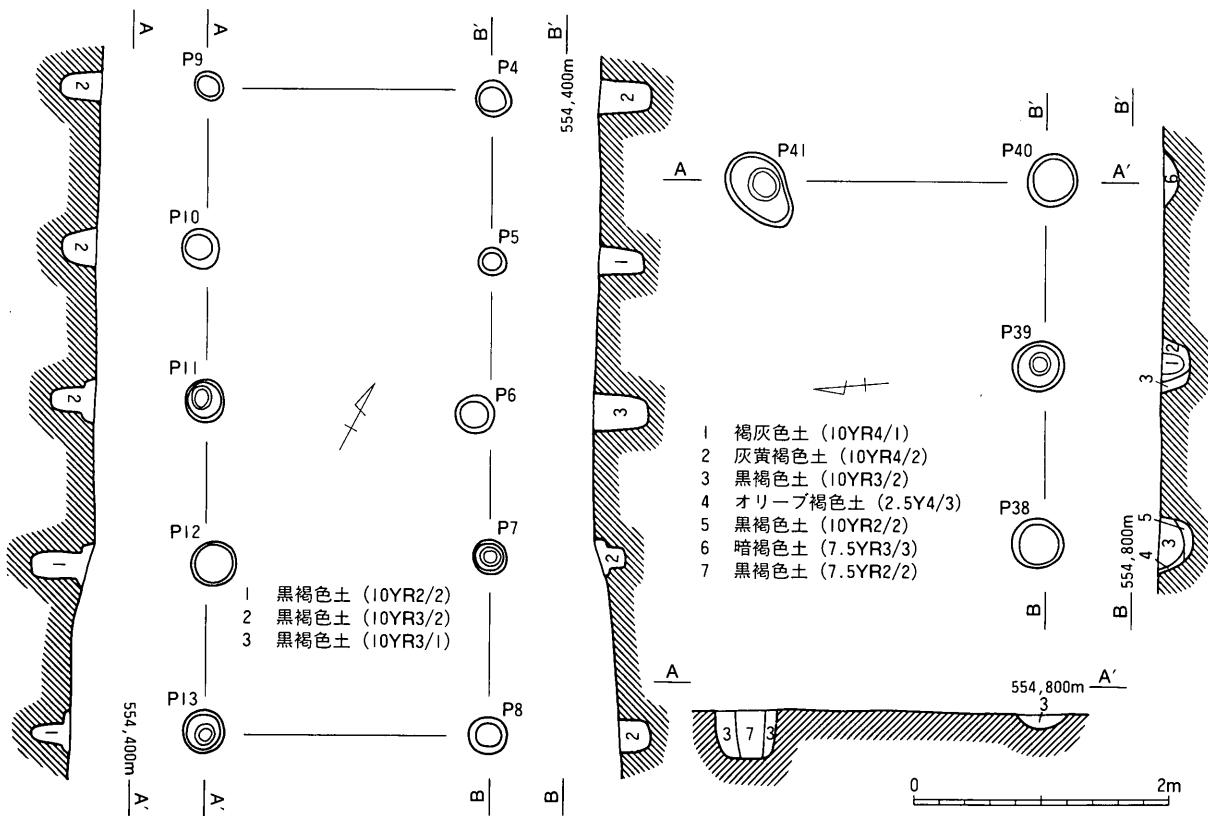
遺物は覆土全体に多く含まれるが、特に北東側上面にまとまっていた。土器には壺・甕・鉢などがある。石器・石材のほとんどは剝片・碎片であるが、磨製石鏃未製品・敲石・スクレイパー・使用痕のある剝片も認めた。

S B 10 A区北
西端に位置する。斜面に位置するため南西側の遺存が悪く、壁は東側が確認できただけである。また、



挿図18 S B 10 実測図

挿図19 S B 10 実測図



挿図20 S T 1・S T 2 実測図

北側は調査区外へと続く。炉の位置から全体のプランを復元すると、平面形は一辺4mほどの方形または不整橢円形となる。覆土は黒褐色土の単層で、遺物を多量に含んでいる。P1からは炭化物の小塊がやや多く出土した。炉は甕(64)の上半を欠いて設置した埋甕炉であった。

遺物は覆土中から多量に出土しているが、流れ込んだものも相当量あったと考えられる。石器・石材には磨製石鏃未製品・剣片・碎片があり、土器には壺・甕・鉢などがある。

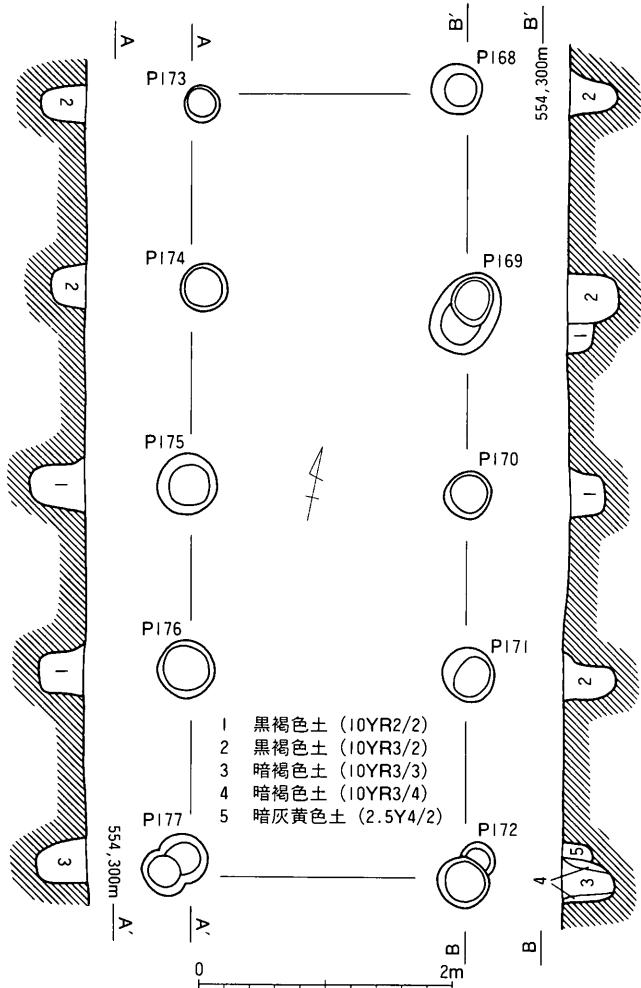
(2) 掘立柱建物(図版26・27)

3棟確認した。この他にも柱痕が明確なピットが多く、A区西側を中心に、さらに多くの建物が存在したと考える。全体が確認できたS T 1・3はともに4間×1間の長方形の建物であった。時期は、いずれも竪穴建物と同じ(弥生時代中期後半)に位置づけられる。

S T 1 B区東側SB1の東に接してある。P4～13により構成される4間×1間の側柱式の建物で、主軸方向はN-28°-Wを指す。小さいが深くしっかりした柱穴(柱痕)を持つ。柱間寸法は桁行が約130cm、梁間が約225cmを測る。中央に土坑(S K 1)、ピット(P14)が検出されており、これらも建物に付隨する可能性がある。

S T 2 B区北西隅、SB7を切るP38～41により構成される。調査地端のため、全体の規模は明らかでないが、棟方向は東西と推定できる。柱穴の規模は一様でないが、底のレベルはほぼ揃っている。柱間寸法は桁行が約140cm、梁間が225cmになる。P41には明確な柱痕が残っていた。

遺物はP39の上面からまとめて出土した。高壙と思われる脚部、壺、甕がある。



插図21 ST 3 実測図

ST 3 A区西側、S B 8・9の南に接してある。P168～177により構成される4間×1間の側柱式の建物で、主軸方向はN-11°-Wを指す。柱間寸法は桁行が約150cm、梁間が約225cmを測り、規模はST 1よりやや大きい。また、個々の柱穴も径40cmほどで規模が大きい。埋土はいずれも黒褐色土で炭化物を少量含んでいる。うち、P172とP177には建て替えた痕が残る。

いずれのピットからも土器・石器の出土がある。特に、P169では南側から流れ込むように多量の土器が入り込んでいた。石器は剝片・碎片が多いが、P174からは磨製石鏃の未製品と二次加工を施した剝片の出土がある。

(3) 土坑(図版27～29)

16基確認した。径0.7m前後の円形の浅いものがほとんどで、他に同形態で深く掘り込んだもの(S K 4・15)、径1～1.5mの

平面長方形で浅いもの(S K 5・16)もある。うち、S K 6・7は住居址の地床炉と考えられる。また、S K 13・17はむしろピットの範疇にはいるものである。墓址と考えられるものはなかった。

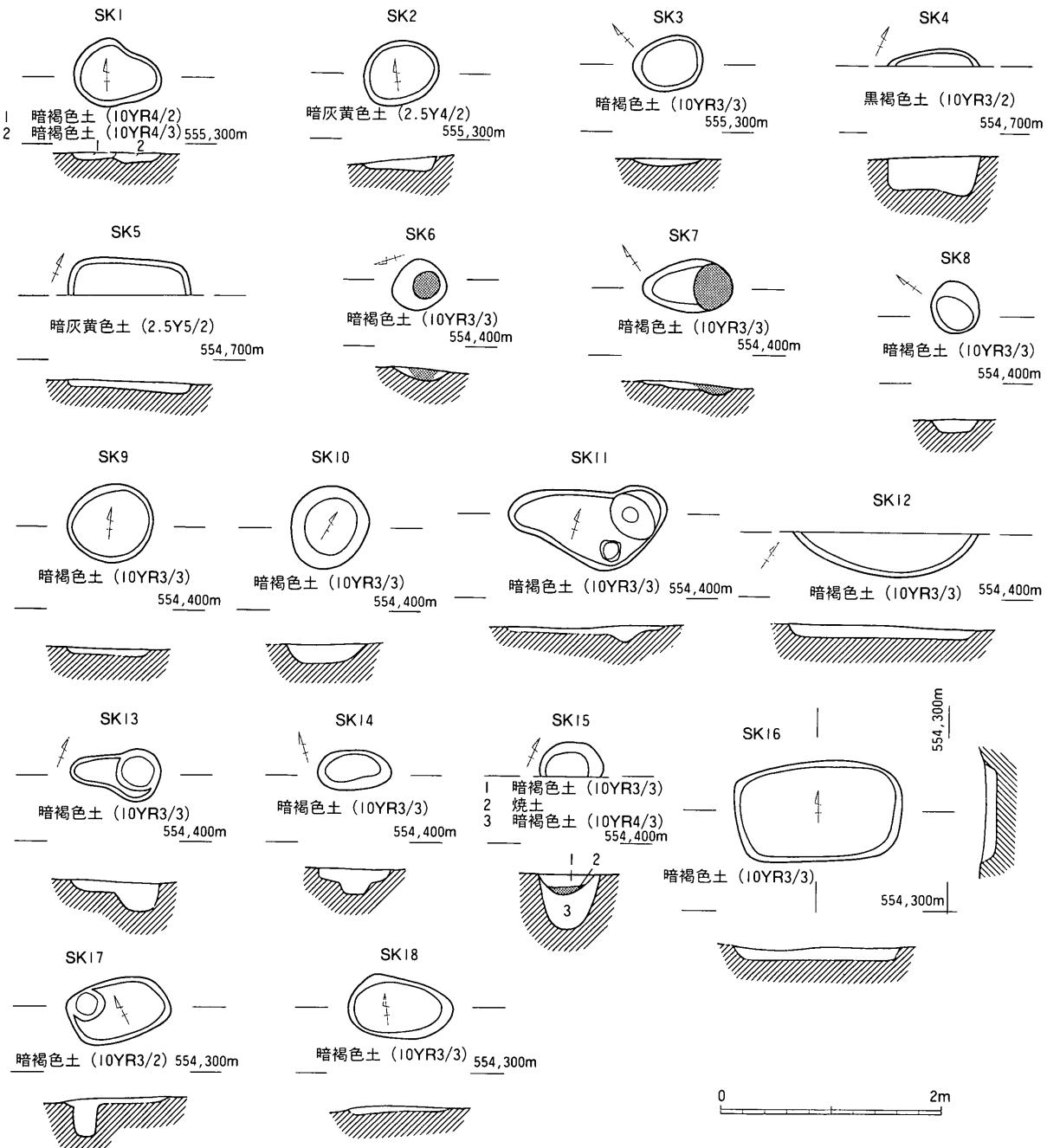
S K 1 B区東側、S T 1の中に位置し、それに付随する遺構と考えられる。平面形は 0.82×0.62 mの不整円形で、壁は緩やかに立ち上がる。単一の遺構として掘り上げたが、平面形及び埋土から、二つの土坑の複合の可能性が高い。遺物の出土はない。

S K 2 B区東側、S B 1に接してある。平面形は 0.72×0.58 mの楕円形を呈す。最大壁高は13cmで、底面は平坦、ほぼ直に掘り込まれている。遺物の出土はない。

S K 3 B区中央やや北側に位置する。平面形は 0.64×0.48 mの楕円形、断面は深さ7cmの浅い皿状を呈す。遺物の出土はない。

S K 4 B区西側、S B 7の南に位置する。試掘トレンチによって大半が失われており、規模は明らかでない。平面形は円形もしくは楕円形であろうか。残存する壁高は35cmで、深く直に掘り込まれている。底面には若干の凹凸があった。埋土は黒褐色土の单層である。遺物は土器小片を1点認めただけである。

S K 5 B区西側、S B 7の南にS K 4と並んで検出された。一辺1.13mの方形もしくは長方形の土坑であるが、試掘トレンチによって大半が失われているため、明らかでない。深さ10cmほどの浅い遺



插図22 土坑実測図

構で、傾斜をもつものの平坦な底面から壁が直に立ち上がっている。遺物の出土はなかった。

SK 6 A区中央南端に位置する。径0.5mの円形で、中央に焼土が厚く認められた。炉であった可能性が高く、周囲のP49・58~63までを含めた範囲に住居があったものと推測する。遺物の出土はない。

SK 7 A区中央北端に位置する。平面形は0.82×0.49mの不整橿円形で、東側に径40cmの焼土の厚い堆積を認めた。SK 6同様、炉であった可能性が高く、周囲のP56・64~67までを含めた範囲に住居があったものと推測する。遺物は土器小片を2点得ただけである。

SK 8 A区西側やや南に位置する。0.48×0.43mの平面円形の小型の土坑である。深さ12cmと浅いが、直にしっかり掘り込まれている。底面は平坦で、埋土は暗褐色の単層である。遺物は土器小片が

少量出土した。

S K 9 A区西側やや南にSK 8と並んである。 $0.80 \times 0.68m$ の円形で、深さは6cmと浅い。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。SK 8と同様、埋土は暗褐色の単層である。遺物は土器小片が少量得られただけである。

S K 10 A区西側中央寄りに位置し、西側をP81に切られる。また、周囲にピットが多数分布している。平面形は $0.76 \times 0.70m$ の円形で、断面形は深さ18cmの半円形を呈す。遺物は高壙の脚部、壺の底部片など土器小片多数と、33点もの石器・石材を認めた。石器には磨製石鏃及びその未製品、スクレイパーなどがある。なお、出土した石核がSK 16出土の石核と接合した。

S K 11 A区西側中央寄りに位置する。平面形は $1.46 \times 0.74m$ の不整円形で、東側が径0.50mに浅く掘り込まれている。全体に浅く、壁もはつきりしない。ピットとそれに付随した浅い落ち込みと考える。遺物は土器小片と石器剝片などを少量得た。

S K 12 A区西側北端にある。丸みを持った大型の土坑であるが、大半が調査区外へと続いており、規模・平面形は明らかでない。底面は平坦で、壁はほぼ直に掘り込まれている。埋土は暗褐色土の単層である。遺物には土器小片が少量ある。

S K 13 A区西側やや北にある。平面形は $0.84 \times 0.47m$ の不整円形で東側が径0.40mに深く掘り込まれている。ピットとそれに付随した（抜き取り痕か）浅い落ち込みと考える。遺物の出土はない。

S K 14 A区西側中央寄りに位置する。平面形は $0.68 \times 0.37m$ の楕円形で、深さは24cmを測る。中央部が特に深く掘り込まれており、ピットが広がったものと考えることができる。埋土は暗褐色土の単層である。遺物の出土はない。

S K 15 A区西側やや北に位置する。試掘トレンチによって南半が攪乱を受け、規模・平面形とも明らかでないが、径0.60mの円形に復元できる。深さは50cmあり、半円形に掘り込まれている。埋土は二層に分かれる。うち2層に黄色土ブロックが多量に含まれていた。遺物には土器小片が少量ある。

S K 16 A区西端中央に位置する。平面形は $1.54 \times 0.91m$ の隅丸方形で、深さは12cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層である。遺物には土器片多数と石核、剝片、碎片を計7点認めた。うち、石核はSK 10出土のものと接合した。土器には鉢・甕・高壙もしくは台付甕の脚部などがある。

S K 17 A区南西端に位置する。平面形は $0.90 \times 0.57m$ の不整楕円形で、西側が径0.28m、深さ36cmに深く掘り込まれる。その部分以外は浅く壁の立ち上がりも特に認められない。ピットとそれに付随した浅い落ち込みと考えられよう。遺物には少量の土器片がある。

S K 18 A区南西側に位置する。平面形は $0.95 \times 0.56m$ の楕円形を呈し、深さは7cmと非常に浅い。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土の単層で、多量の土器片とスクレイパーを含んでいる。

(4) ピット

総数232個確認した（付表1）。3棟の掘立柱建物を復元したが、他にも柱痕が明確なものが多く、さ

3 遺 物

らに多くの建物が存在したと考えられる。また、提示はしていないが、3個以上のピットが一定の間隔で並ぶ例（S B 6 西側・S T 3 周辺など）があり、柵列などの構造物の存在も推測できる。規模は径0.25m ほどのものと、0.40m ほどのものとに二分される。埋土は黒褐色土もしくは暗褐色土であったが、灰黄色土なども少數認められる。全般に遺物の出土は少ないが、P 16では上面からまとまった量の出土があった（図版29-4）。また、P 57の底からは S B 5 出土と同様のヒノキ科の材を得た。

（5） 溝（図版29）

22本確認した。いずれも A 区の西側に分布し、幅15cm、深さ10cmほどで断面はU字形もしくは逆台形を呈している。S D 1・5・7・9・11・15などは東西、S D 3・4・6・10・14・16などは南北方向に伸びているが、明確な高低差は認められず、埋土も暗褐色土の単層で著変ない。性格は不明であるが、屈折する S D 2・11などは削平された住居址の周溝の可能性も考えられよう。

いずれも、竪穴建物（S B 8・9）や掘立柱建物（S T 3）、ピットに切られており、集落内での場の変化（土地利用の変化）があったことを示している。

3 遺 物

（1） 土器（図版12～15、30～33）

A 弥生時代の土器

今回の調査で最も多く出土したのが弥生土器である。小片が多かったこと、粘土中にあったため器表面が荒れていたことなどから、文様・調整等十分に観察できなかった部分もあるが、概ね中期後半、いわゆる栗林式土器の範疇に入る土器群と考える。図版には豊科町郷土博物館所蔵の既出遺物も含めて提示した。以下、それらも含めて、器形毎に概観する。なお、個々の土器の法量、器形及び成形・調整等の詳細は観察表（付表2）に譲る。

壺 脊部下位に最大径をもち、細長い頸部から口縁部が外反する。小型のものから大型のものまで、法量には各種ある。また、赤彩を施した広口のもの（18）もある。

口縁部は外反するもの（1・88・117～119・128など）、弱く外反し受け口状になるもの（17・67など）、強く屈曲し段になるもの（103・121・122など）とに分かれる。外反するものには、その長さや度合いに差が認められる。口縁端部（口唇）は単純におさめるが、そのほとんどは縄文等の施文により、面をなしている。口縁部は有段のものは縄文を施し、122はその上に1条の山形沈線を施している。また、突起の付くもの（120）や、内面に波状文の施されるもの（88）もあった。

頸部の文様帶は、横走する2～3本の平行沈線あるいは隆帶（96）、磨きつぶして浮き立たせる（1）ことにより区画し、その内側を縄文（1・10・123・127・128）または山形文（123・126）、刺突等（56・125）により埋めている。また、円形の浮文を貼り付けるものもある。

脣部の文様帶は、その中位、最大径付近に認められるが、持たないものも多い。頸部文様帶と同様、横走する平行沈線で区画し、中を縄文・山形沈線・刺突等により埋める（39・129）。また、39は頸部から脣部文様帶にかけて6単位ほどの懸垂横帯文（波状文と刺突）を施す。

甕 口縁部が外反する深鉢形のもの。小型のものと大型のものがある。最大径が口縁端部にあり胴部がすぼまるものがほとんどであるが、胴部が丸みをもつものも若干認められた(6・64・132)。

口縁部は外反するものと、弱く内湾して立ち上がり受け口状になるもの(3・29・97など)とがある。量的には前者が多い。口縁端部は縄文を施したり、ヘラ状工具によりきざみを付ける。

頸部には櫛描き横線文(15・132)、波状文(33・63・77)、簾状文(20・29・33・51・73・99・131など)を施す。簾状文は等間隔に止める。

胴部上位には櫛描き波状文(3・4・20・33・55・97)や櫛描き条痕文(6・15・41・64・77・131・132など)を入れる。また、両者を組み合わせたもの(2)も認められた。櫛描き条痕文は羽状(縦)に入れるものがほとんどである。

底部は壺との識別が困難であるが、端がやや突出するものが目立つ。

台付甕 甕の底部に脚台が付くもの。全形を知ることができるものはないが、総じて小型。認めたのはすべて有段あるいは受け口状の口縁を持つものである。脚は摩滅により高坏との識別が困難。

口縁部には縄文(50)、あるいは平行する2条の山形沈線(84・95)を施し、胴部にはコ字の重ね文が施される(44)。また、口縁部もしくは頸部に円形の浮文が貼り付けられる(50・84・95)。

鉢 体部がやや丸みを持ちながら大きく外反する。口縁部は強く内湾するものと弱く内湾して立ち上がるものとがある。また、体部から大きく外開したものもある。ほとんどに赤色塗彩が施される。口縁端部には4単位ほどの突起を付けたり(7・30・72・108)、2個一対の孔が開けられる(58・136)。

高坏 全形のわかるものはない。坏部は口縁部が強く外反し、内面に稜をもつ(93・110)。脚部は台付甕との識別が困難。坏部との境が膨らむもの(111)もある。

注口土器 壺の胴部に細長い口が付いたもの(124)。

B 古代の土器

須恵器蓋と坏Aの小片計2点が遺構外から出土した。また、土師器甕、黒色土器椀、須恵器甕、灰釉陶器椀が既出遺物に含まれている。時期的には、いずれも9世紀代におさまる。

蓋 A区東側の調査区壁から出土した。つまみと体部(天井)がわずかに残存するのみ。回転ヘラ削りの範囲はわずか(115)。

坏A B区西側調査区壁から出土した。径5.4cmの小さな底部から体部が大きく外開する。底部切り離しは回転糸切り(116)。

黒色土器椀 既出遺物。底部片(140)と全形を知れるもの(141)の2点ある。いずれも内面のみ黒色処理を施す。口縁端部は弱く外反する。

灰釉陶器椀 既出遺物。口縁端部が強く外反する。灰釉は漬け掛け(142)。

(2) 石器(図版15~20, 34・35)

剝片・碎片を含め、総数580点取り上げた。竪穴建物をはじめとする遺構内外からの出土で、すべて弥生時代中期後半に属するとみていい。確実な自然石を除いて遺物取り上げ段階で選別を行わなかったの

3 遺物

で、集落内の石器のあり方を反映した好資料が得られた。なお、個々の詳細及び遺構毎の組成は観察表（付表3）及び一覧表（付表4・5）に譲る。

石材の種類 石材には黒曜石・硬砂岩・粘板岩・輝緑凝灰岩・チャート・鉄石英・蛇紋岩・花崗岩・角閃石安山岩・ホルンフェルスなどがある。黒曜石・鉄石英、四賀村錦部産と考えられるホルンフェルスを除いて、いずれも遺跡西を流れる犀川に認められるもので、その転石を用いたと考えられる。

石器の種類 製品には打製石鏃・磨製石鏃・打製石斧・扁平片刃石斧・石錐・石包丁・スクレイパー・砥石・敲石などがある。特に磨製石鏃の未製品が多量に認められた。

以下、出土石器のうち、主要なものについて概観する。なお、豊科町郷土博物館所蔵の既出遺物中に打製石斧・太形蛤刃石斧・打製石包丁・磨製石包丁等があった。これらについては写真で提示し（図版34・35）、必要に応じてふれていくことにする。

打製石鏃 製品5点と未製品1点がある。図示したものはいずれもチャート製で、143・146（未製品）は有茎。図示できなかった2点は黒曜石製の破損品とチャート製の未製品。

磨製石鏃 製品3点、未製品45点を認めた。出土遺物のほとんどないSB2を除く各建物から出土しており、すべての住居で製作・修理がされていたといつていい。薄く大型の剝片も多出しており、多量に製作されていたことが窺える。石材は粘板岩・硬砂岩が主体的に用いられている。196の接合資料は素材剝片で、剝離というよりも折り取るように粗割している。また、152・176などには擦切施溝が観察できた。一連の製作工程のうち、剝離調整（166～170など）、片面研磨（161～165など）、両面研磨（156～160など）、側縁研磨（150・151・154・155など）の各段階が確認できる。

打製石斧 粘板岩製2点、砂岩製2点の計4点が出土している。179はSB1からの出土で刃部の摩耗が著しい。

扁平片刃石斧 3点出土した。いずれも蛇紋岩製。形態は長さが幅をやや上回るほどのもの。既出遺物中に長さ5.5cm、幅2.8cmの小型のものもみられる（図版34）。

石錐 4点出土。すべてチャート製。

石包丁 打製のものが1点出土した（187）。この他に既出遺物中に半月形をした打製のもの、孔をもつ磨製のものがそれぞれ1点ある（図版35）。

スクレイパー 総数44点と多く出土した。小型の精製品と大型のものとがあり、さらに横長のものと縦長のものとに分かれる。189は石刃状で両側縁に連続する剝離を加える。小型のものは黒曜石・チャート・輝緑凝灰岩・鉄石英、大型のものは硬砂岩・粘板岩の剝片を利用している。穀物光沢が観察できるものもある。

砥石 SB5及びP94から砂岩製のもの計2点が出土した。厚さ0.5～1cmの長方形の小型のもので、193は磨製石鏃の製作に用いられたものと考える。

凹石・敲石・磨石 第三紀砂岩等の自然礫を素材にし、それぞれ表面に凹部、敲打痕、磨面が確認できるもの。敲打痕と磨面を併せ持つ198・199をはじめ、複数の使用痕を持つものが多い。

第4章 自然科学分析の結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

町田遺跡（長野県南安曇郡豊科町所在）は、犀川と後背山地に挟まれた南北に細長い段丘上に立地する。明科町から豊科町にかけての段丘は、光の集落がのる光段丘と明科町や田沢の集落がのる明科面とに分かれている（山下ほか, 1983）。光段丘は、沖積世の段丘とされているが（関, 1989）、更新世末の森口礫層に対比されるという報告もある（松本盆地団体研究グループ, 1977）。光段丘には縄文時代の人骨が多量に出土した北村遺跡などが分布する。本遺跡の立地する明科段丘は、光段丘より低位の段丘で、沖積層に比定されている（山下ほか, 1983；関, 1989）。これら2つの段丘上には、いくつもの沖積錐がある。その下部は後背湿地性の状態で堆積したことが推定されており、離水後に弥生時代中期の集落が構築されたと考えられている。今回の分析では弥生時代を中心とする古環境復元と、扇状地が形成される過程での環境復元が主な目的である。分析手法としては、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定をそれぞれ実施する。

1. 試 料

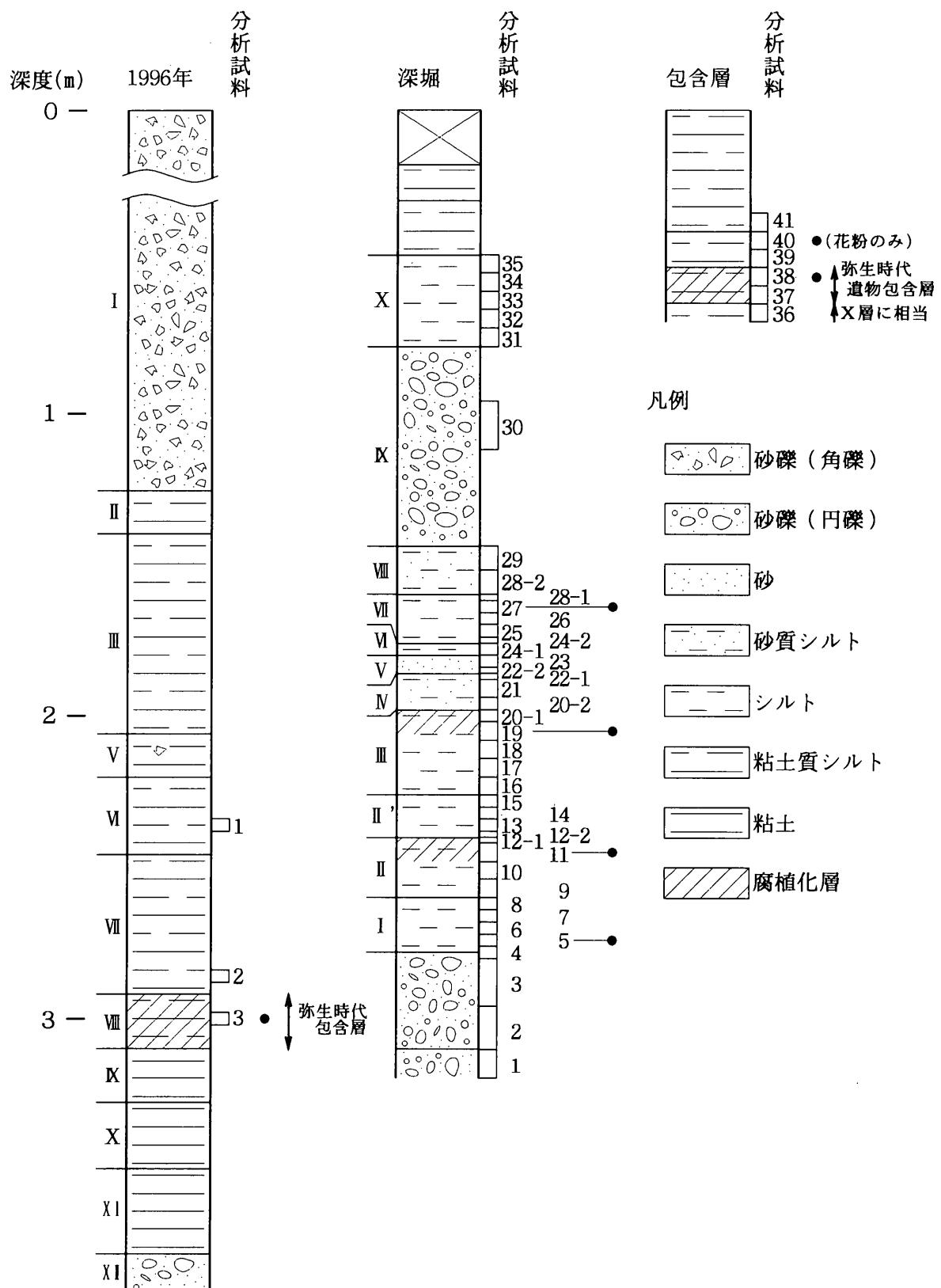
試料は、珪藻分析・花粉分析・種実同定に用いる土壤試料と、樹種同定に用いる炭化材がある。土壤試料に関しては、1996年調査の断面、深掘の断面、包含層の断面の3地点⁽¹⁾から採取されたものである。各地点の柱状図と土壤試料採取層位、ならびに分析を行った試料に関して挿図23に示す。また弥生時代の炉から出土した炭化物試料の詳細は、結果とともに表に記した。

2. 分析方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釀した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍を行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に同定・計数する。

2. 分析方法



挿図23 試料採取地点柱状図と分析層位

●は微化石分析（珪藻、花粉、植物珪酸体）を行った試料を示す。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛：比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

(4) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結 果

(1) 珪藻分析

珪藻化石はいずれの地点からも産出せず、珪藻殻の破片もほとんど見られなかった。

(2) 花粉分析(図版36)

結果を表1に示す。検出された試料は、包含層の試料番号40のみであり、他の試料からはほとんど検出されない。花粉化石のほとんどは針葉樹花粉で占められ、広葉樹花粉や草本花粉はほとんどみられない。特にモミ属の割合が高く、ツガ属、トウヒ属、マツ属なども検出される。

(3) 植物珪酸体分析(図版37)

結果を表1に示す。植物珪酸体は、いずれの試料も保存が悪く、タケ亜科やヨシ属が若干みられる程度である。一方イネ属は包含層の試料番号40、38で若干認められる程度である。

3. 結 果

種類	試料番号	包含層		深堀			1996年		
		40	38	27	19	11			
花粉分析									
木本花粉									
モミ属		73	3	—	—	5	2		
ツガ属		56	4	—	—	2	—		
トウヒ属		19	—	—	—	—	—		
マツ属		33	—	2	—	—	—		
ブナ属		2	—	—	—	—	—		
コナラ属コナラ亜属		1	—	—	—	—	—		
ニレ属一ケヤキ属		—	—	1	—	—	—		
草本花粉									
イネ科		7	1	—	—	—	—		
サンエタデ節—ウナギツカミ節		—	1	—	—	—	—		
ヒルガオ属		—	—	—	—	—	1		
ヨモギ属		3	—	—	—	—	—		
シダ類胞子									
サンショウモ		6	—	—	—	—	—		
他のシダ類胞子		—	4	3	2	3	1		
合計		200	13	6	2	10	3		
植物珪酸体									
イネ科葉部短細胞珪酸体									
タケ亜科		—	—	1	—	—	—		
ヨシ属		—	—	—	—	2	2		
不明キビ型		—	1	—	—	—	—		
不明ダンチク型		1	2	—	—	—	—		
不明		—	—	—	—	—	—		
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属		3	2	—	—	—	—		
タケ亜科		2	—	1	2	—	—		
ヨシ属		—	—	—	2	2	3		
不明		3	1	1	4	—	1		
合計		9	6	3	8	4	8		
表1 花粉分析・植物珪酸体分析結果									

(4) 樹種同定 (図版38・39)

樹種同定結果を表2に示す。SBIO炉内土およびP184炭には2種類が認められた。これらの木材・炭化材は、針葉樹2種類（マツ属複維管束亜属・ヒノキ科）、広葉樹4種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・サクラ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

試料は年輪界で割れており、観察できた組織は1年分に満たない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められるが、水平樹脂道は保存状態が悪い。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

全体的に保存状態が悪い。木材組織は仮道管を主要素とし、晩材部の幅は狭い。晩材部付近に樹脂細胞が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔は窓状ではないが詳細は不明。放射組織

遺構名	出土位置	状態	用途など	樹種
SB 6 (6号住居)	床面	生木		ヒノキ科
SB 9 (9号住居)	炉内の土	炭化材	燃料材?	ヤナギ属
SB 10 (10号住居)	炉内の土	炭化材	燃料材?	コナラ属 コナラ亜属 コナラ節 クリ
P184		炭化材		マツ属 複維管束亜属 サクラ属

表2 樹種同定結果

は単列、1~10細胞高。

・ヤナギ属 (*Salix*) ヤナギ科

試料は軟らかく脆い。散孔材で、単独または2個が複合して散在し、分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1~15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で孔圈部はほぼ1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料は全て年輪界で割れた板目板状で、早材部のほとんどは失われている。年輪界の一部に大型の道管壁の一部が認められ、その道管径の変化から環孔材と判断できる。小道管は火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、道管は単独または2~8個が複合して接線・斜方向にやや紋様状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1~5細胞幅、1~30細胞高。

4. 考察

今回、珪藻、花粉、植物珪酸体とともに、化石の保存が非常に悪かった。花粉化石は、風成層など好気的状況下での分解に弱く、消失してしまう。風成土壤中の分解過程に関しては、土壤中のpHが低くかつ土壤の水分条件が高い時には花粉・孢子化石が残りやすい。年平均気温の高さと花粉化石の分解とはあまり関係していない、各種類ごとに風化に対する抵抗力が違うなどの特徴がある(三宅・中越, 1998)。一方珪藻化石や植物珪酸体などの珪酸質に関しても土壤中の分解が指摘されている。植物珪酸体を例にとれば、土壤中で比較的早い段階で分解され、土壤の珪酸サイクルの中に組み入れられたり、再吸収されたりすることが指摘されている(近藤, 1988)。さらに、種類による風化に対する抵抗力の違いについても指摘されている。今回保存が悪かった直接の要因については不明である。また、種類によって風化に対する抵抗力が違うことから、少量ながら検出された化石は、いずれも風化に強い種類が残ったた

4. 考 察

めであり、当時の植生を反映しているとはいがたい。このため、今回化石が少なかった層準の試料は、定性的には扱えるが、定量的には難しいといえる。このことから、「深掘」の堆積物が形成しつつあった当時、ヨシの産出から湿地的環境が推定される。さらに包含層の成果も考慮に入れれば、モミ属・ツガ属などの産出から温帯針葉樹の存在も考えられる。発掘所見や地形学的見地からすると、「深掘」の堆積物は後背湿地的環境下で堆積したと考えられていることから、今回の結果と矛盾しない。

包含層は、弥生時代遺物包含層の上位にあたる試料番号40から花粉化石が検出される。花粉化石の組成をみると、モミ属やツガ属など針葉樹が主体である。これらはモミやツガなどの温帯性針葉樹に相当するとみられ、当時周辺にはモミ属からなる針葉樹林があったと考えられる。^{きたむらい せき}北村遺跡の樹種同定結果をみると、縄文時代後期にはコナラ属やクリなどの広葉樹が多い（鈴木・能代, 1993）ことから、弥生時代前後で植生変化したことが考えられる。このような植生の変化は、「弥生の小海退」とよばれる冷涼・多雨な気候に起因するもので、同時期に各地で植生に変化が起こったことが報告されている。現在の気候から考えると雨量の少ない松本盆地周辺で温帯針葉樹が多く分布することはないとと思われるが、弥生時代頃には雨量の増加に伴って分布拡大したものと考えられる。モミ属の多産は、^{つかまひがしやま}筑摩東山遺跡（^{うえの}上ノ山窓跡群・菖蒲平窓跡群）の花粉分析や樹種同定結果からも明らかにされている（酒井潤一 未公表試料、岡田文男 未公表試料）。一方、樹種同定の結果からは、低地～台地上にかけて、複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）やヒノキ科等の針葉樹や、ヤナギ属、コナラ節、クリ、サクラ属等の落葉広葉樹が生育していたと考えられる。花粉化石と共に分類群は少ないが、用材を人為的に選択したり、種類による化石の残りやすさの差（たとえば、サクラ属やクリは虫媒花のため花粉生産量が少なく残りにくい等）などがその要因であろう。いずれにしても、花粉化石や木材で検出された各種類が、当時の森林植生を構成していたものと考えられる。また、イネ属の検出は、当時周辺で稻作が行われていたことが推測される。

註

- (1) 1996年調査の断面はB区調査地端より約40m北東の道路脇(C区)、深掘の断面はA区SK7近辺、包含層の断面はA区西端P200・201近辺にあたる。

引用文献

- 近藤鍊三 1988 「植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壤と年代」『ペトロジスト』32, P. 189–202
松本盆地固体研究グループ 1977 「松本盆地の第四紀地質」『地質学論集』14, P. 93–102
三宅 尚・中越信和 1998 「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6, P. 15–30
閔 全寿 1989 「松本盆地東縁河岸段丘面における埋積過程の一様相－北村遺跡の発掘を通して－」『「田中邦雄教授退官記念論文集」P. 117–125
鈴木三男・能代修一 1993 「長野県北村遺跡出土炭化材の樹種」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11 北村遺跡 本文編』P. 167–168
山下 昇・小坂共栄・森田聰子 1982 「松本盆地東縁、明科–田沢間の山麓の地形と地質」『専報24 島弧変動』P. 253–266

第5章 調査の成果

1 町田遺跡の発掘成果

集落の発見 町田遺跡は古くから知られていた遺跡で、出土遺物も多く、南安曇郡の代表的な弥生時代遺跡として著名であった。しかし、発掘調査が行われたことがなく、その内容は不明であった。発掘成果の第一には、竪穴建物10棟をはじめ数多くの遺構・遺物を認め、断片的ではあるが、弥生時代集落の様相をつかんだことがあげられよう。

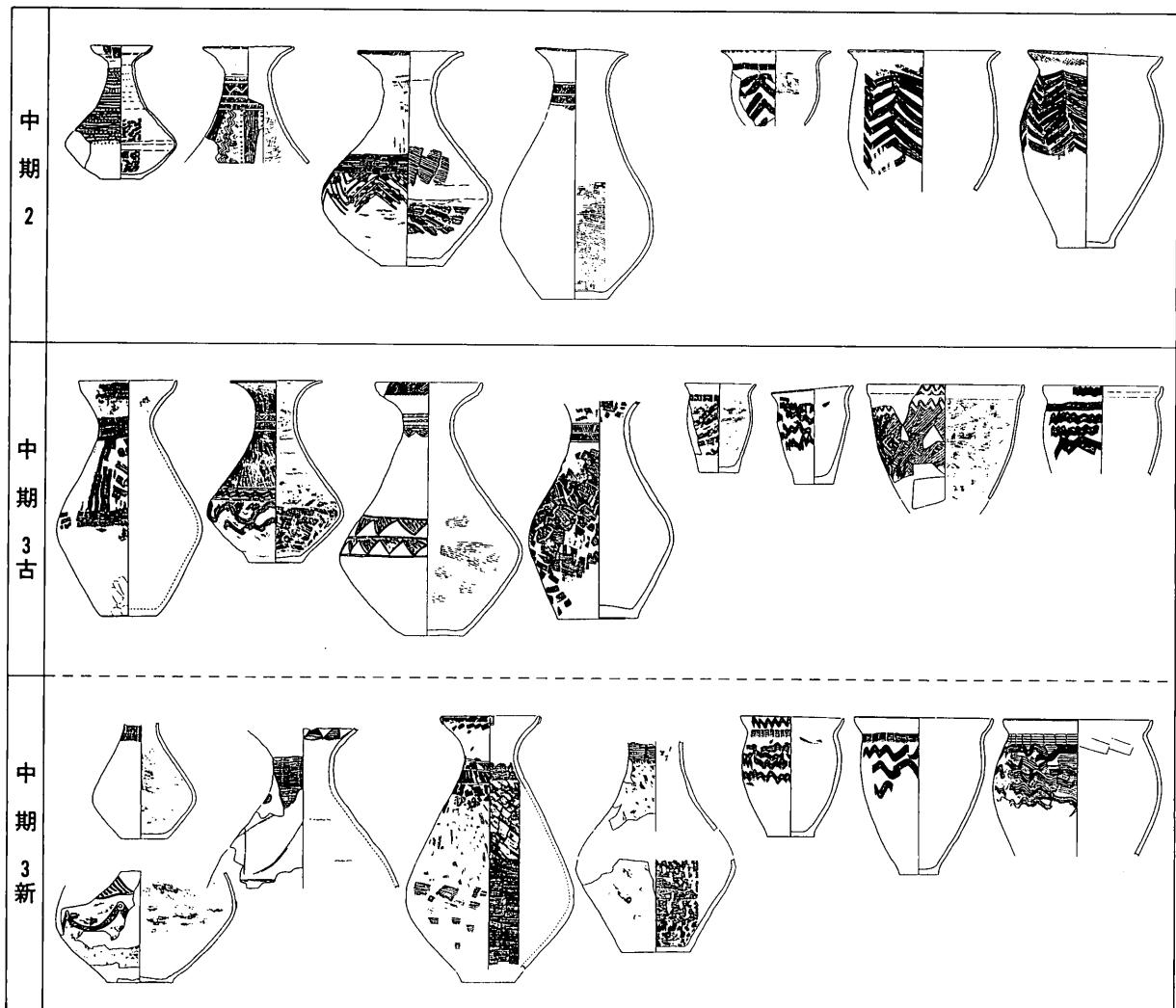
建物の構造 10棟の竪穴建物(住居)と3棟の掘立柱建物を発掘した。掘立柱建物については4間×1間の建物で、いわゆる高床倉庫とするにはやや細長い形態となる。竪穴建物にはSB1・3・5のように平面橢円形のものとSB6・7・9など隅丸方形のものとがあり、規模もSB3・5のように大型のものとSB8のような小型のものとがあった。炉は5軒の建物で確認した。いずれも建物のほぼ中央に位置し、うち、SB1・6・7が地床炉、SB9・10は埋甕炉であった。主柱穴は4本(SB7・9)あるいは6本～8本になる(SB1・3)とみられる。SB1・3には周溝があり、SB3の底には壁構築に伴うとみられる杭痕を認めた。また、SB1・4では壁際に建物の周堤の崩落土と考えられる粘質灰黄色土の堆積を認めた。SB6出土のヒノキ科の材は壁際に多く出土していることから板壁として利用していたものと考える。

以上のように、規模・形態・炉の構造等には若干の違いが認められる。これらが時期差によるものかとも考えたが、後述する出土土器群に想定される時間差とはかならずしも一致しない。集落は弥生時代中期後半から終末の短い期間内のものであり、混在してあったと考えられる。

出土土器の様相 出土した土器は弥生時代中期後半、いわゆる栗林式土器の範疇に入るものであつた。以下、これら土器群の編年的及び地域的位置づけについて簡単に検討してみたい。なお、みなみあづみぐん 南安曇郡では、この時期の良好な資料の出土がないため、研究の進んでいる松本市内の遺跡出土遺物と対比していくことにする。

松本平南部の弥生時代中期後半から終末の土器は、松本市宮淵本村遺跡48住・県町遺跡24住(2期)、県町遺跡16住(3期古段階)、県町遺跡8住(3期新段階)出土の土器群などを指標に3期に分けて考えられている(1)(挿図24、直井1991・1999)。壺は胴部下半に最大径があり、頸部及び胴部上半と中位の3部位に、基本的に太い籠描沈線で区画する文様をもっている。しかし、3期には文様の簡略化・粗雑化が認められ、また、節を揃えた簾状文や籠描沈線で構成されるT字文、籠描矢羽などの要素が出現する。一方、甕は頸部簾状文または波状文、胴部波状文または櫛描条痕という文様で構成されている。2期は縦羽状条痕が主体で、3期にはそれが少くなり、逆に波状文が主体になっていく。また、頸部簾状文も次第に多く用いられていくという。

今回の発掘で良好な土器群が得られたSB1は、甕頸部に横帯文などが用いられ簾状文が定着してい



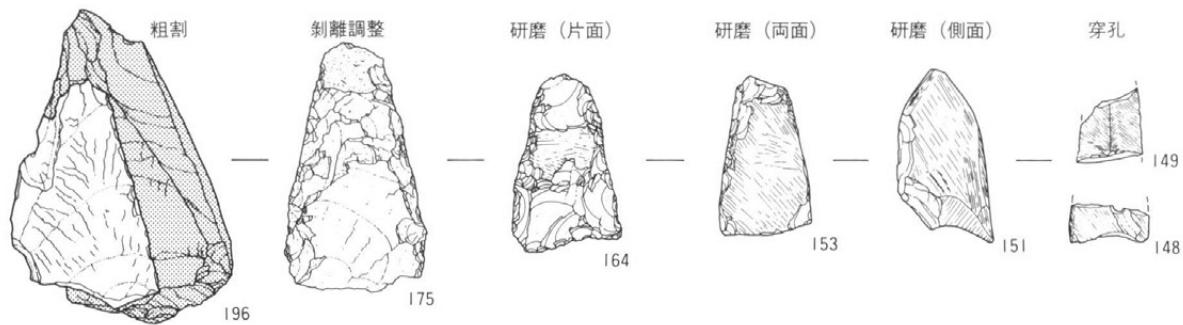
插図24 松本平南部の弥生土器（直井1999より作成）

ないこと、縦羽状条痕を主体に構成されていることなどから、総体として2期に比定できる。同様にSB2、懸垂文が残る壺(39)を出土しているSB6、SB9なども2期におさえられよう。一方、SB3は3期に比定できる。

この時期の土器様相は松本平と善光寺平(長野市近辺)で比較的均質であることが明らかになっている。しかし、簾状文の受容等に若干の差異も認められるという。その中で、町田遺跡出土土器群は、甕頸部の横帯文(5・15など)などに松本平南部の遺跡出土土器群より、より善光寺平に近い要素を認めることができ、地域的特徴が表れている。⁽²⁾

出土石器の様相 剝片・碎片を含め、総数580点取り上げた。すべて弥生時代中期後半に属するもので、しかも、確実な自然石を除いて遺物取り上げ段階で選別を行わなかったので、集落内の石器のあり方を反映した好資料となった。石材はチャートが圧倒的に多く、逆に黒曜石が比較的少ない。チャートは遺跡前面を流れる犀川から容易に得られたことによるもので、それを得られない薄川水系に立地する松本市県町遺跡などとは際だった違いをみせている。

打製収穫具の出土 製品では、砂岩製の大型のスクレイパー類(打製収穫具)の出土が注目される。伊那谷に多く認められるもので、松本平では後期に塩尻市和手遺跡で有抉石器・有肩扇状石器が出土し



挿図25 磨製石鏃の製作工程

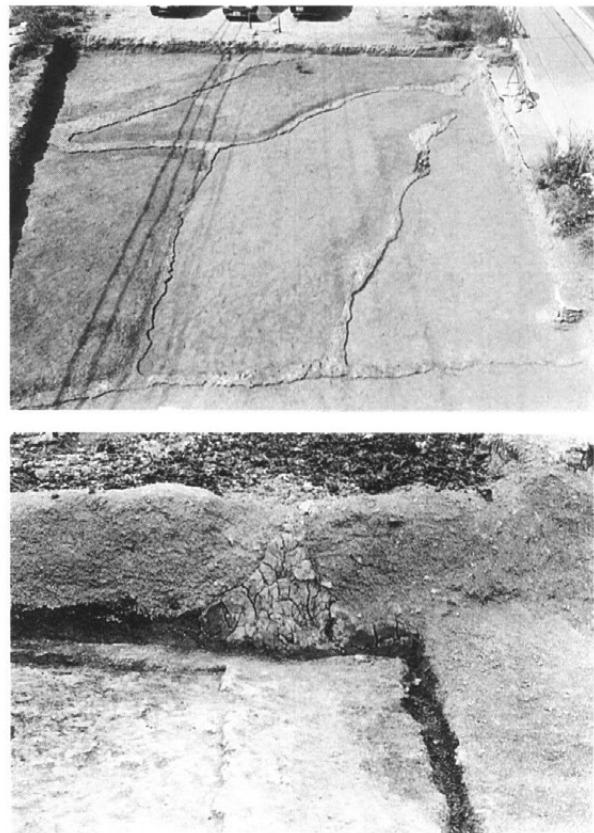
ているが、中期後半の遺跡では初見となる。伊那谷との交流もあったかもしれないが、むしろ、伊那谷同様に段丘上での畑作が盛んだったことによると考える。

磨製石鏃の製作 磨製石鏃の未製品が45点と多量に得られた。また、素材となった剥片や製作に係る砥石の出土もあった。未製品は、ほぼすべての建物から出土しており、恒常に各建物で製作・修理されていたことがわかる。松本市県町遺跡、出川南遺跡、宮淵本村遺跡など、松本平の他の集落でも多出しており、各集落で多量に必要な状況、例えばそれが武器とした場合、社会の緊張関係などを考えることができる。

また、一連の製作工程を復元できる好資料を得た。磨製石鏃の製作については既に多くの研究の蓄積があり、長野県内でも桜井弘人氏・関沢聰氏らにより工程が復元されている（桜井1986、関沢1990）。今回の調査でも、粗割・剝離調整・研磨（片面・両面・側縁）・窄孔の一連の製作工程を確認でき、それを裏付けることができた（挿図25）。中でも素材剥片が多量に得られたこと、接合資料により粗割が具体的に把握できたことは大きな成果であった。また、中信（長野県中西部）に多いという擦切施溝が観察できるものもあり、その技法が当遺跡においても用いられていたことが確認できた。

瓦粘土の採掘坑 調査地周辺では江戸時代（天保年間）から昭和59年まで製瓦が盛んで、最盛期には9軒11基の窯が操業していた。その粘土が町田の水田下に求められ、遺跡発見の契機ともなっている。調査区において、その粘土採掘の様子が観察できた。

A区東側では掘り残した畦を面的に確認した（挿図26上）。畦の内側は径（一辺）10mほどの橢円形～不整形で、粘土を追って横に掘り進めていくのではなく、一定の範囲を決めいくつもの穴を掘って採掘していく様子が窺えた。その断面は半円形を呈している（挿図26下）。穴には東山からの押し出しである泥岩細角礫土を埋めている。



挿図26 粘土採掘坑

2 町田遺跡基本層序の埋積過程

町田遺跡の立地する光段丘の町田面は盆地形成の後、長峰山地のブロック隆起に伴った岩石段丘である。町田面は、河床面から11mほどの高さに基盤岩を覆って2m内外の河床礫層が分布し、その上位は河床礫層を基底として6m内外の厚さで泥質層や砂礫層および、扇状地堆積物の泥岩岩屑などを重ねる。

今回の調査は、局部的に限られた範囲のため事象の把握が十分でなく、遺跡全体を推敲するには資料不足を免れない。一応、確認された土相を合成して基本層序を作成し、土層の共通性から堆積物をVI群に区分して考察を試みた。

基底礫層 硬砂岩・チャート・粘板岩・ヒン岩・安山岩などを中心に、さらに花崗岩も含む淘汰の進んだ20cm以下の亜円礫～亜角礫で構成される。粗粒砂が礫間を充填する。

基盤岩の侵食面を不整合に礫層が2mほどの厚さで埋めており、礫層上面の一部では表層流の細礫を散点させる粗粒砂層が指交状に分布する。砂層は、粘性を伴わない犀川の河成砂である。

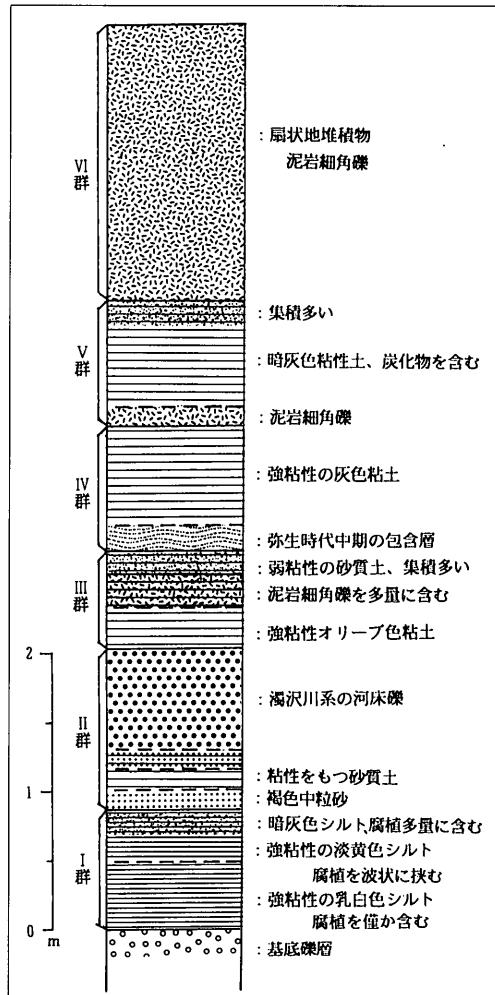
この段階の犀川は、いわゆる砂礫掃流河川であり、犀川は梓川の影響下に蛇行を強いられ離水間もない光段丘や盆地東縁を侵食していく。侵食面には網状流が幾本も流れ、第三段丘礫層は島状に残されて中洲性の微高地が形成された。

やがて河川の活動が鎮静化の傾向にあったかも知れない。水位の相対的な低下に伴って離水し中洲的微高地と山麓の間には、ある程度の面積を持った凹地形が形成されたものと思われる。遺構など検出されず堆積期を絞り込むことは難しいが、隆起量や断層の垂直変移速度から推測すると、およそ4200～4600年前、縄文時代中期後半の離水期を推測する。

堆積物Ⅰ群 段丘礫層を直接に覆う乳白色シルト層。層厚86cm。河川の影響を脱した砂礫の皿状凹地は、湛水の進行する中で面積を広げて池沼性の地形となり、そこに周辺から雨水によって緩斜面を微粒土が運ばれ、静かに沈積して行ったものである。

全般的に強粘質土で、腐植を含む。腐植は上位になるにつれて混入度を増す。中部では葉理状に波形を連続させる微細な腐植を何枚かはさみ、上部では全体に混じり合って土色を暗色に変じている。そして次第に粗粒化への傾向を見せる。約3600年前、縄文時代後期中頃まで、形状を安定させていた池沼への堆積を進めたものと思われる。

堆積物Ⅱ群 潶沢川(田沢川)系の砂層・砂土層・礫層。層厚116cm。先行河流であった濶沢川は



插図27 基本層序土層断面図

洪水期に、溢流した混濁流を池沼地帯へ流し込むようになり、細砂また泥土を供給した。やがて流路の停滞によって北方に河道を変えて池沼地帯に流れ込むと、池沼地帯の排水を南西方に求めた。以降、池沼地帯は恒常的な濁沢川の氾濫原に変じ、乱流によって一様の広がりをもつ礫層を堆積していった。

下部は粘性に富み小さな粘土塊や砂岩塊を含む粗粒砂である。上位になるにつれ砂粒は変化し、腐植の混入を増す。砂優勢な土層である。上部は指頭大～こぶし大の河床礫層に移行する。

これは、池沼地帯から脱して本格的に濁沢川の影響下に置かれたことを意味しており、礫は背後の青木層の再食礫や砂岩の風化礫などを混在した礫層である。酸化鉄が表面に付着して、全般に黄褐色を呈している。やがて段丘の上昇、水位の相対的な低下によって濁沢川は流路を西方向にとると、礫層の堆積は終了して池沼地帯は濁沢川から離水した。およそ2600年前、縄文時代晚期頃と推定される。

堆積物Ⅲ群 奥沢系の黄褐色粘土層。一部泥岩細角礫を含む。層厚70cm。濁沢川の影響を離れ安定期にあった池沼地帯は、北方の野田面上に扇状地を形成しながら乱流していた奥沢が、流路を南方に移すようになり池沼地帯へ土砂を運んだ。泥土を主体とし、ときには砂岩細礫や泥岩細角礫を混入した粗粒質土である。

この段階で奥沢は、すでに山地深く侵食し青木層の砂質泥岩地域に受水域を確保していたので、長雨時など増水期には濁流化して盛んに泥土を運び、池沼地帯を扇端化して細粒物の堆積を進めた。一部に泥岩細角礫を含むことから、この頃二場沢が渓流となり山地斜面の別所層域の侵食を始め、奥沢に合流して洪水期などに泥岩細角礫をもたらしたものと考える。

上面からは弥生時代中期の遺構が掘り込まれていることなどから、およそ2000年前、弥生時代前期末には堆積が終ったものと推定する。

堆積物Ⅳ群 奥沢系の灰色粘性土。層厚90cm。堆積物Ⅲ群とほとんど同様な土層である。この頃になると河川は極めて安定した時期が到来して、奥沢が継続的にもたらす泥土の供給のほか、氾濫を物語る堆積物は観察されない。町田遺跡に所在する弥生時代の集落はこうした環境の中に営まれ、段丘上の泥層の発達した一帯に居住域を設け、段丘崖下の犀川後背湿地に生産域を設定していたものと思われる。

屋内に周溝を巡らした住居址が認められることから、浸透水は地域を湿地化していたものと推察され、土質はマンガン顆粒を含み、酸化鉄の汚染を著しく受けている。IV群は奥沢扇状地の成長とともに堆積が進められたが、その終了は約1200年前、平安時代初期と推定される。

堆積物Ⅴ群 下部は泥岩細角礫層、中上部は暗灰黄色粘土層。層厚92cm。この頃から高松沢が山地斜面の侵食を活発に行なうようになり、堆積物IV群を覆って（一部指交状）出水期には中央付近まで泥岩細角礫土を流出した。しかし、堆積力は弱く一時的な堆積に過ぎず層厚は薄い。この細角礫層は、下部層が緻密な不透水層のため浸透水の保水層的役割を果たしている。

この段階で奥沢は、扇状地の形成を満たし天井川となって流路を西へとるようになった。これに代つて上部層は、もっぱら二場沢と鎌留沢のもたらす腐植を混在した泥土の堆積が進行した。

泥土層は比較的保水性に富んでおり、土層全体が常に停滞水の影響を受けて土中の鉄など可溶性物質の溶脱が目立たない。むしろ鉄は酸化されずに水酸化鉄の青色が着色している。可耕期が2回ほどあったようだが不明確である。

3 集落景観の復元

VI群堆積物の及ばない段丘端などの平坦地は、わずかな湧き水と濁沢川からの用水によって水田が耕されている。しかしこの地域は、明治以降の瓦生産のため粘土層の土取りが進み、ほぼ2mの深さに達して、弥生遺跡を破壊し攪乱させている。

なお、伝承される戦国期の町田館跡について、範囲の限られた調査のためその所在を確かめることはできなかった。およそ400年前、戦国時代には堆積が終了したものと推定される。^{まち だやかた}

堆積物VI群 扇状地地形の泥岩細角礫層。層厚2m+。背後の高松沢が運んだ泥岩細角礫土である。山麓沿いにV群を覆い、半径250mほどの小高い扇状地や崖錐をつくる。

一般的に別所層泥岩の風化崩落物を出水期に流出させる堆積環境が顕著である。扇状地堆積物は、泥岩細角礫層から細粒質が水とともに抜け出てしまい粗粒質で保水性がなく、また斜面が急なため土地利用は進んでいない。堆積期は中世以降である。

3 集落景観の復元

集落の広がり 段丘端に建物を発見し、ほぼ集落の西端をつかむことができた。そこで、過去の遺物出土地点を結ぶと、東西が約300m、南北が約350mほどになる。段丘端は削られており、集落はさらに西にのびていたであろうから、かなり規模の大きなムラであったといえる。

集落の変遷 壱穴建物10軒、掘立柱建物3軒を発掘したが、これらの軸は概ね、A：SB1・SB5・SB9、B：SB3・ST1、C：SB4・SB6・SB10・ST2、D：SB7・SB8・ST3の4グループに分けることができ、これらが同時存在していた可能性が高い。出土土器からは、SB1・2・6・9とSB3の間には時間差が認められそうであり、SB8とSB9、SB7とST2の切り合い関係も考慮に入れると、A→D→C→Bという集落の変遷を読みとくことができる。⁽⁵⁾

集落の景観 今回の発掘調査は広い遺跡内での限られた部分で行われたにすぎない。十分とは言えないが、以下、得られた資料によりできる限り集落の景観を復元してみたい。

町田遺跡に集落が出現するのは、今から約2000年前、弥生時代中期後半になってからである。段丘上に、壹穴建物と掘立柱建物あわせて10数軒からなるムラが数グループに分かれて広がっていたと推測される。前面に川、背後に山がせまる絶好の環境で、段丘下、田沢川が犀川と合流するあたりにできた後背湿地が生産域（水田耕作の場）となったであろう。

自然科学分析結果から明らかかなように、周辺にはヨシの繁る湿地もいくつか残っていた。また、段丘上から背後の山にかけてはコナラ・クリなどの落葉広葉樹やモミ・ツガなど針葉樹からなる林が広がっていた。立木を伐採する太形蛤刃石斧、加工する扁平片刃石斧等が出土しており、これらの木を切り倒して、建築材にしたり、水田で用いる木製農具を製作していたことが窺える。一方、打製石斧や大型砂岩製スクレイパー類（収穫具）の出土も多く、段丘上では畑作も盛んに行われていたであろう。

壹穴建物内には、一家おそらく4・5人前後が生活をしていたとみられる。壺には食料等を貯蔵し、甕を炉に据えて調理をした。食膳にはコメの他に犀川で獲った魚や山で獲った小動物、採集した木の実などが並んだ。また、犀川からチャートや粘板岩などを運び、石器特に磨製石鏃の製作にあたった。磨

製石鏃は武器あるいは小動物を射るための道具として盛んに利用された。東山山中（菖蒲平窯跡群内）で発見された磨製石鏃は、町田遺跡から獲物を追って入り、射ったものかもしれない。

秋には稻の刈り取りが行われる。石包丁を使って穂摘みをし、コメは掘立柱建物（高床倉庫）に蓄えられた。集落の中央はおそらく広場になっており、豊作を祈ったり葬送に伴う祭祀もそこで行われたであろう。既出遺物中にある人面付土器はその際に使われたものかもしれない。

墓らしい遺構は未発見であり、段丘上の他の場所にあったと考えられる。

集落の退転 しかし、この集落も長くは続かなかった。瓦粘土は弥生時代の建物の直上のものを主体的に採取しており、このことからも遺跡周辺は生活に不向きな湿地になったことがわかる。再び集落が形成されるようになるのは平安時代になってからで、西に望める豊科町内の平坦地の開発と連動する。やがて、中世後期には町田館が築かれ、そこを拠点に周辺の開発が進むことになる。

註

- (1) 1期は良好な資料がなく、様相は不明である。
- (2) 直井雅尚氏のご教示による。
- (3) 関沢聰氏のご教示による。
- (4) 地元で製瓦業を営んでいた増澤達海氏（大正8年生まれ、4代目）によれば、粘土は検土杖をさすことによって容易に探せたという。採掘は1ヵ所に4人ほどで入り、採取した粘土は、牛馬や機械力が用いられる前は、「おにぎる」にひもを十字にかけて天秤棒で担いで運び込んだという。なお、氏は製作道具類も保存しておられる。
- (5) ただし、前述のように、建物の構造に認められる差異とは合致しない。

引用・参考文献

- 桜井弘人 1986 「石器」「石製農具について」『恒川遺跡』
- 島田哲男 1995 「原始の豊科」『豊科町誌 歴史編』
- 関沢聰 1990 「弥生時代の石器」『松本市県町遺跡』
- 関沢聰・直井雅直 1996 「弥生時代の生活と文化」『松本市史 第二巻歴史編Ⅰ』
- 直井雅尚 1991 「松本平における百瀬式土器の実態」『長野県考古学会誌』63号
- 直井雅尚 1999 「松本盆地南部における弥生中期後半～後期の土器編年」『99シンポジウム長野県の弥生土器編年』

第6章 総括

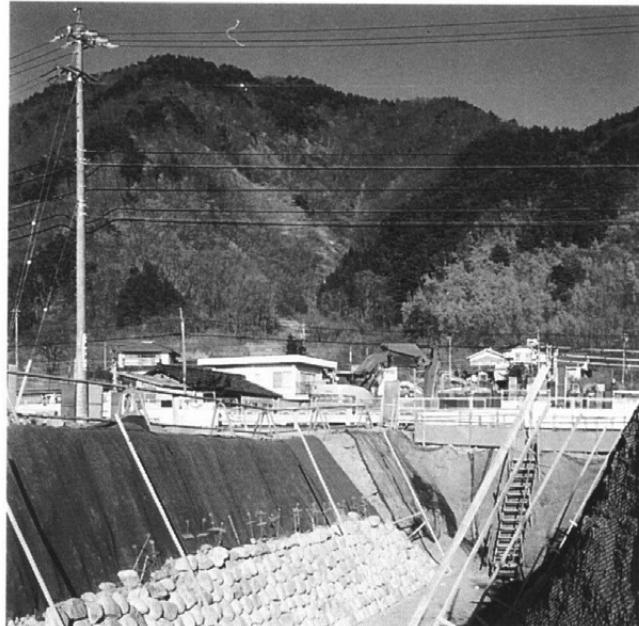
北アルプスを背景に広がる水田は安曇野を代表する景観の一つである。私たちが当たり前のように目にしているこの景観は、長い年月をかけて築き上げられてきた。その陰には、広大な沖積地を開墾してきた郷土の先人たちの絶ゆまない努力があったことは言うまでもない。そしてまた、現在の私たちの生活習慣も水田耕作（稻作）と密接に係わって形成されてきた。

従来、この広大な沖積地の開発史は、戦国期に築かれた城館跡や江戸時代に開削された用水堰によって語られることが多かった。しかし、1991年から3カ年にわたって行われた吉野町遺跡・梶海渡遺跡・鳥羽遺跡の発掘調査で、平安時代の竪穴建物や鉄製農具（鎌）などが発見され、微高地に集落が進出し、水田耕作を行っていたことが明らかになった。そして、今回の町田遺跡の発掘によって、豊科町で初めて稻作を始めた人々の生活の跡が明らかになったのである。

町田遺跡に暮らした人々は、はるか2000年も前の人々であるが、私たちは間違いなく彼らの築いた基盤の上に生活している。そういう意味では、町田遺跡は私たちさらに未来の人々にとって、生活の原点であると言えよう。私たちは今回得られた資料を町づくりに活かし、そして未来に正しく伝えていかねばならない。

ところで、今回の調査は町田遺跡においての初めての発掘となった。破壊が懸念されていたものの、思いがけず多くの遺構が分布していることが明らかになり、多くの成果をあげることができた。遺跡内には国道が走っており、今後の開発も十分に予想される。今回の調査を契機に保護策を講じていかねばならない。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただきました多くの皆様に深く感謝申し上げ、結びといたします。



挿図28 調査地近景（1998年12月,工事中）

付 表

- 1 柱 穴 一 覧 表
- 2 弥 生 土 器 觀 察 表
- 3 石 器 觀 察 表
- 4 出 土 石 器 一 覧 表
- 5 積 穴 建 物 出 土 石 器 一 覧 表

付表1 ピット一覧表

番号	位置	規模(cm)			平面形	覆	土	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ					
1	B区東	22	21	28	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			
2	B区東	23	23	15	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
3	B区東	14	13	16	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
4	B区東	27	27	40	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			ST 1
5	B区東	20	20	37	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			//
6	B区東	28	28	42	円形	黒褐色土(10YR 3/1)			//
7	B区東	26	26	20	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			//
8	B区東	28	28	25	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			//
9	B区東	21	21	33	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			//
10	B区東	31	29	27	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			//
11	B区東	33	30	40	円形	黒褐色土(10YR 3/2)	169		//
12	B区東	35	35	51	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			//
13	B区東	32	30	27	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			//
14	B区東	26	26	9	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
15	B区中	20	17	19	円形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3)			
16	B区中	24	24	16	円形	黒褐色土(10YR 3/2)	77・78		
17	B区中	29	26	27	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
18	B区中	17	17	11	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
19	B区中	19	18	27	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			
20	B区中	28	27	35	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
21	B区中	25	23	29	円形	黒褐色土(10YR 3/1)			
22	B区中	30	30	21	円形	黒褐色土(10YR 3/1)			
23	B区中	28	28	48	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
24	B区中	27	27	19	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
25	B区中	52	50	36	円形	にぶい黄褐色土(10YR 4/3)	79		
26	B区中	20	20	8	円形	暗灰黄色土(2.5Y 4/2)			
27	B区中	22	20	34	円形	暗灰黄色土(2.5Y 4/2)			
28	B区中	—	40	36	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			/P29
29	B区中	—	18	21	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			P28/
30	B区中	22	—	8	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
31	B区中	17	15	11	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
32	B区中	30	30	28	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
33	B区中	—	29	7	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
34	B区中	—	33	5	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
35	B区西	30	30	9	円形	暗灰黄色土(2.5Y 5/2)			
36	B区西	32	31	14	円形	暗灰黄色土(2.5Y 5/2)			
37	B区西	23	23	7	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
38	B区西	51	50	29	円形	黒褐色土(10YR 3/2)他(挿図20)			ST 2,/SB 7
39	B区西	40	39	25	円形	褐灰色土(10YR 4/1)他(挿図20)	80~83		//
40	B区西	40	39	10	円形	暗褐色土(7.5YR 3/3)	84		//
41	B区西	64	43	39	楕円形	黒褐色土(7.5YR 2/2)他(挿図20)	85・86		//
42	B区西	37	37	10	円形	灰褐色土(7.5YR 4/2)			
43	B区西	29	29	12	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
44	B区西	22	20	6	円形	灰黃褐色土(10YR 4/2)			
45	B区西	34	34	10	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			
46	A区東	26	25	16	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
47	A区東	21	20	27	円形	暗褐色土(10YR 3/4)			
48	A区東	25	25	6	円形	暗褐色土(7.5YR 3/3)			
49	A区中	26	25	16	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
50	A区東	26	19	19	楕円形	暗褐色土(10YR 3/4)			
51	A区東	50	45	39	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
52	A区東	20	20	31	円形	暗褐色土(7.5YR 3/3)			
53	A区東	18	18	12	円形	暗褐色土(10YR 3/4)			
54	A区東	—	36	23	円形	暗褐色土(10YR 3/4)			
55	A区東	18	17	5	円形	暗褐色土(10YR 3/4)			
56	A区中	30	30	10	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
57	A区中	24	22	37	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		ヒノキ科材	
58	A区中	26	26	41	円形	褐灰色土(10YR 4/1)			
59	A区中	26	25	28	円形	褐灰色土(10YR 4/1)			
60	A区中	23	23	4	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			

番号	位置	規模(cm)			平面形	覆土	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ				
61	A 区中	25	24	—	円形	にぶい橙(2.5YR 6/4)		上面に焼土
62	A 区中	42	28	4	楕円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
63	A 区中	20	20	10	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
64	A 区中	32	28	19	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
65	A 区中	26	18	12	楕円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
66	A 区中	30	28	6	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
67	A 区中	40	32	15	楕円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
68	A 区西	30	29	23	円形	黒褐色土(10YR 2/2)		
69	A 区西	27	27	28	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
70	A 区西	30	29	14	円形	暗褐色土(7.5YR 3/3)		
71	A 区西	20	20	13	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
72	A 区西	21	14	4	楕円形	暗褐色土(10YR 3/4)		
73	A 区西	36	35	18	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
74	A 区西	20	20	24	円形	黒褐色土(10YR 3/2)	158	
75	A 区西	45	36	54	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)	168	
76	A 区西	—	27	5	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
77	A 区西	20	20	40	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
78	A 区西	20	20	16	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
79	A 区西	18	18	9	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
80	A 区西	26	23	38	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
81	A 区西	23	22	18	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		/SK10
82	A 区西	—	—	5	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		P83/
83	A 区西	40	40	34	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		/P82
84	A 区西	34	16	4	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
85	A 区西	25	24	11	円形	黒褐色土(10YR 3/2)	87・167	
86	A 区西	33	24	8	楕円形	灰黃褐色土(10YR 4/2)		
87	A 区西	42	—	3	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
88	A 区西	11	11	3	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
89	A 区西	20	19	12	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
90	A 区西	25	24	6	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
91	A 区西	18	18	20	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
92	A 区西	28	28	18	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
93	A 区西	21	21	8	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
94	A 区西	34	34	26	円形	黒褐色土(10YR 3/2)	194	/SD 2
95	A 区西	45	—	39	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
96	A 区西	32	32	25	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
97	A 区西	35	35	32	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
98	A 区西	32	30	32	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
99	A 区西	31	30	30	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
100	A 区西	18	16	15	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
101	A 区西	28	27	35	円形	黒褐色土(10YR 3/2)	88	
102	A 区西	30	30	6	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
103	A 区西	24	24	15	円形	黒褐色土(10YR 2/2)		
104	A 区西	20	20	18	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
105	A 区西	20	20	25	円形	暗褐色土(10YR 3/4)		
106	A 区西	26	26	12	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
107	A 区西	25	25	7	円形	黒褐色土(10YR 2/2)		
108	A 区西	12	12	8	円形	黒褐色土(10YR 2/2)		
109	A 区西	35	25	14	楕円形	黒褐色土(10YR 2/2)	145	
110	A 区西	36	35	13	円形	黒褐色土(10YR 2/2)		
111	A 区西	28	28	17	円形	黒褐色土(10YR 2/2)		
112	A 区西	11	11	11	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
113	A 区西	10	10	13	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		/SD 7
114	A 区西	35	30	4	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		/SD 3
115	A 区西	32	27	13	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
116	A 区西	14	13	6	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
117	A 区西	15	15	7	円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
118	A 区西	16	12	10	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)		
119	A 区西	8	8	2	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		
120	A 区西	17	16	14	円形	黒褐色土(10YR 3/2)		

番号	位置	規模(cm)			平面形	覆	土	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ					
121	A区西	16	16	24	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			/SD 3
122	A区西	30	25	13	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
123	A区西	15	15	2	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
124	A区西	13	13	2	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
125	A区西	53	38	29	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
126	A区西	—	10	7	不整方形	暗褐色土(10YR 3/3)			SD 4 /
127	A区西	58	—	53	円形	灰黄褐色土(10YR 4/2)			SK17/
128	A区西	40	—	39	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
129	A区西	21	21	18	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			
130	A区西	—	—	8	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			SD 5 /
131	A区西	18	17	23	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			
132	A区西	14	13	7	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
133	A区西	—	—	7	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
134	A区西	37	29	18	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
135	A区西	16	16	12	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
136	A区西	27	26	21	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			/SD 5
137	A区西	32	25	19	楕円形	暗褐色土(10YR 4/3)			/SD 5
138	A区西	25	20	10	楕円形	暗褐色土(10YR 4/3)			/SD 5
139	A区西	25	24	11	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			/SD21
140	A区西	20	20	21	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			
141	A区西	32	28	31	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			/P142
142	A区西	—	18	22	楕円形	暗褐色土(10YR 4/3)			P141/
143	A区西	26	25	25	円形	灰黄褐色土(10YR 4/2)			
144	A区西	15	14	6	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			
145	A区西	25	24	19	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			
146	A区西	14	14	10	円形	暗褐色土(10YR 4/3)			
147	A区西	37	35	17	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			/SB 9
148	A区西	38	28	15	楕円形	黒褐色土(10YR 3/2)			/SB 9
149	A区西	31	29	17	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
150	A区西	33	20	22	不整円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
151	A区西	17	17	10	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
152	A区西	37	35	6	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
153	A区西	58	15	12	不整円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
154	A区西	24	24	23	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			SB 9 /
155	A区西	40	36	30	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
156	A区西	25	24	13	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
157	A区西	38	32	17	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			
158	A区西	17	15	14	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			
159	A区西	15	14	12	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			
160	A区西	23	21	20	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			
161	A区西	47	45	17	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
162	A区西	—	48	65	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			
163	A区西	21	21	12	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
164	A区西	65	45	31	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
165	A区西	23	22	31	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
166	A区西	30	29	31	円形	暗褐色土(10YR 3/3)	89		
167	A区西	14	13	4	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
168	A区西	40	39	34	円形	黒褐色土(10YR 3/2)	90	ST 3	
169	A区西	68	50	36	楕円形	黒褐色土(10YR 3/2)			〃
170	A区西	37	37	27	円形	黒褐色土(10YR 2/2)	91		〃
171	A区西	40	40	42	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			〃
172	A区西	80	38	36	不整円形	暗褐色土(10YR 3/3) 他(挿図21)			〃
173	A区西	28	28	25	円形	暗褐色土(10YR 3/3)	92・93		〃
174	A区西	37	36	27	円形	黒褐色土(10YR 3/2)			〃
175	A区西	47	46	45	円形	黒褐色土(10YR 2/2)	94		〃, /SD 6
176	A区西	45	42	36	円形	黒褐色土(10YR 2/2)			〃
177	A区西	51	37	41	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			〃
178	A区西	12	12	8	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
179	A区西	71	35	9	楕円形	暗褐色土(10YR 3/3)			
180	A区西	16	16	21	円形	暗褐色土(10YR 3/3)			/SD 7

番号	位置	規模(cm)			平面形	覆土	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ				
181	A 区西	15	13	13	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD 7
182	A 区西	15	14	8	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD 7
183	A 区西	10	10	3	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
184	A 区西	22	21	22	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
185	A 区西	40	38	43	円形	黒褐色土 (10YR 2 / 2)		/SD 6
186	A 区西	37	34	10	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
187	A 区西	39	37	13	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
188	A 区西	35	35	9	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
189	A 区西	35	35	8	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
190	A 区西	25	25	9	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
191	A 区西	48	45	8	円形	黒褐色土 (10YR 3 / 2)		/SD 6
192	A 区西	64	45	51	楕円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
193	A 区西	23	22	17	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
194	A 区西	25	22	14	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
195	A 区西	50	30	57	楕円形	黒褐色土 (10YR 3 / 2)		
196	A 区西	25	22	4	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 4)		
197	A 区西	23	20	42	円形	灰黄褐色土 (10YR 4 / 2)		
198	A 区西	13	12	7	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 4)		
199	A 区西	11	11	9	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 4)		
200	A 区西	37	20	19	楕円形	暗褐色土 (10YR 3 / 4)		
201	A 区西	21	16	15	楕円形	暗褐色土 (10YR 3 / 4)		
202	A 区西	25	24	5	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 4)	95	
203	A 区西	28	27	26	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 4)		
204	A 区西	30	20	23	楕円形	灰黄褐色土 (10YR 4 / 2)		
205	A 区西	18	15	28	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)	96	
206	A 区西	38	36	49	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
207	A 区西	22	22	37	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
208	A 区西	39	37	17	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD11
209	A 区西	24	21	33	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD10・11
210	A 区西	—	38	19	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		SD11/
211	A 区西	—	11	4	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		SD10/
212	A 区西	30	28	8	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
213	A 区西	—	—	13	楕円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
214	A 区西	—	32	4	楕円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		SK17/
215	A 区西	27	27	45	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD 7
216	A 区西	20	20	18	円形	灰黄褐色土 (10YR 4 / 2)		
217	A 区西	22	19	24	円形	暗褐色土 (10YR 4 / 3)		
218	A 区西	22	19	27	円形	黒褐色土 (10YR 3 / 2)		
219	A 区西	24	21	31	円形	黒褐色土 (10YR 3 / 2)		/SD 5
220	A 区西	35	29	11	楕円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
221	A 区西	24	24	32	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
222	A 区西	23	21	29	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
223	A 区西	20	16	13	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD17
224	A 区西	33	23	25	楕円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
225	A 区西	44	20	38	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		P226/
226	A 区西	23	21	36	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/P225
227	A 区西	10	10	4	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
228	A 区西	14	12	5	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
229	A 区西	26	24	10	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD 5
230	A 区西	19	18	8	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		
231	A 区西	22	22	19	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		/SD14
232	A 区西	32	30	24	円形	暗褐色土 (10YR 3 / 3)		

付表2 弥生土器観察表

遺構	番号	器種	法量(cm)			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径			
SB 1	1	壺	16	—	—	* 頸部から口縁部が大きく外反する。頸部文様帶は縄文施文。	* 口縁端部縄文。頸部文様帶は縄文施文。	
	2	甕	14	—	—	* 口縁部は緩やかに外反。	* 口縁端部縄文。頸部波状文。胴部縦羽状条痕。	
	3		18	—	—	* 口縁は受け口状。	* 胴部波状文。	
	4		17	16	6.9	* 口縁部は緩やかに外反。5は外反の度合いが強い。	* 口縁端部刺突。胴部波状文。	
	5		24	—	—		5は頸部に横線文。	
	6		19	—	—		* 口縁端部縄文?。頸部簾状文。胴部縦羽状条痕。	
	7	鉢	17	—	—	* 口縁端部に突起(4単位か)	* 赤彩。	
	8	甕?	—	—	—	* 底部に窄孔。	* 内外ナデ。	
	9	甕	—	—	—	* 口縁はやや内湾。	* 口縁部波状文。	
	10	壺	—	—	—		* 縄文と沈線による文様帶。	
	11		—	—	—		* 平行沈線の区画内を山形沈線。	
	12	甕	—	—	—		* 波状文と垂下する条痕。	
	13		—	—	—		* 波状文。	
	14		—	—	—	* 頸部簾状文。胴部縦・斜条痕。		
SB 2	15	甕	20	23	6.4	* 口縁部は弱く外反。	* 口縁端部縄文。頸部横線文。胴部は縦羽状条痕。	
	16	壺	—	—	8.8		* 胴部に弱い擦痕。	
SB 3	17	壺	13	—	—	* 口縁部に弱い段をもつ。	* 口縁部に縄文と山形文の文様帶。	
	18		10	—	—	* 広口の壺。	* 赤彩。	
	19		—	—	10		* 内外ナデ。	
	20	甕	16	—	—	* 口縁部は弱く外反。	* 頸部簾状文。胴部波状文。	
	21		18	—	—	* 口縁部は外反。	* 口縁端部きざみ。	
	22		—	—	6.3		* 内外ナデ。	
	23		—	—	5.8			
	24	高坏?	—	—	6.9	* 脚端部は面をなす。	* 縦ハケと磨きを施す。	
	25	甕	—	—	—		* 縦条痕。	
	26		—	—	—		* 波状文。	
	27	壺	—	—	—		* 沈線と縄文による文様帶。	
	28		—	—	—			
SB 4	29	甕	19	—	—	* 口縁はやや内湾。	* 頸部簾状文。	
	30	鉢	15	—	—	* 口縁端部に突起(4単位?)	* 磨き。赤彩。	
	31	甕	—	—	6.1		* 内外ナデ。	
	32	壺	—	—	6.4		* 内外ナデ。	
SB 5	33	甕	—	—	—		* 頸部簾状文。胴部波状文。	
	34	壺	—	—	9.5		* 胴部雑な磨き。	
	35	高坏?	—	—	—		* 内外ナデ。	
	36	—	—	—	—			
	37	壺	—	—	—		* 沈線と山形文の文様帶。	
SB 6	38	甕	—	—	—		* 頸部簾状文。	
	39	壺	—	—	—		* 胴部上位懸垂横帯文(波状文), 中位平行沈線と山形沈線を施す。	
	40		—	—	9.6			
	41	甕	24	—	—	* 口縁部は外反してから弱く立ち上がる。	* 外面磨き。内面ハケ。	
	42	鉢	—	—	7.0		* 赤彩。	
	43	甕	—	—	—	* 口縁部は外反。	* 口縁端部縄文。頸部波状文。	
	44		—	—	—		* コ字重ね文。	
	45	—	—	—	—		* 縦羽状条痕。	
SB 7	46	甕	16	—	—	* 口縁部が強く外反する。	* 口縁端部縄文。	
	47	鉢	15	—	—	* 口縁端部が弱く立つ。	* 磨き。赤彩。	
	48	壺	—	—	5.8		* 内外ナデ。内面はきれいに仕上げる。	
	49		—	—	—			
	50	台付甕	—	—	—	* 口縁は受け口状。	* 縄文の上に円形の浮文貼付。	

遺構	番号	器種	法量(cm)			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径			
SB 8	51	甕	19	—	—	* 口縁部は外反する。	* 頸部簾状文。	
	52	壺	—	—	7.8		* 内外ナデ。	
	53	高坏?	—	—	—		* 内外ナデ。	
	54	甕	—	—	—		* 頸部簾状文。胴部波状文。	
SB 9	55	甕	15	—	—	* 口縁部は弱く外反。	* 頸部簾状文、胴部波状文。	
	56	壺	—	—	—		* 平行沈線と同一原体による刺突。	
	57	台付甕?	—	—	8.6	* 脚端部は丸くおさめる。	* 内外ナデ。	
	58	鉢	11	—	—	* 半円を描いて立ち上がる。	* 口縁部窄孔。器表荒れており赤彩不明。	* 孔は2個一対?
	59	甑	—	—	4.0	* 底部に窄孔。	* 内外ナデ。	
	60	甕	—	—	—		* 波状文。	
	61		—	—	—		* 縦羽状条痕。	
	62		—	—	—		* 頸部波状文。胴部斜条痕(羽状)。	
SB10	63	甕	15	—	—	* 口縁部が強く外反する。	* 頸部波状文。	
	64		—	—	—		* 胴部条痕(羽状)。	
	65		—	—	7.4		* 内外ナデ。	
	66	高坏・台付甕?	—	—	5.7	* 脚端部は面をなす。	* 内外ナデ。	
	67	壺	13	—	—	* 口縁部は弱い段をなす。		
	68	—	—	7.0		* 内外ナデ。		
	69	鉢	—	—	7.4		* 赤彩。	
SK10	70	高坏?	—	—	6.2	* 脚端部は丸くおさめる。	* 内外ナデ。	
	71	甕?	—	—	6.1		* 内外ナデ。	
SK16	72	鉢	14	—	—	* 口縁端部に突起(4単位?)	* 磨き。赤彩。	
	73	甕	15	—	—	* 口縁部は弱く外反する。	* 口縁端部荒い縄文。頸部簾状文。	
	74	高坏・台付甕?	—	—	8.2	* 脚端部は丸くおさめる。	* 内外磨き?	
	75	鉢?	—	—	5.9		* 内面磨き?	
SK18	76	甕	—	—	6.1		* 内外ナデ。	
P16	77	甕	16	—	—	* 口縁部は弱く外反し、やや受け口状に立つ。	* 頸部波状文。胴部斜条痕。	
	78	壺・甕?	—	—	6.8		* 内外ナデ。	
P25	79	甕	16	—	—	* 口縁端部はやや面をなす。	* 口縁端部縄文?	
P39	80	高坏?	—	—	—	* 内外ナデ。		* ST 2
	81	壺	—	—	5.9			
	82		—	—	14.0			
	83		—	—	9.6			
P40	84	台付甕	—	—	—	* 口縁は受け口状。	* 平行山形沈線上に円形貼付文。	
P41	85	壺	—	—	—		* 平行山形沈線上に円形浮文貼付。	
	86		—	—	—		* 波状文と横条痕の文様帶。	
P85	87	鉢	19	—	—	* 口縁部が内湾しながら立ち上がる	* 磨き。赤彩。	
P101	88	壺	9.5	—	—	* 口縁部は外反し、端部で面をなす。	* 口縁端部縄文? 内面磨きと波状文。	
P166	89	甕	18	—	—	* 口縁部は弱く外反。		
P168	90	壺	12	—	—	* 口縁部は大きく外反。		* ST 3
P170	91	甕	—	—	—		* 内外ナデ。	
P173	92	甕	20	—	—	* 口縁部は外反する。	* 口縁端部縄文? 頸部簾状文。	
	93	高坏	24	—	—	* 口縁部は大きく外反し、内面に棱をもつ。	* 内面磨き。赤彩。	
P175	94		—	—	6.5	* 脚端部は面をなす。		
P204	95	台付甕	9.5	—	—	* 口縁部は受け口状。	* 口縁部は縄文と山形沈線。頸部に円形浮文貼付。	
P207	96	壺	—	—	—	* 口縁部は大きく外反する。	* 隆带上にヘラ状工具によるきざみ。	

遺構	番号	器種	法量(cm)			形態の特徴	技法の特徴	備考
			口径	器高	底径			
遺構外	97	甕	26	—	—	* 口縁部は弱い段をなし、受け口状になる。	* 口縁端部繩文。頸部下に波状文。	
	98		22	—	—	* 口縁部は強く外開。	* 口縁端部・頸部繩文。	
	99		—	—	—		* 頸部簾状文。胴部波状文。	
	100		15	—	—	* 小型。口縁部は弱く外反。	* 頸部やや下に波状文。	
	101		18	—	—	* 口縁部は弱く立ち上がり、受け口状になる。		
	102		—	—	—	* 口縁部内面に段をもつ。	* 頸部簾状文。	
	103	壺	25	—	—	* 口縁部は受け口状。太頸壺。	* 口縁部繩文。	
	104		12	—	—	* 口縁部は受け口状。		
	105		7.2	—	—	* 口縁部は直立ぎみに立つ。		
	106		—	—	—		* 沈線(コ字重ね文?)上に円形浮文貼付。	
既出	107	鉢	15	—	—	* 口縁部はまっすぐ外開。		* 壺?
	108		14	—	—	* 口縁部はやや膨らむ。端部に突起(4単位?)をもつ。		
	109	高坏	15	—	—	* 口縁部は内湾。	* 赤彩?	
	110		26.0	—	—	* 口縁部は強く外開し、内面に稜をもつ。	* 内面磨き。赤彩。	
	111		—	—	—	* 体部と脚部境が膨らみをもつ。	* 体部内面赤彩。	
	112		—	—	6.2	* 脚端部は丸くおさめる。	* 内外ナデ。	* 台付甕?
	113		—	—	—		* 内面赤彩。	
	114	蓋?	6.8	3.3	—	* 端部は面をなす。	* 内外ナデ。	
	117	壺	12	—	—	* 口縁部は強く外開。端部は面をなす。	* 口縁端部繩文。	
	118		13	—	—			
	119		16	—	—			
	120		13	—	—	* 口縁端部に突起を付ける。	* 口縁部山形沈線を施す。	
	121		17	—	—	* 口縁部は受け口状。	* 口縁端部繩文。磨き・赤彩?	
	122		16	—	—		* 口縁部繩文と山形沈線。	
	123		—	—	—	* 磨き出して文様帶浮き出す。	* 沈線と繩文・波状文の文様帶。	
	124		—	—	—	* 注口をもつ。	* 赤彩。	* 注口土器
	125		—	—	5.6		* 沈線と刺突による文様帶。	
	126		—	—	—		* 沈線と山形文による文様帶。	
	127		—	—	6.4	* 磨き出して文様帶浮き出す。	* 沈線と繩文による文様帶。	
	128		17	—	—	* 口縁部は大きく外開する。	* 口縁端部繩文。頸部は沈線と繩文。	
	129		—	—	—		* 沈線と繩文・平行する山形沈線・刺突による文様帶。	
	130		—	—	12		* 内外ナデ。	
既出	131	甕	16	—	—	* 口縁部の外反は弱い。	* 口縁端部櫛できざみ。頸部簾状文。胴部は乱れた縦条痕(羽状)。	
	132		21	—	—	* 口縁部が強く外反する。	* 口縁端部繩文。頸部櫛描横線文。胴部櫛描斜羽状文。	
	133		—	—	12		* 内外ナデ。	
	134		—	—	7.3			
	135		—	—	8.8			
	136	鉢	—	—	13	* 口縁部が内湾する。2孔を施す。	* 磨き。赤彩。	
	137	高坏	—	—	8.1	* 脚端部は弱い面をなす。	* 磨き。赤彩。	
	138	台付甕?	—	—	8.1	* 脚端部は面をなす。	* 内外ナデ。	
	139	高坏	—	—	10.0	* 脚端部は丸くおさめる。円形の窄孔を3カ所。	* 磨き後、櫛描沈線。赤彩。	* 後期末?

付表3 石器観察表

No.	遺構	器種	分類1	分類2	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量	備考
143	A区	打製石鏃		有茎(凸基)	チャート	30.2	18.4	3.3	1.63	
144	SB 6	打製石鏃		無茎(円基)	チャート	(26.2)	23.1	6.1	3.92	
145	P109	打製石鏃			チャート	36.3	23.7	11.2	8.63	
146	A区	打製石鏃	未製品	有茎(凸基)	チャート	39.2	22.9	10.6	6.28	
147	SB 3	磨製石鏃			チャート	21.8	15.0	2.2	0.82	
148	SB 1	磨製石鏃			粘板岩	(10.0)	21.0	(2.2)	0.7	
149	SK10	磨製石鏃			粘板岩	(18.8)	(17.2)	(2.6)	0.99	
150	SB 3	磨製石鏃	未製品	両面・側縁研磨	硬砂岩	(32.7)	(25.0)	(4.1)	3.6	
151	SB 8	磨製石鏃	未製品	両面・側縁研磨	粘板岩	(46.2)	(25.4)	3.4	4.85	
152	SB 3	磨製石鏃	未製品	両面研磨	粘板岩	(39.2)	(27.0)	(2.8)	3.27	擦切施溝痕
153	SB 5	磨製石鏃	未製品	両面研磨	滑石	41.8	24.1	2.1	4.3	
154	A区	磨製石鏃	未製品	両面・側縁研磨	蛇紋岩	43.2	15.9	3.7	4.02	
155	SK10	磨製石鏃	未製品	両面・側縁研磨	粘板岩	(26.8)	(23.9)	(3.0)	2.28	
156		磨製石鏃	未製品	両面研磨	粘板岩	(35.8)	27.9	4.3	6.15	
157	SB 4	磨製石鏃	未製品	両面研磨	輝緑凝灰岩	36.6	22.0	4.1	4.69	
158	P74	磨製石鏃	未製品	両面研磨	チャート	43.3	21.4	3.6	4.12	
159	A区	磨製石鏃	未製品	両面研磨	粘板岩	37.3	17.1	2.2	1.88	
160	SB 1	磨製石鏃	未製品	両面研磨	粘板岩	38.7	18.0	5.1	4.38	
161		磨製石鏃	未製品	片面研磨	粘板岩	(42.7)	22.4	4.4	5.68	
162	SB 1	磨製石鏃	未製品	片面研磨	粘板岩	(58.3)	28.5	5.7	12.28	
163	A区	磨製石鏃	未製品	片面研磨	粘板岩	(42.5)	30.2	7.5	9.54	
164	A区	磨製石鏃	未製品	片面研磨	粘板岩	46.7	29.0	6.4	9.68	
165	SB10	磨製石鏃	未製品	片面研磨	粘板岩	43.5	24.0	4.3	5.13	
166		磨製石鏃	未製品	剥離調整	輝緑凝灰岩	(34.6)	24.0	4.6	3.82	
167	P85	磨製石鏃	未製品	剥離調整	硬砂岩	(27.7)	(19.2)	(5.9)	4.35	
168	P75	磨製石鏃	未製品	剥離調整	粘板岩	(52.5)	31.0	4.9	7.55	
169	P11	磨製石鏃	未製品	剥離調整	粘板岩	(43.1)	23.9	3.8	5.2	
170	A区	磨製石鏃	未製品	剥離調整	粘板岩	(48.5)	(23.8)	(3.8)	5.3	
171	SB 3	磨製石鏃	未製品	片面研磨	輝緑凝灰岩	(69.1)	28.5	4.6	11.82	
172	SB 1	磨製石鏃	未製品	剥離調整	粘板岩	58.8	31.8	10.2	17.75	
173		磨製石鏃	未製品	剥離調整	硬砂岩	48.2	24.5	6.7	9.5	
174	A区	磨製石鏃	未製品	側縁研磨	粘板岩	53.0	42.6	7.8	19.8	
175		磨製石鏃	未製品	剥離調整	粘板岩	(65.1)	37.5	10.0	24.22	
176	SK10	磨製石鏃?	未製品	両面研磨	蛇紋岩	(20.0)	(22.7)	(3.3)	2.48	擦切施溝痕
177	SB 5	磨製石鏃	未製品	剥離調整	輝緑凝灰岩	27.6	28.4	5.2	6.67	
178	A区	打製石斧			砂岩	75.5	72.3	15.9	117.76	
179	SB 1	打製石斧			粘板岩	(32.4)	(58.0)	9.5	21.77	
180	A区	打製石斧			粘板岩	(76.1)	46.7	14.4	68.35	
181	SB 6	扁平片刃石斧			蛇紋岩	54.8	40.9	9.0	31.75	
182	SB 1	扁平片刃石斧			蛇紋岩	(41.2)	(48.9)	(10.1)	34.69	
183		扁平片刃石斧			蛇紋岩	56.8	47.2	10.7	61.95	
184	SB 7	石錐			チャート	25.9	22.6	5.0	2.44	
185	SB 3	石錐			チャート	21.0	16.6	3.1	1.1	
186	A区	石錐			チャート	25.6	22.1	6.7	2.2	
187	SB 2	打製石包丁			粘板岩	(79.2)	(41.4)	(10.2)	36.82	
188	SB 1	スクレイパー			チャート	52.9	32.9	9.3	13.88	
189	SB 3	スクレイパー			チャート	(32.5)	(24.5)	(8.5)	7.68	石刃状剥片
190	SB 3	スクレイパー			硬砂岩	(102.9)	(107.9)	(22.3)	280.42	
191	SB 4	スクレイパー			輝緑凝灰岩	(56.3)	(82.1)	(10.7)	50.08	
192	SB 7	スクレイパー			硬砂岩	157.2	69.3	25.2	312	
193	SB 5	砥石			砂岩	53.3	39.1	4.8	15.56	
194	P94	砥石			砂岩	(35.0)	(43.3)	(10.2)	22.96	
195	SB 6		未製品	研磨	粘板岩	112.5	41.7	12.3	78.26	
196	SB 1	剝片			粘板岩	83.8	55.2	19.8	67.92	接合資料
197	SB 4	敲石			三紀砂岩	100.7	44.0	(29.5)	202.16	
198		礫石器		研磨・敲打	角閃石安山岩	70.8	60.5	43.2	246.04	
199		礫石器		研磨・敲打	硬砂岩	141.6	80.6	55.8	622	

付表4 石器一覧表

	黒曜石	チャート	鉄石英	石英	滑石	蛇紋岩	輝緑凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三砂岩	紀岩	白雲母花崗岩	角閃石安山岩	ホルンフェルス	計
打製石鏃	1	5													6
磨製石鏃		6			1	2	4	30	5						48
打製石斧								2	1	1					4
扁平片刃石斧							2								2
石錐		3								1					4
打製石包丁									1						1
スクレイパー	6	30	1				1	3	3						44
楔形石器	2	1						1							4
磨石										1			1(敲)		2
敲石										1	1				2
礫石器(凹・磨)											1				1
礫石器(研磨)		1													1
砥石											2				2
台石										1					1
剝片	14	175	9				8	19	38						263
2次加工のある剝片	4	16					2	7	5					3	37
使用痕のある剝片	2	7						1							10
碎片	20	93	1					12	6					1	133
石核	3	5													8
原石	1	1						1							3
自然礫		1		1					1		1				4
計	53	344	11	1	1	4	15	78	61	6	1	1	4		580

付表5 壇穴建物出土石器一覧表

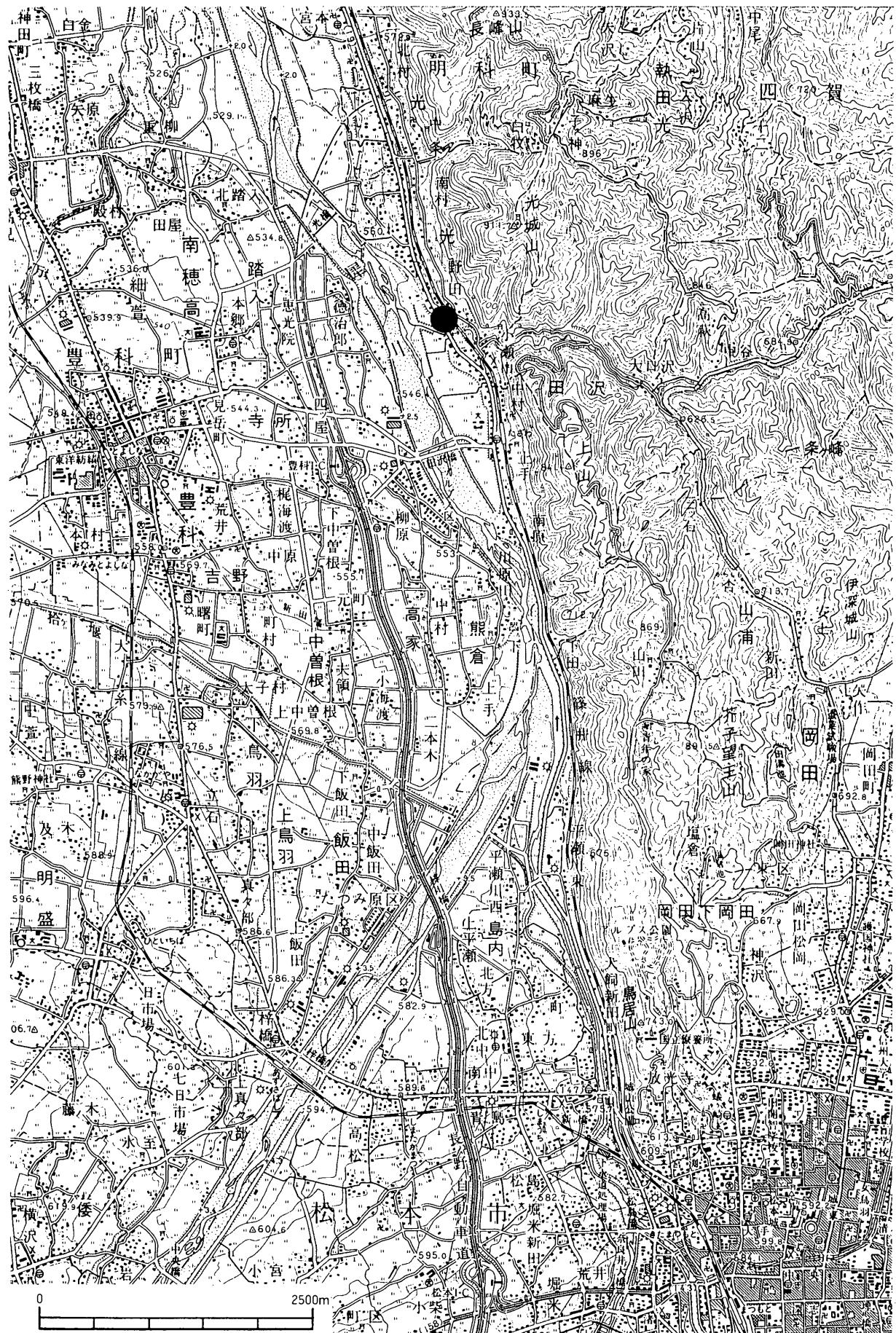
SB 1	黒曜石	チャート	鉄石英	石英	滑石	蛇紋岩	輝緑凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三砂岩	紀岩	白雲母花崗岩	角閃石安山岩	ホルンフェルス	計
磨製石鏃									5						5
打製石斧								1							1
扁平片刃石斧						1									1
スクレイパー	2	10	1						1						14
剝片	6	21	1					1	2	3					34
2次加工のある剝片	2						1		1						4
使用痕のある剝片	2														2
碎片		3												1	4
石核	1														1
原石	1	1		1											3
計	14	35	2	1	0	1	2	9	4	0	0	0	0	1	69
SB 2	黒曜石	チャート	鉄石英	石英	滑石	蛇紋岩	輝緑凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三砂岩	紀岩	白雲母花崗岩	角閃石安山岩	ホルンフェルス	計
打製石包丁									1						1
剝片		1													1
計	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
SB 3	黒曜石	チャート	鉄石英	石英	滑石	蛇紋岩	輝緑凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三砂岩	紀岩	白雲母花崗岩	角閃石安山岩	ホルンフェルス	計
磨製石鏃		1						1	2	2					6
石錐		1													1
スクレイパー	1	6								1					8
磨石										1					1
剝片	1	22	1						2	4					30
2次加工のある剝片		2							1						3
使用痕のある剝片		2													2
碎片	1	14							1						16
計	3	48	1	0	0	0	1	6	8	0	0	0	0	0	67

SB 4	黒曜石	チャート	鉄石英	石 英	滑 石	蛇紋岩	輝 緑 凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三 紀 砂 岩	白雲母 花崗岩	角閃石 安山岩	ホルン フェルス	計
磨 製 石 鋸							1	3						4
ス ク レ イ パ ー		3					1	1						5
敲 石										1				1
剝 片	1	4					3	1						9
2 次加工のある剝片	1													1
碎 片	1	1						1						3
石 核		2												2
計	3	10	0	0	0	0	5	6	0	1	0	0	0	25
SB 5	黒曜石	チャート	鉄石英	石 英	滑 石	蛇紋岩	輝 緑 凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三 紀 砂 岩	白雲母 花崗岩	角閃石 安山岩	ホルン フェルス	計
磨 製 石 鋸		1			1		1	1						4
ス ク レ イ パ ー		1												1
楔 形 石 器								1						1
砥 石										1				1
剝 片	1	13	1				1	1						17
2 次加工のある剝片		1						1	1				3	
碎 片	2	3						1						6
計	3	19	1	0	1	0	2	5	1	1	0	0	0	33
SB 6	黒曜石	チャート	鉄石英	石 英	滑 石	蛇紋岩	輝 緑 凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三 紀 砂 岩	白雲母 花崗岩	角閃石 安山岩	ホルン フェルス	計
打 製 石 鋸		1												1
磨 製 石 鋸								2						2
扁 平 片 刃 石 斧						1								1
ス ク レ イ パ ー							1							1
楔 形 石 器		1												1
台 石											1			1
剝 片		6	1					1	3					11
2 次加工のある剝片		1						2						3
碎 片		3												3
石 核		1												1
計	0	13	1	0	0	1	0	6	3	0	1	0	0	25
SB 7	黒曜石	チャート	鉄石英	石 英	滑 石	蛇紋岩	輝 緑 凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三 紀 砂 岩	白雲母 花崗岩	角閃石 安山岩	ホルン フェルス	計
磨 製 石 鋸								1						1
石 錐		1							1					2
ス ク レ イ パ ー														0
剝 片		5							2					7
2 次加工のある剝片								1	1					2
碎 片	1							1	1					3
計	1	6	0	0	0	0	0	3	5	0	0	0	0	15
SB 8	黒曜石	チャート	鉄石英	石 英	滑 石	蛇紋岩	輝 緑 凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三 紀 砂 岩	白雲母 花崗岩	角閃石 安山岩	ホルン フェルス	計
磨 製 石 鋸								1						1
剝 片		6							6					12
碎 片		1												1
計	0	7	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	14
SB 9	黒曜石	チャート	鉄石英	石 英	滑 石	蛇紋岩	輝 緑 凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三 紀 砂 岩	白雲母 花崗岩	角閃石 安山岩	ホルン フェルス	計
磨 製 石 鋸								1						1
ス ク レ イ パ ー	1	2												3
敲 石									1					1
礫 石 器		1												1
剝 片	2	8					1	1	4			1		17
2 次加工のある剝片							1		1					1
使用痕のある剝片								1						1
碎 片	3	2												5
計	6	13	0	0	0	0	2	3	6	0	0	1	1	32
SB10	黒曜石	チャート	鉄石英	石 英	滑 石	蛇紋岩	輝 緑 凝灰岩	粘板岩	硬砂岩	三 紀 砂 岩	白雲母 花崗岩	角閃石 安山岩	ホルン フェルス	計
磨 製 石 鋸								1						1
剝 片		2	1				1	1						5
碎 片	1	3	1											5
計	1	5	2	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	11

図 版

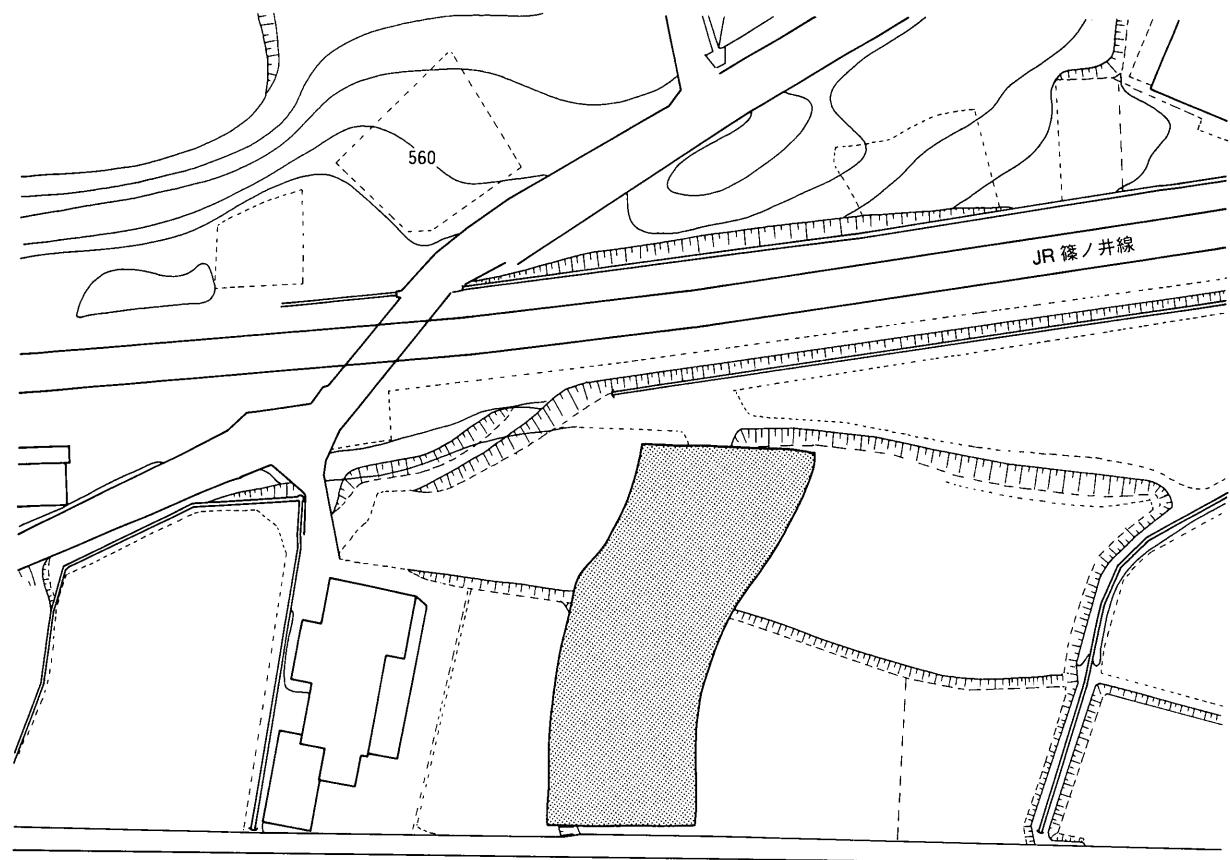
- | | | |
|---|-------------|---|
| 1 | 遺 | 跡 |
| 2 | 遺 | 物 |
| 3 | 自 然 化 学 分 析 | |
| 4 | 調 査 ス ナ ッ プ | |

図版1 遺 跡

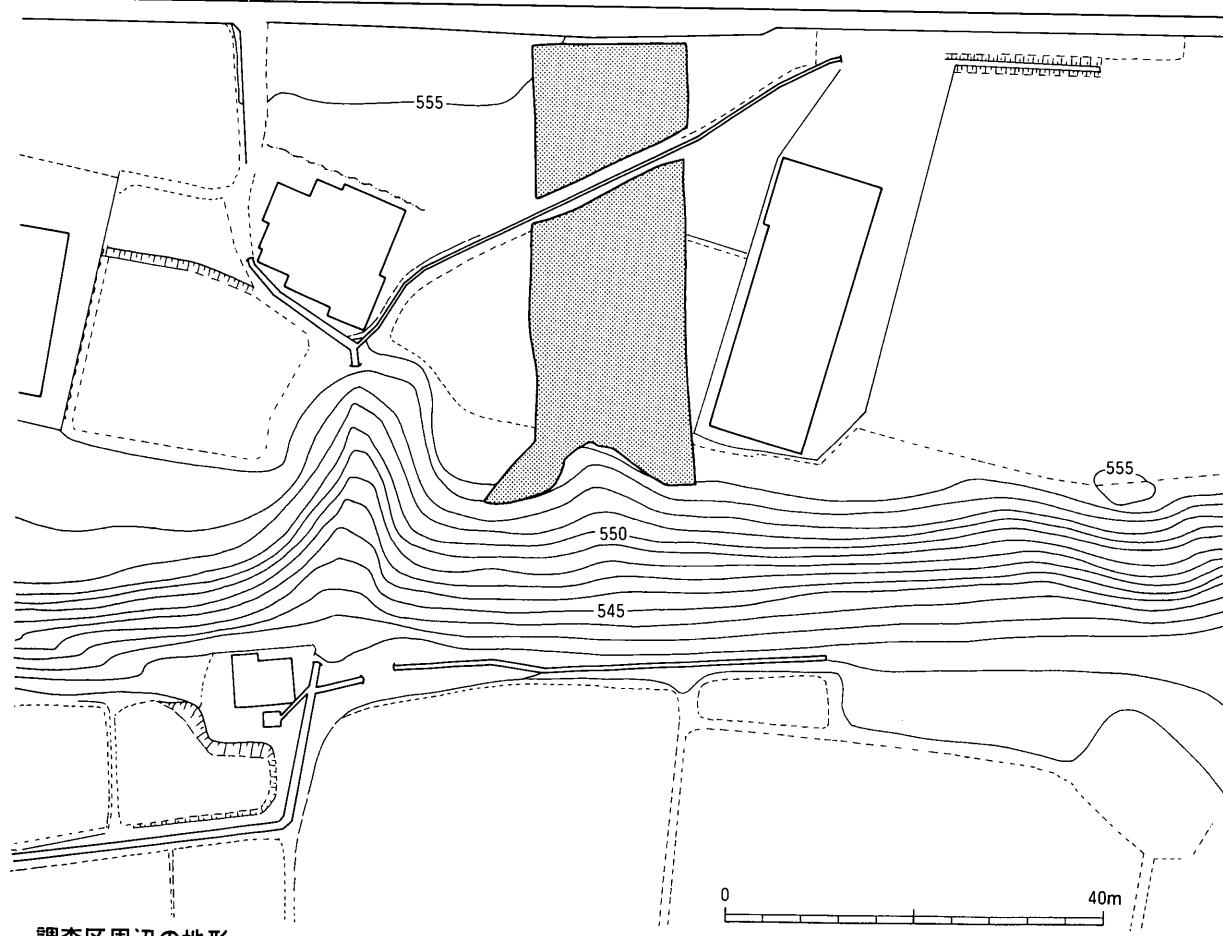


遺跡の位置

図版2 遺跡

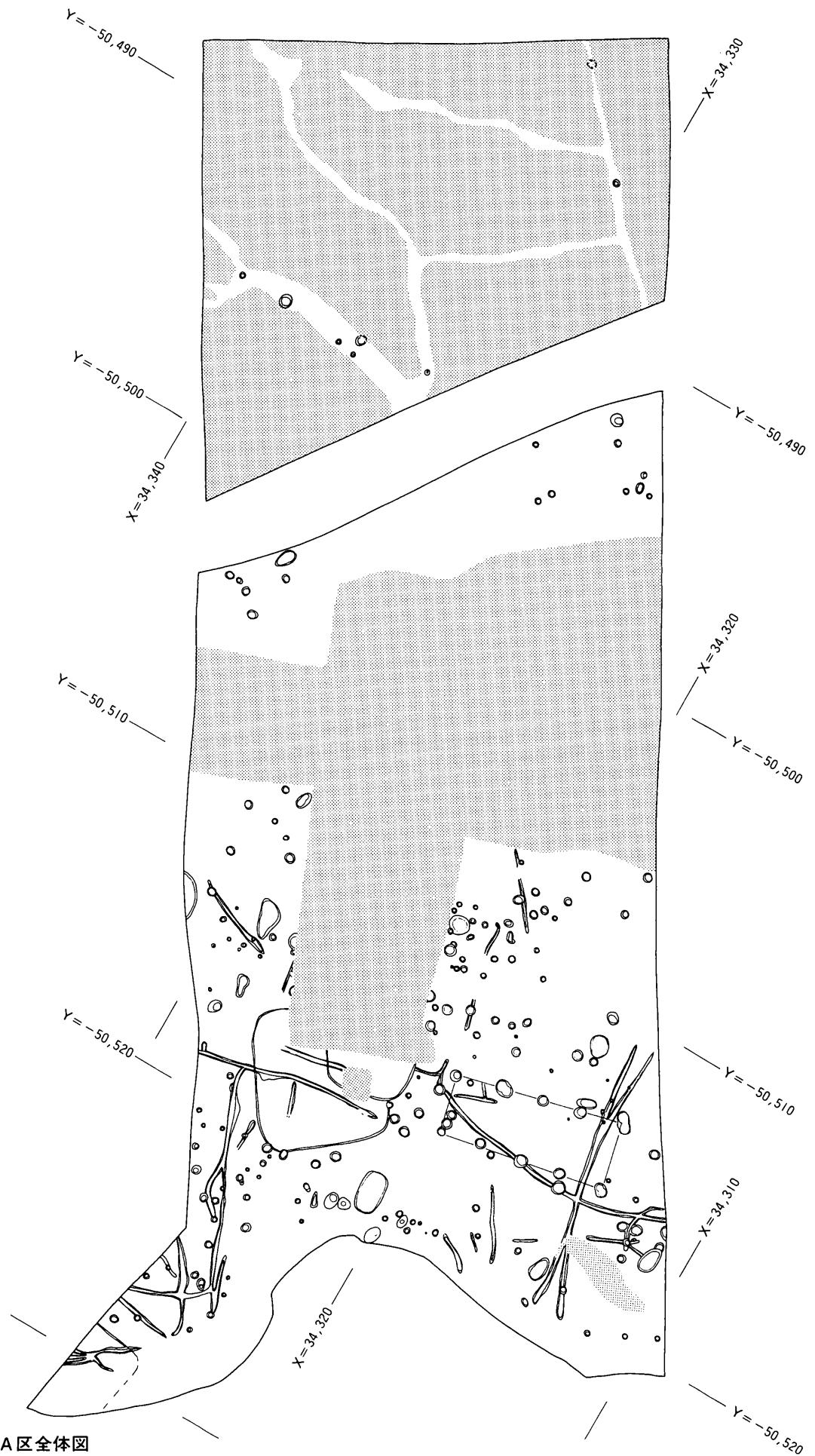


国道19号



調査区周辺の地形

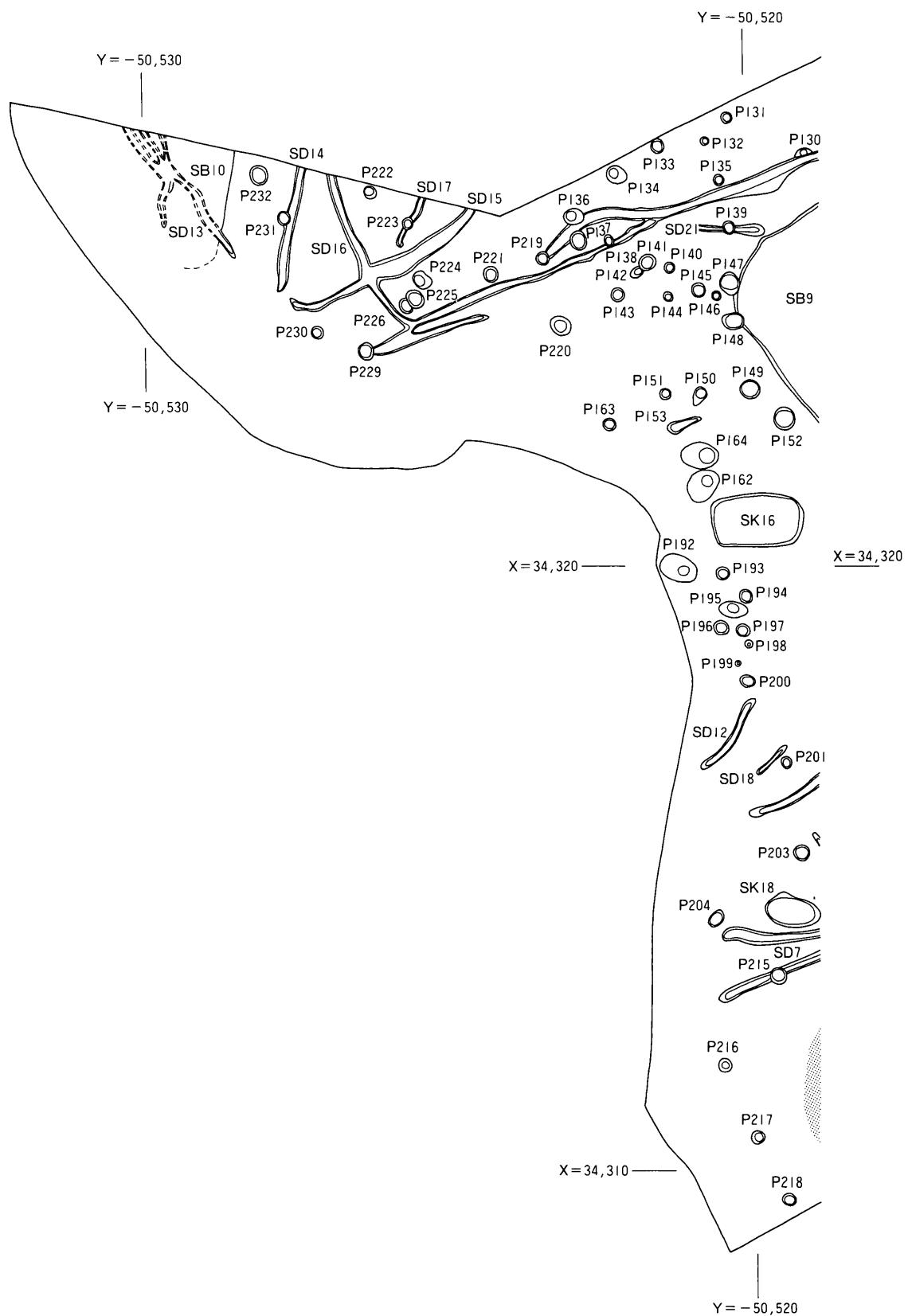
図版3 遺跡



図版4 遺 跡

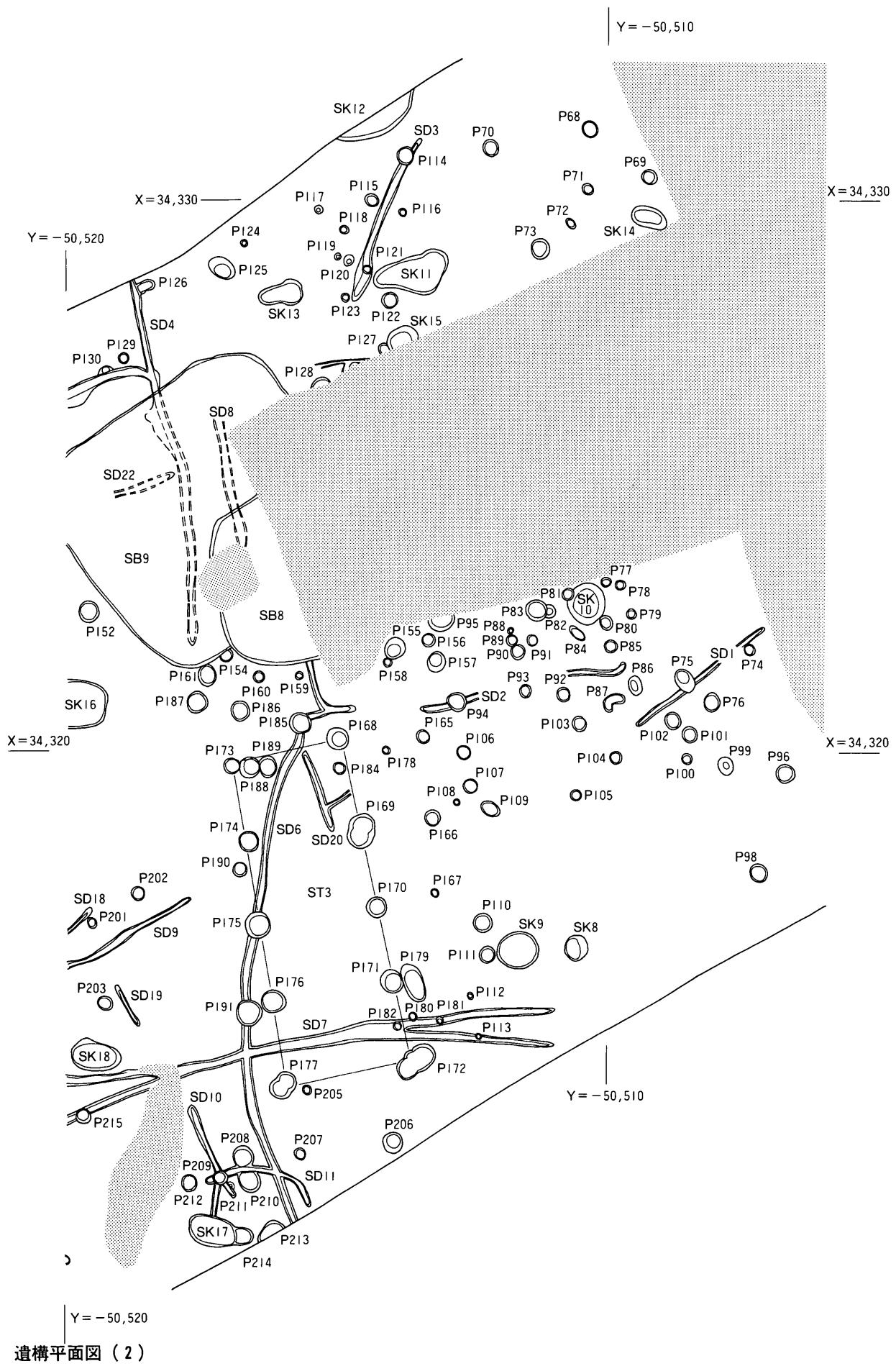


B区全体図

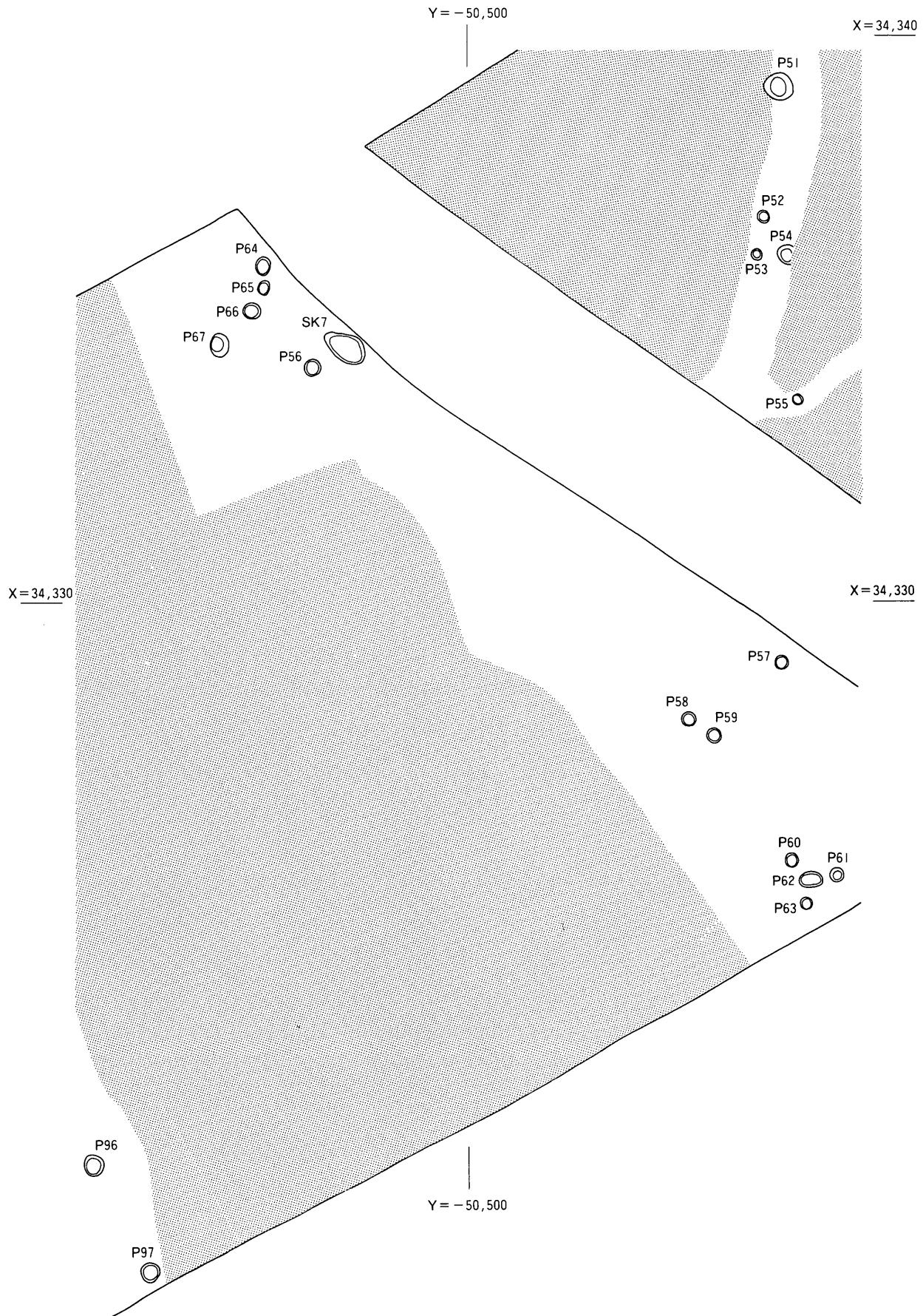


遺構平面図（1）

図版 6 遺 跡



遺構平面図（2）

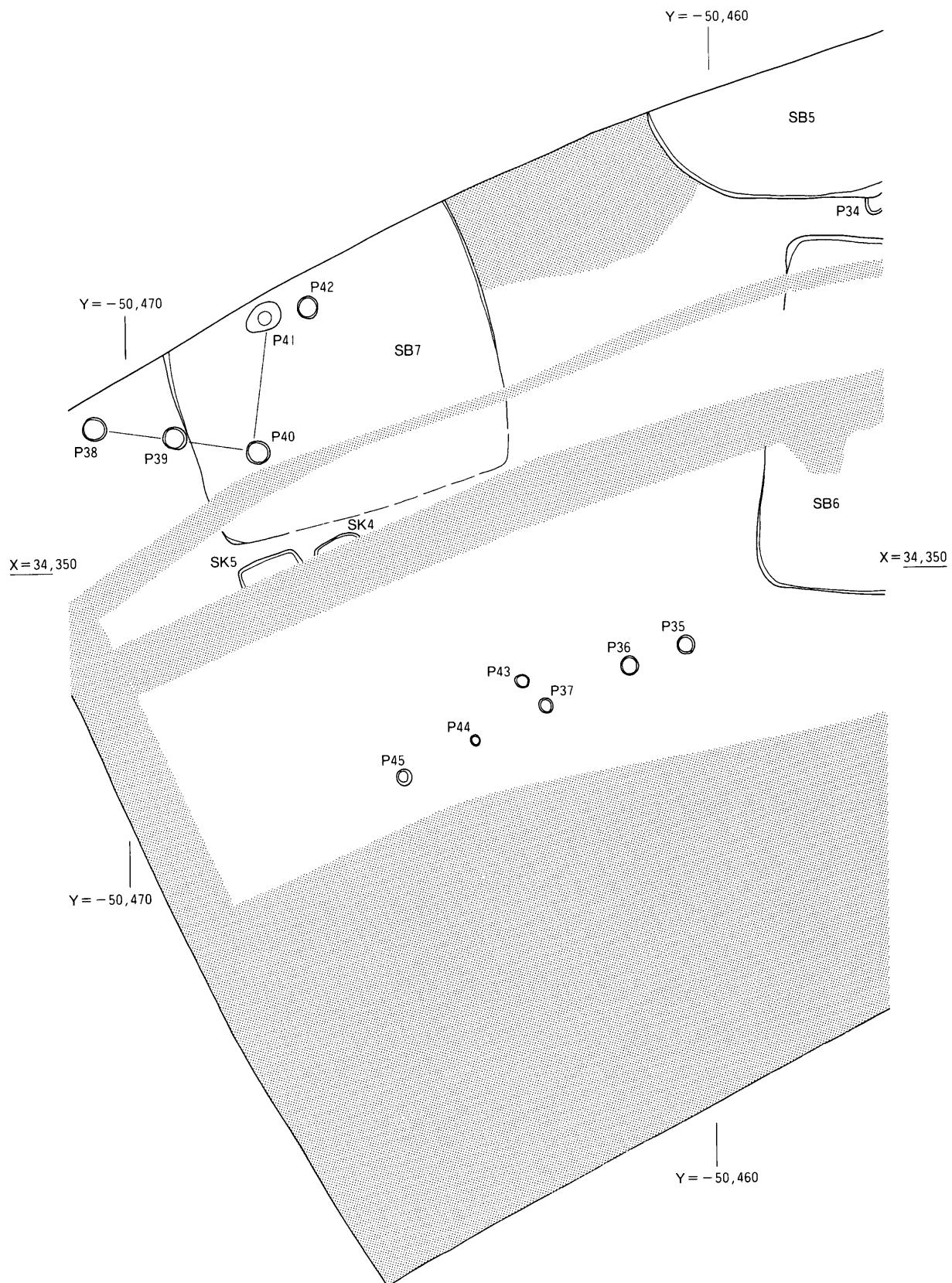


遺構平面図 (3)

図版 8 遺 踪

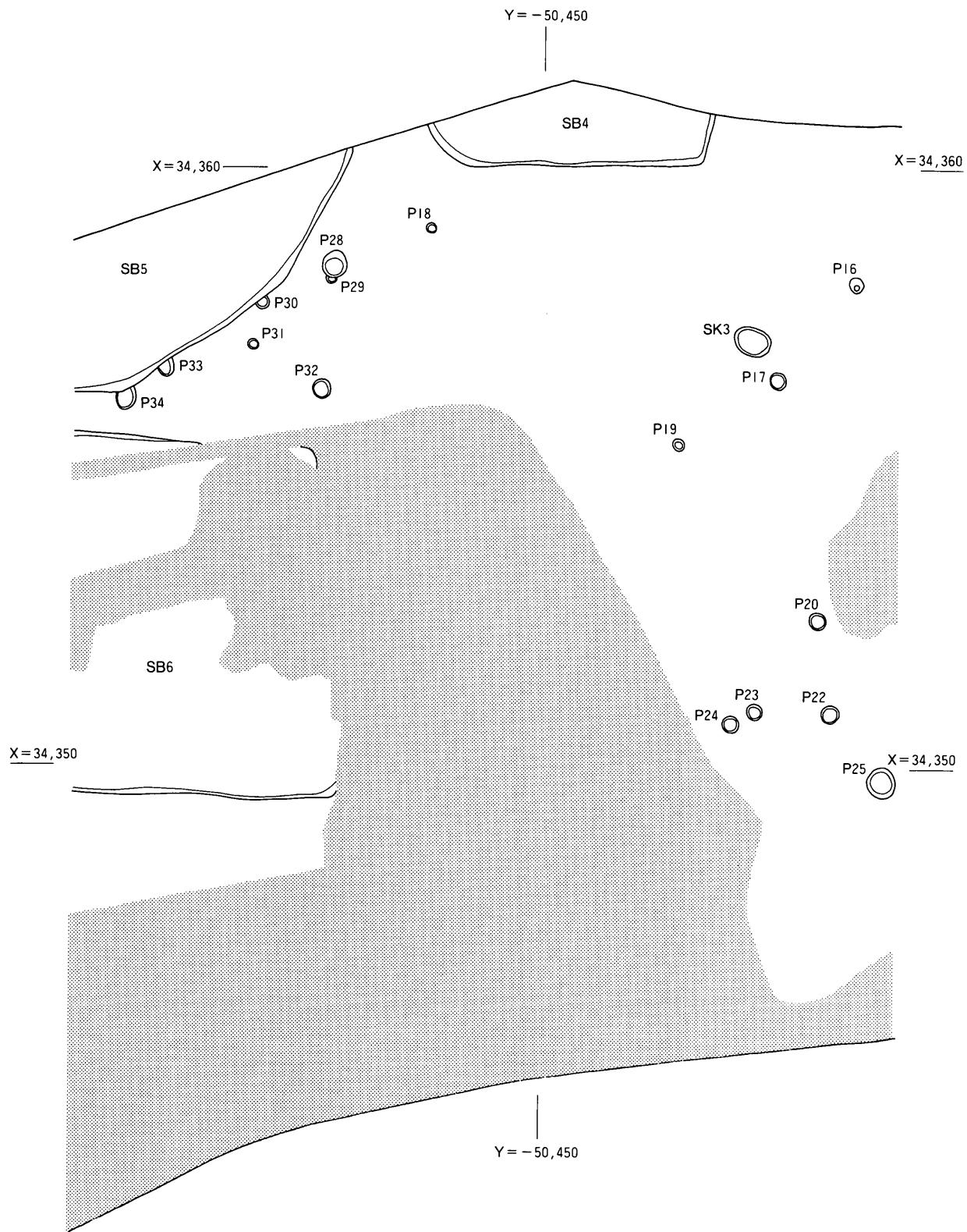


遺構平面図（4）

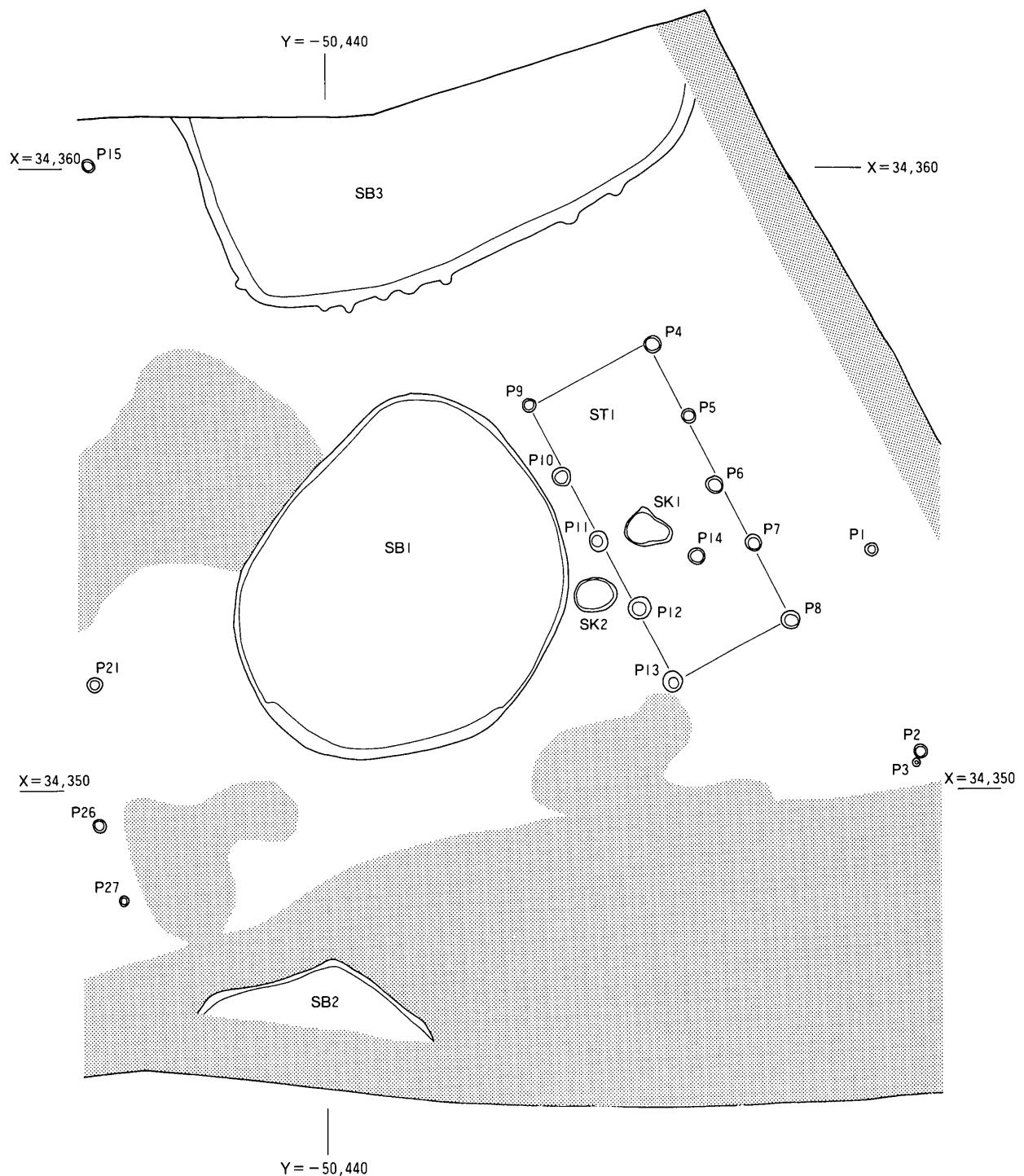


遺構平面図（5）

図版10 遺 跡



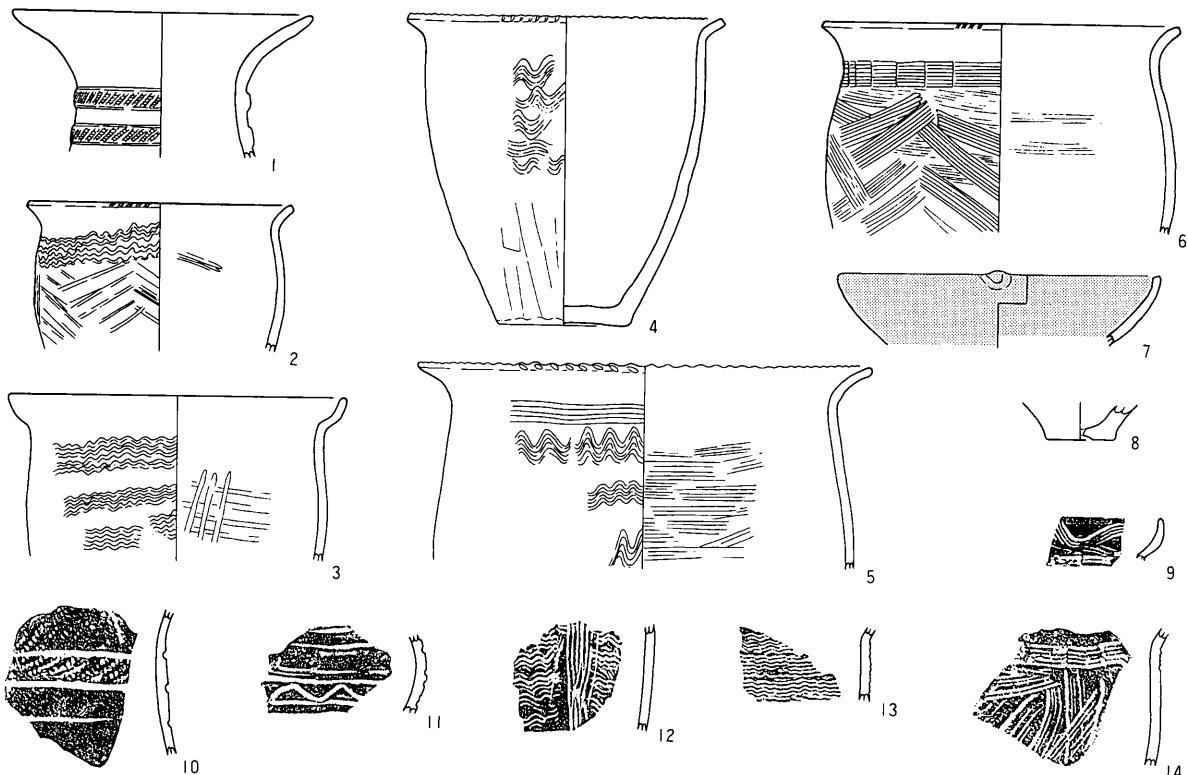
遺構平面図（6）



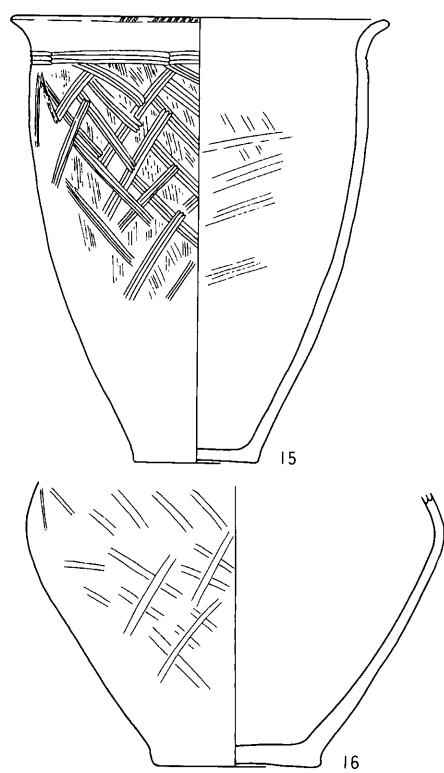
遺構平面図（7）

図版12 遺 物

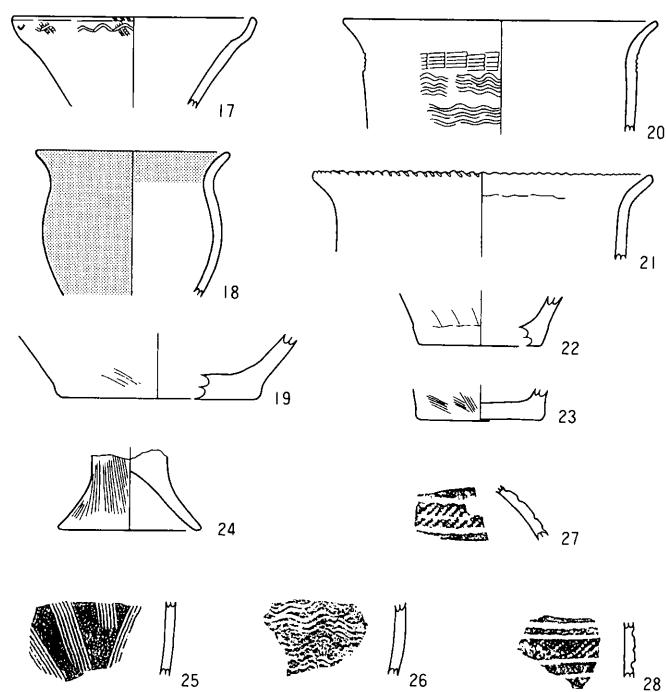
SB1



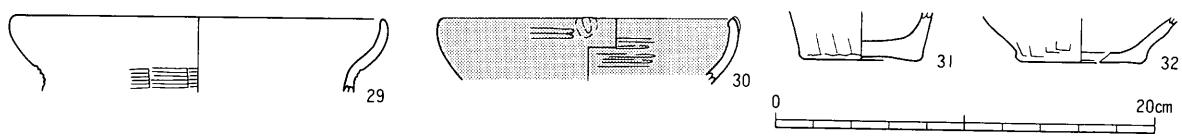
SB2



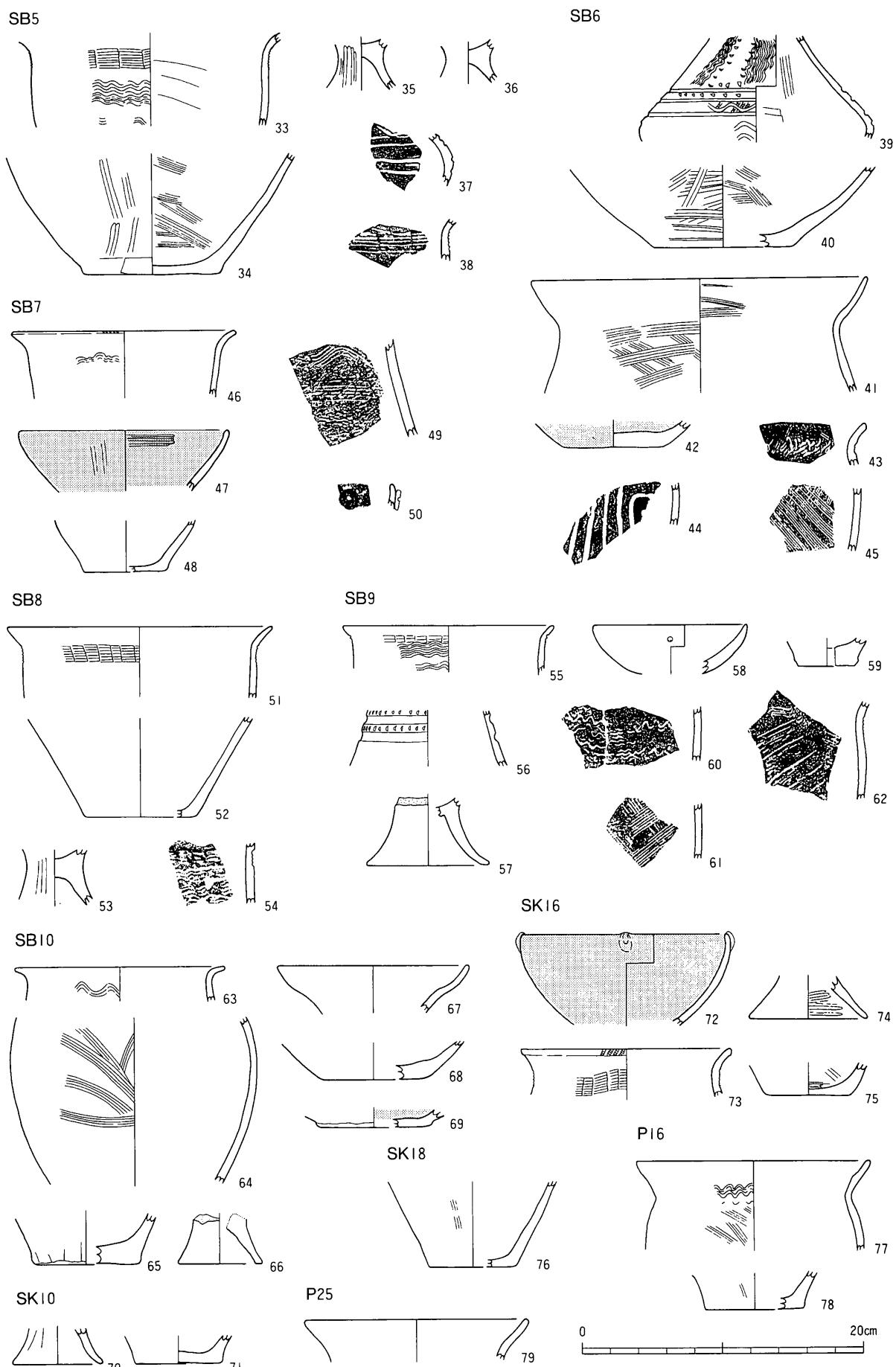
SB3



SB4

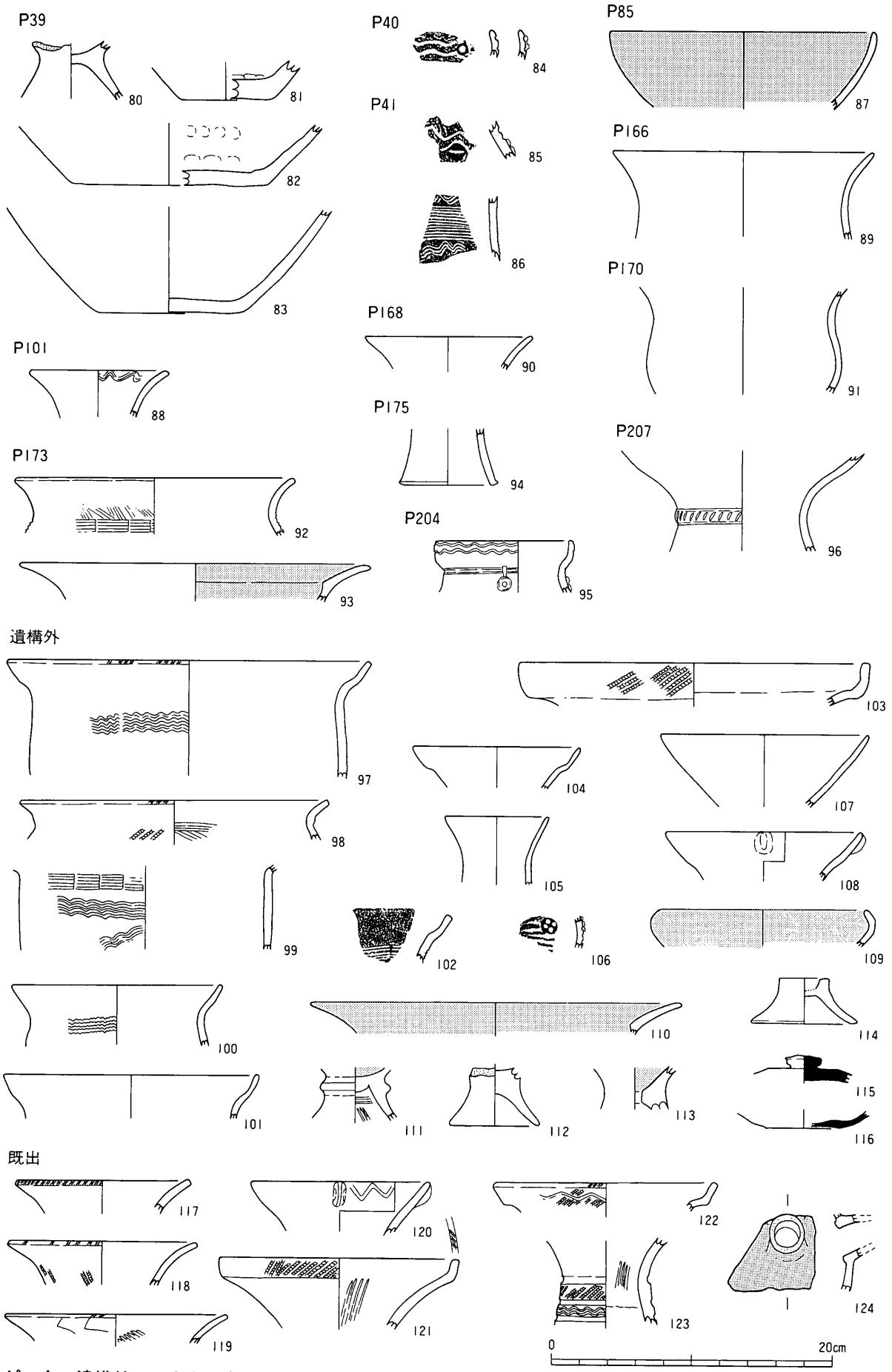


SB1～SB4出土土器実測図



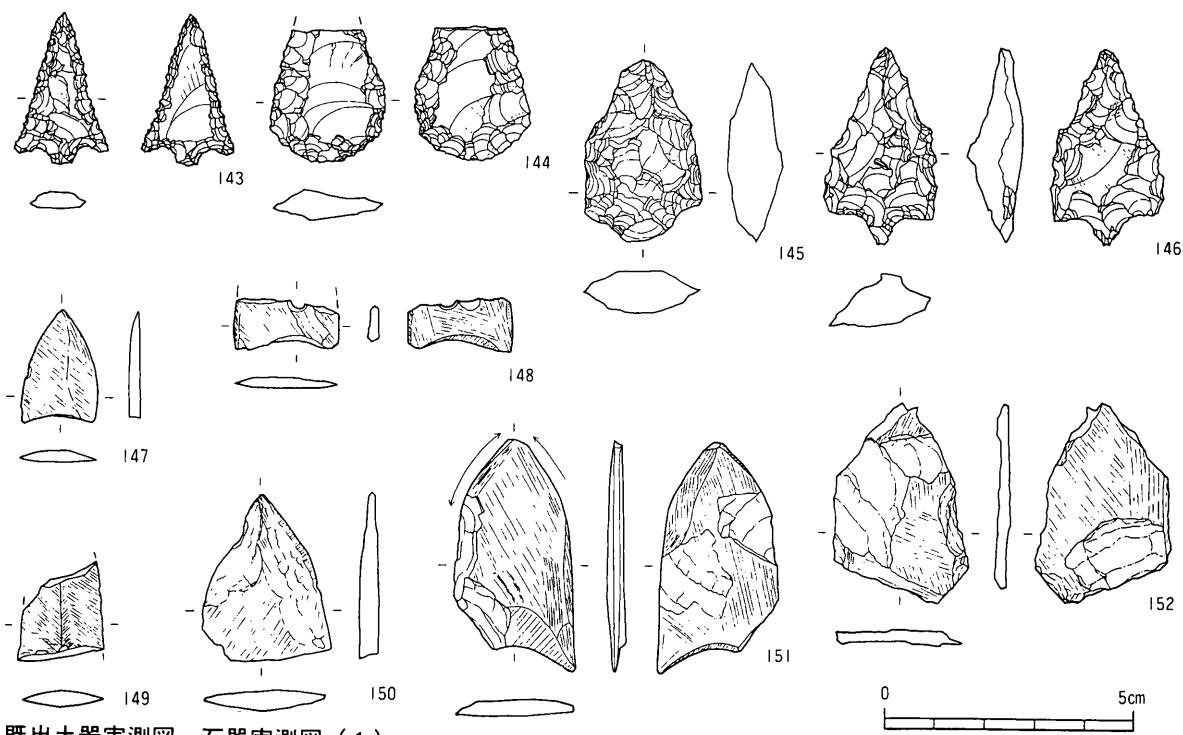
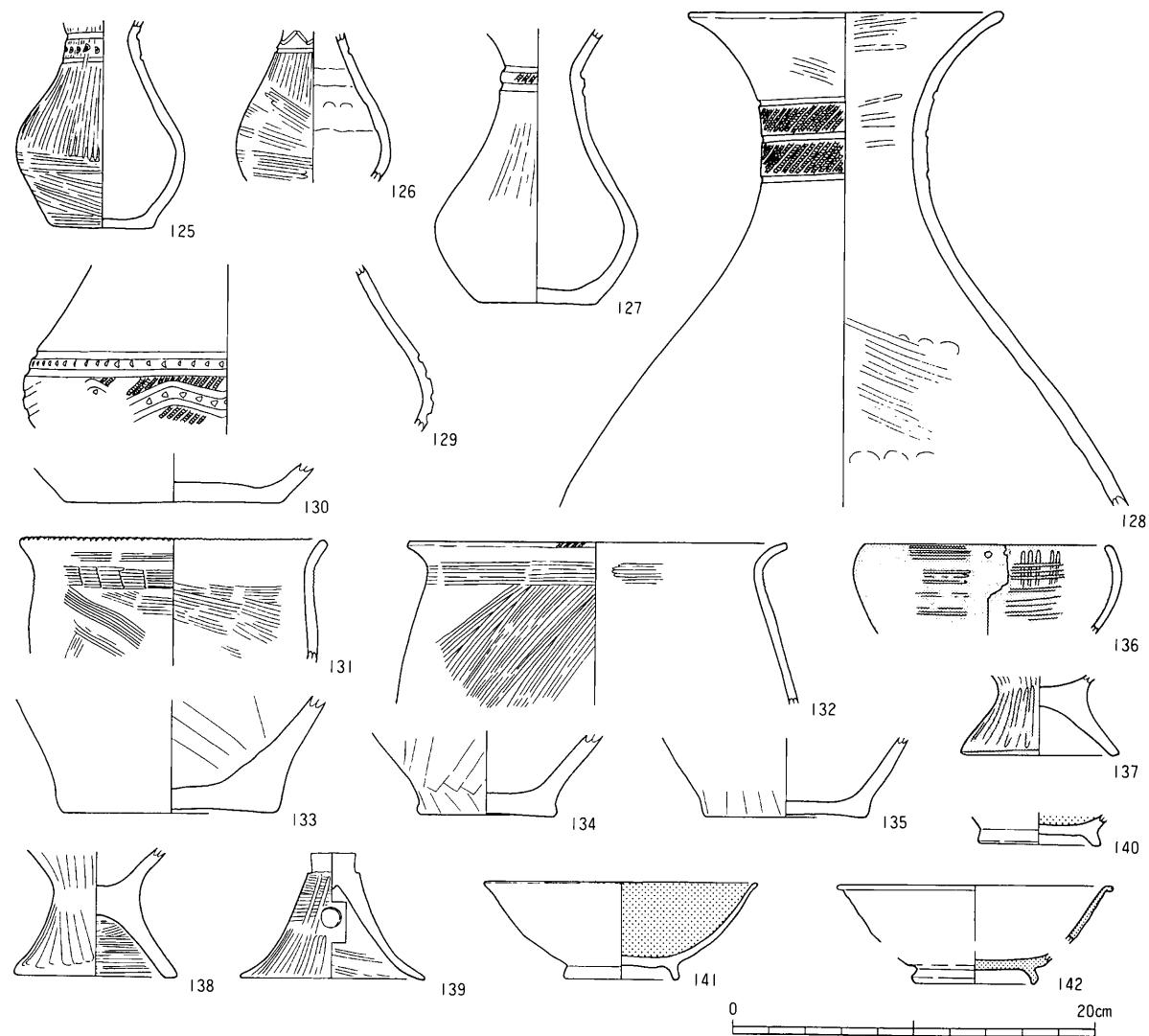
SB5～SB10・土坑・ピット出土土器実測図

図版14 遺 物



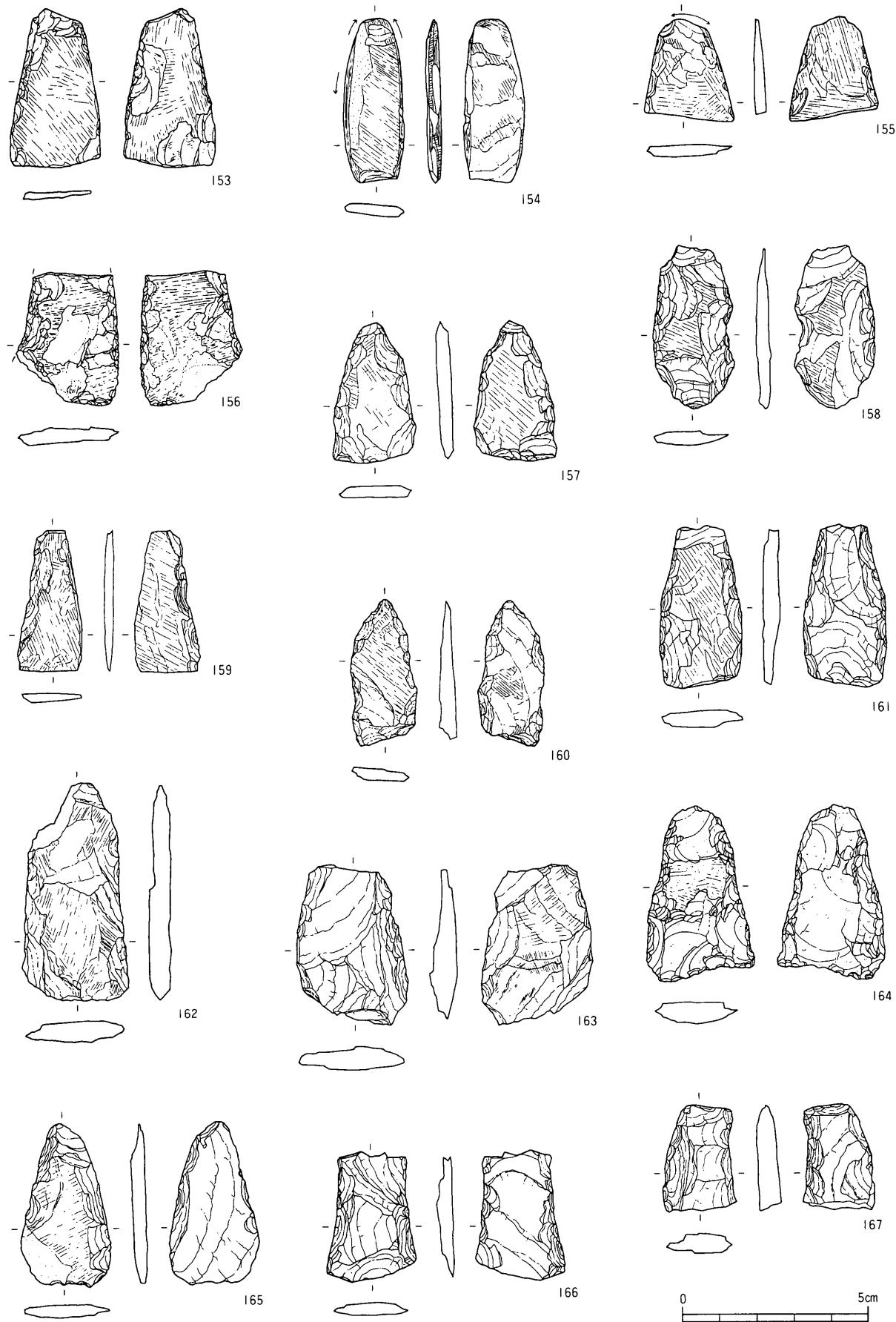
ピット・遺構外・既出土器実測図

図版15 遺物



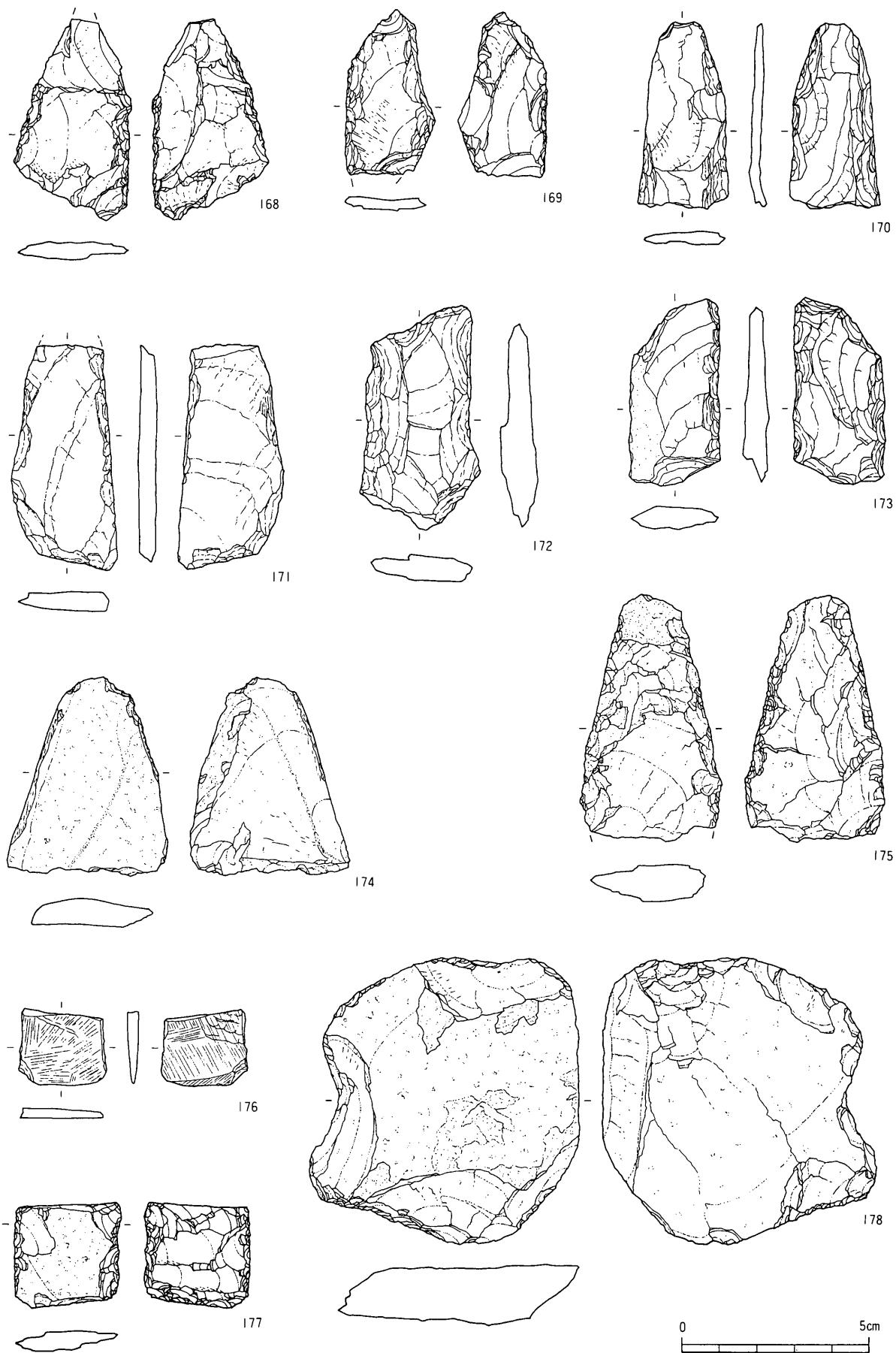
既出土器実測図、石器実測図（1）

図版16 遺物



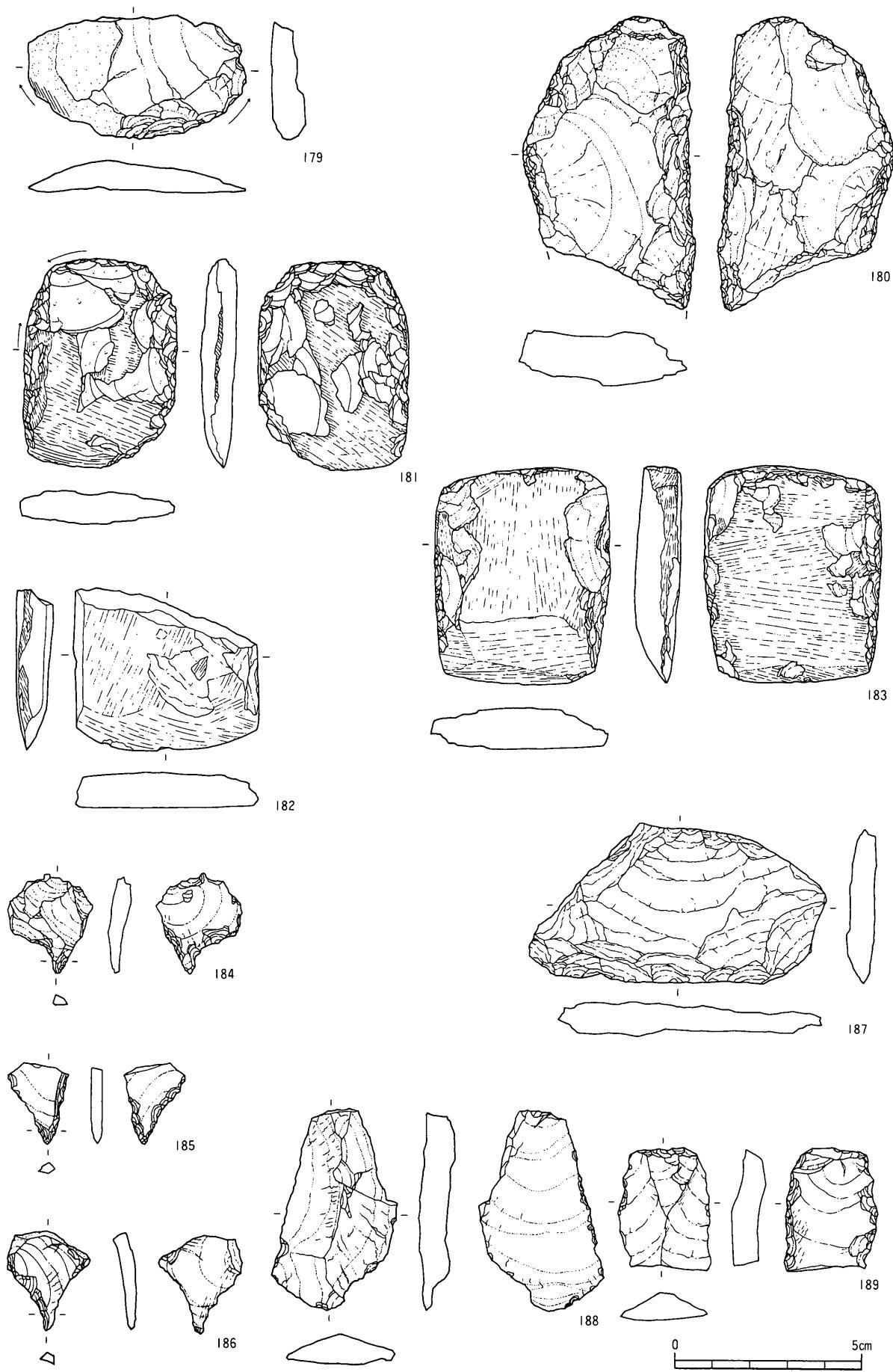
石器実測図（2）

図版17 遺物

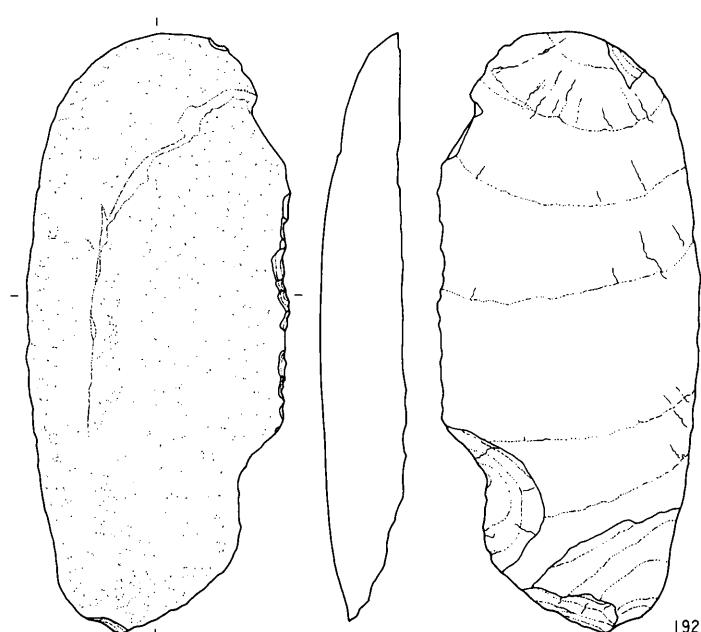
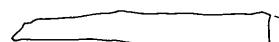
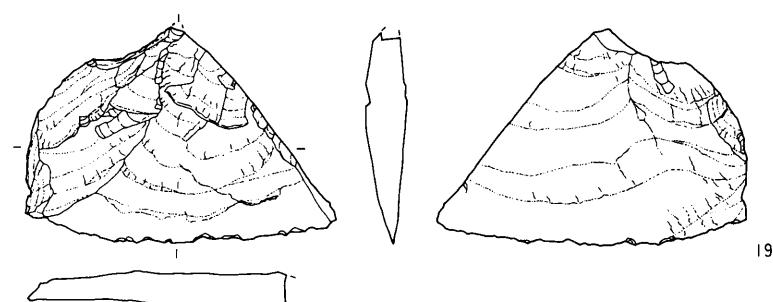
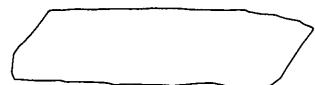
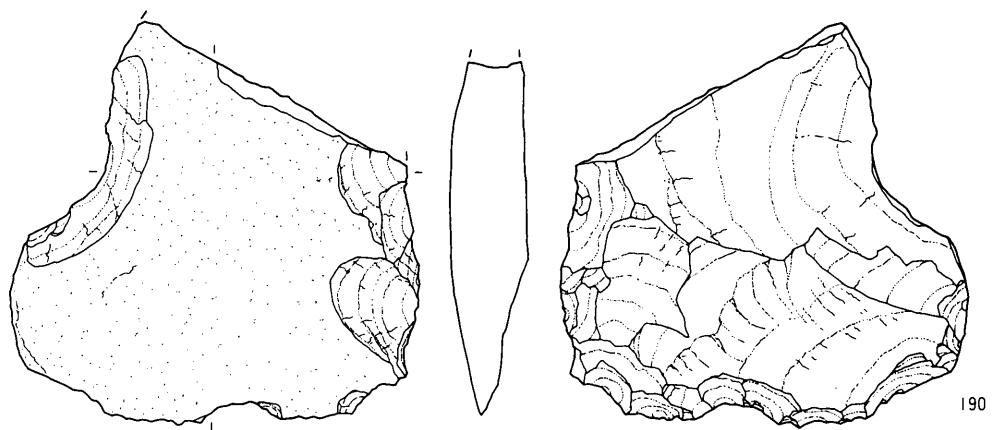


石器実測図（3）

図版18 遺 物

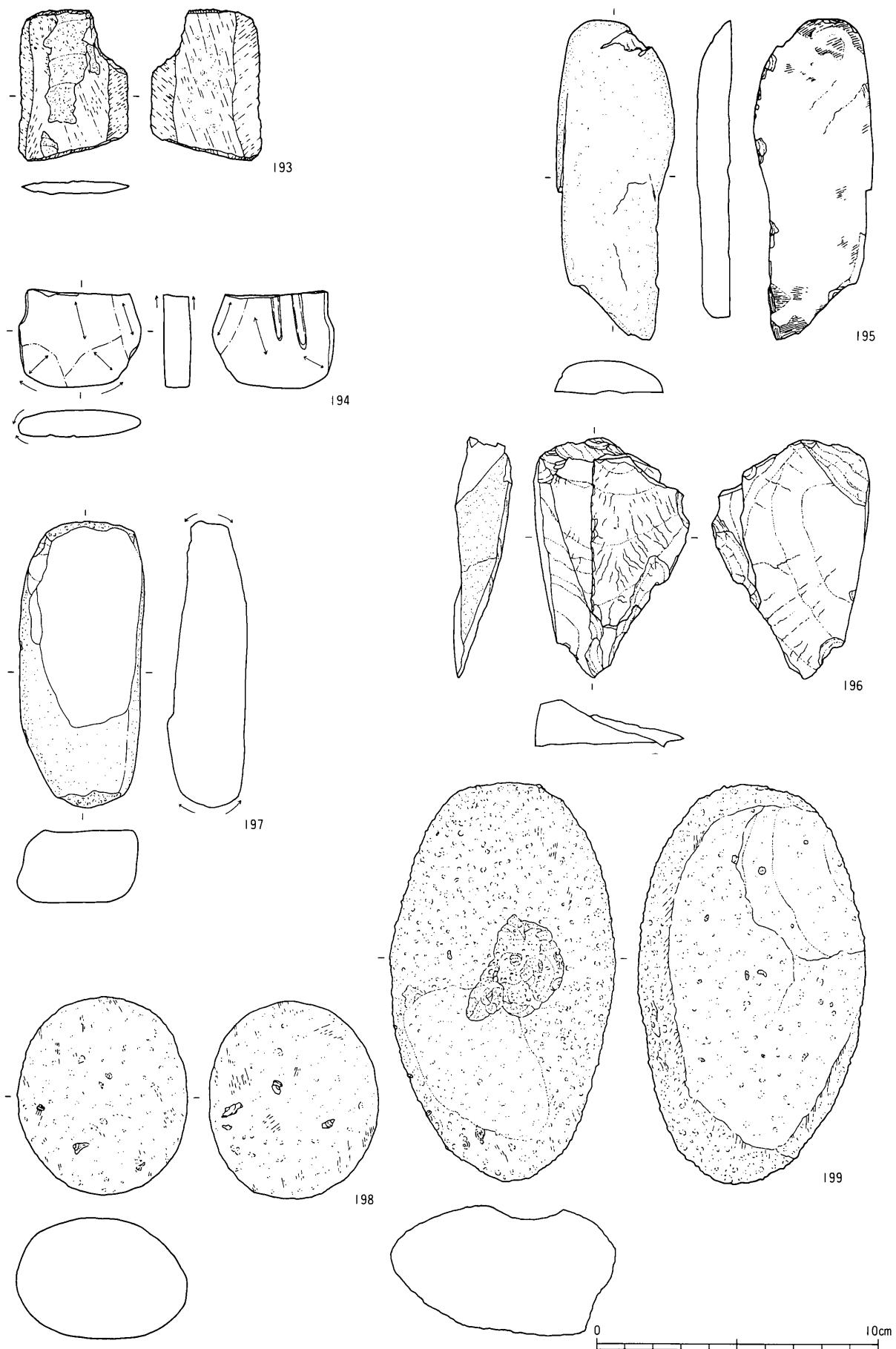


石器実測図 (4)



石器実測図（5）

図版20 遺 物



石器実測図 (6)



1 遺跡遠景（南上空から）

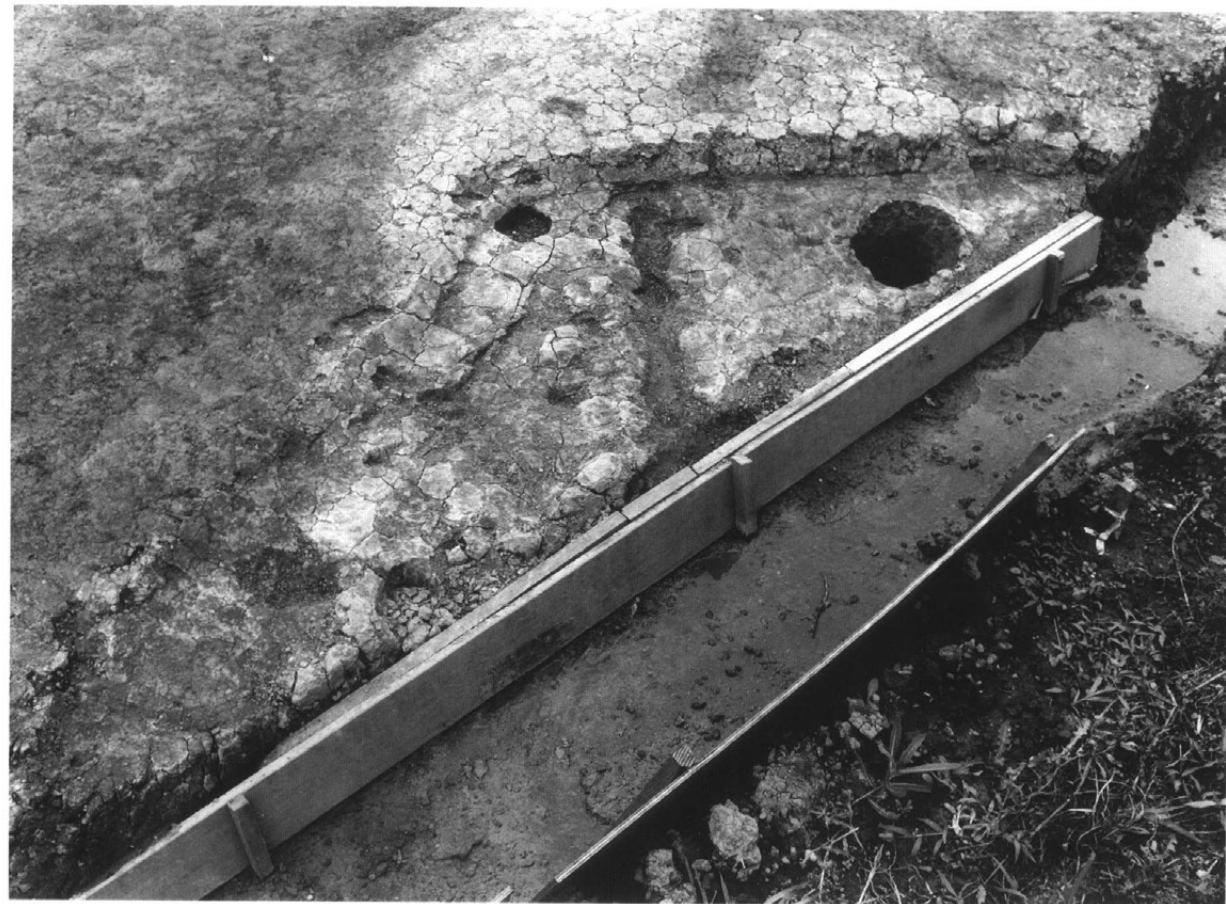


2 B区全景（上空から）

図版22 遺 跡



1 SB1



2 SB2

図版23 遺 跡



1 SB 3



2 SB 4



3 SB 5

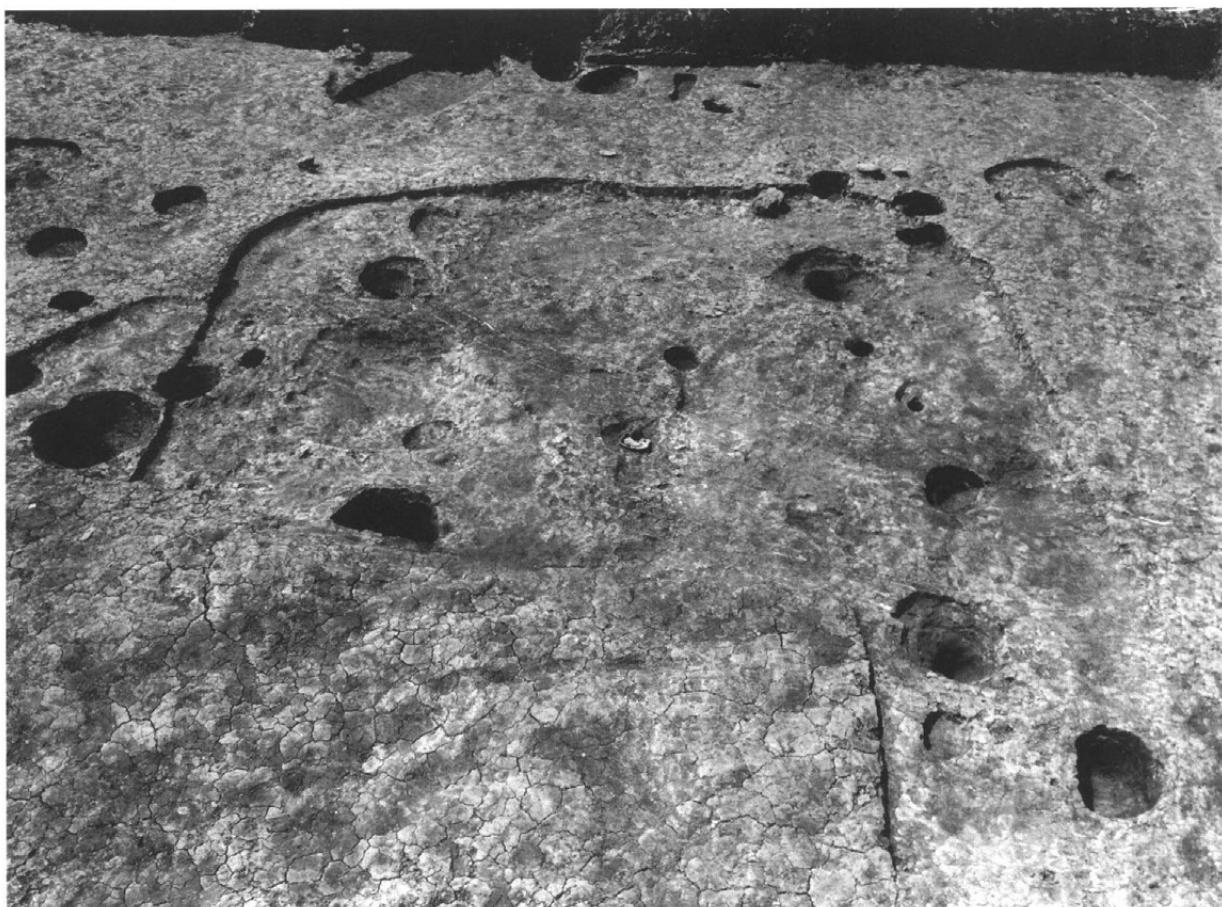
図版24 遺 跡



1 SB 6



2 SB 7



1 SB8・9



2 SB10



3 SB9炉



4 SB10炉

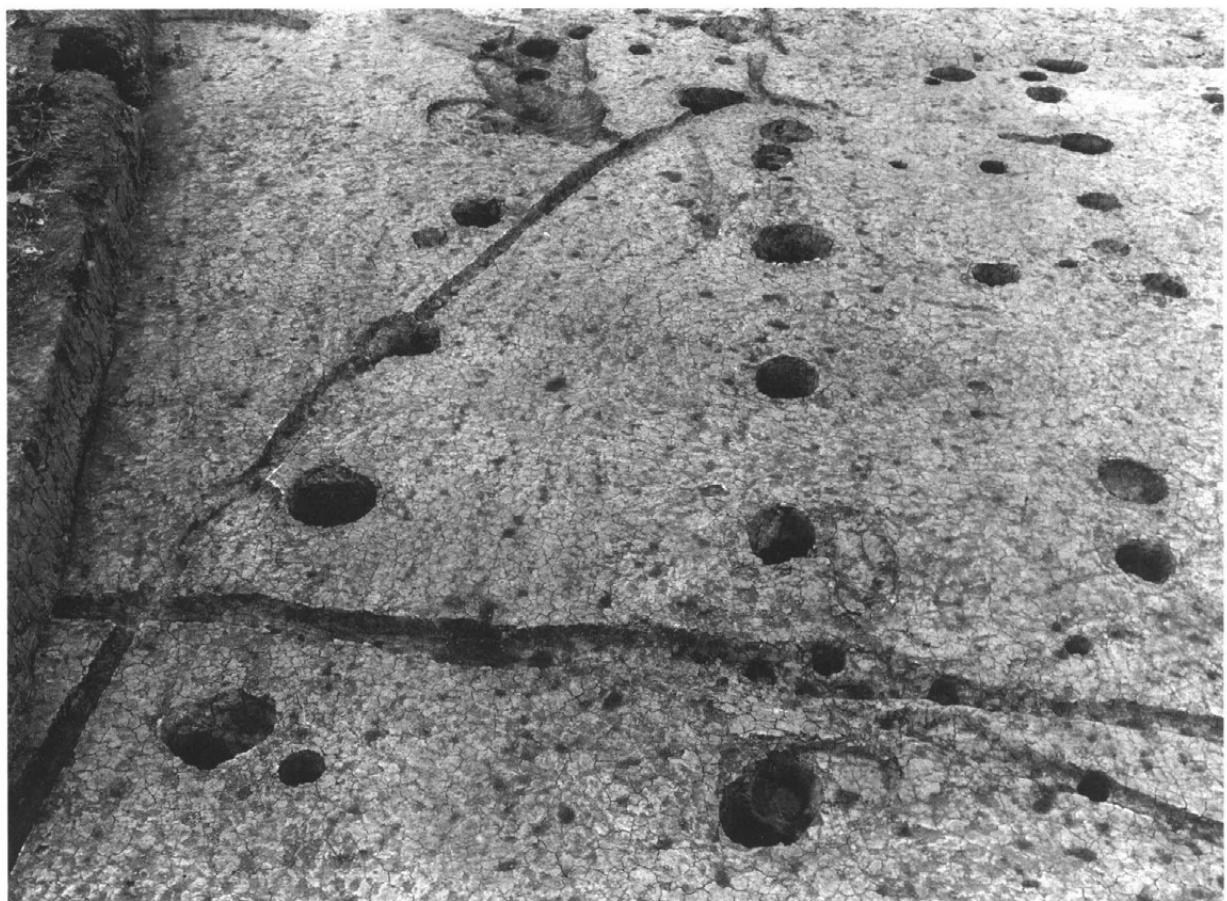
図版26 遺 跡



1 ST 1



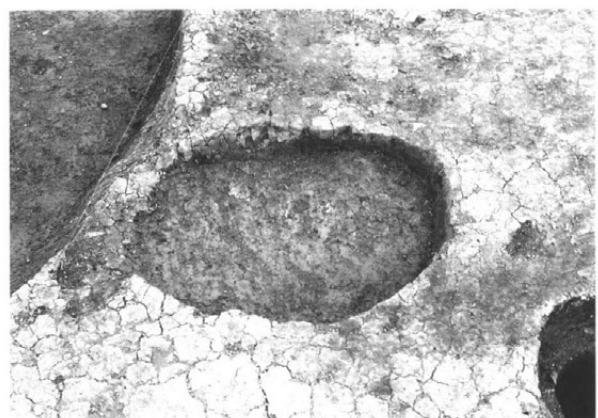
2 ST 2



1 S T 3



2 SK 1



3 SK 2



4 SK 3



5 SK 4 (右)・SK 5 (左)

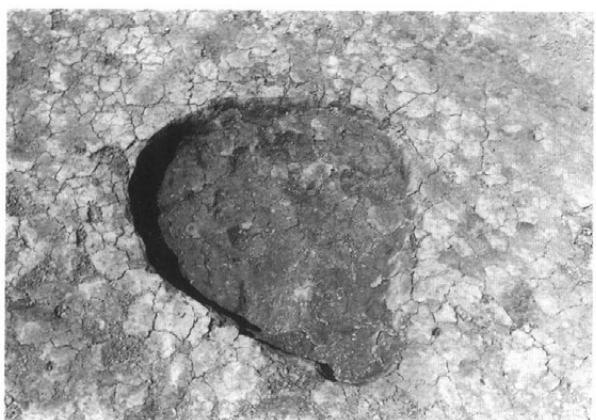
図版28 遺 跡



1 SK 6



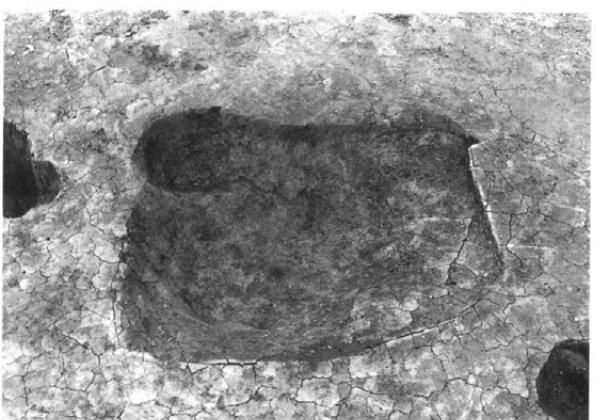
2 SK 7



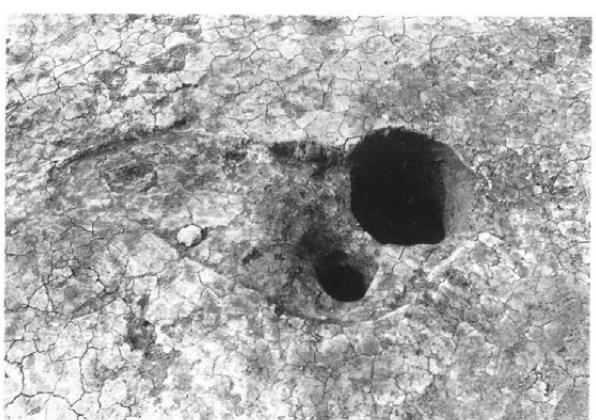
3 SK 8



4 SK 9



5 SK 10



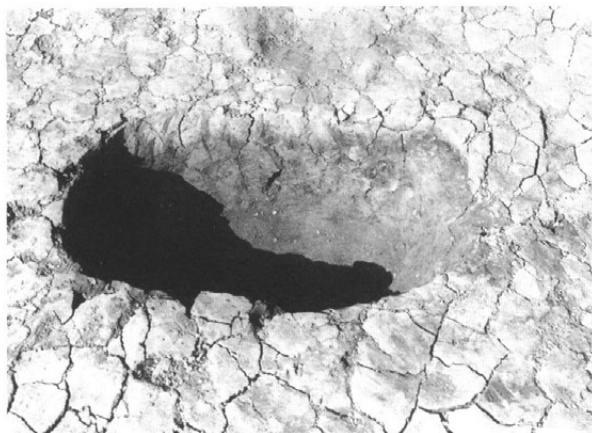
6 SK 11



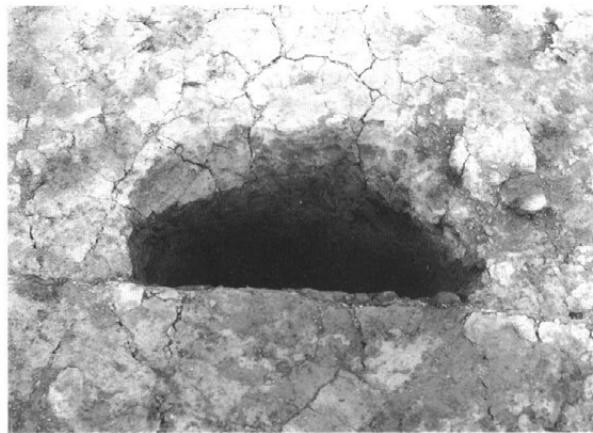
7 SK 12



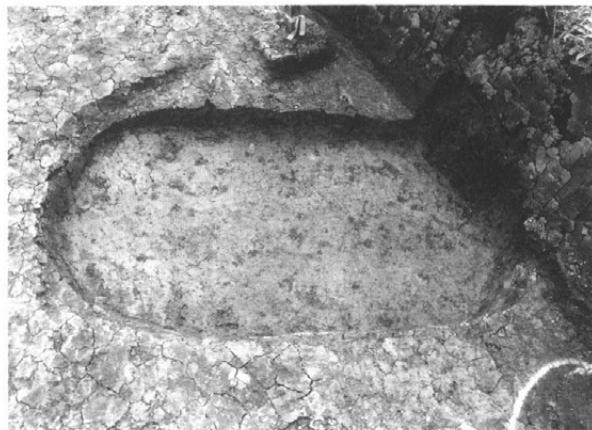
8 SK 13



1 SK14



2 SK15



3 SK16



4 P16遺物出土状況

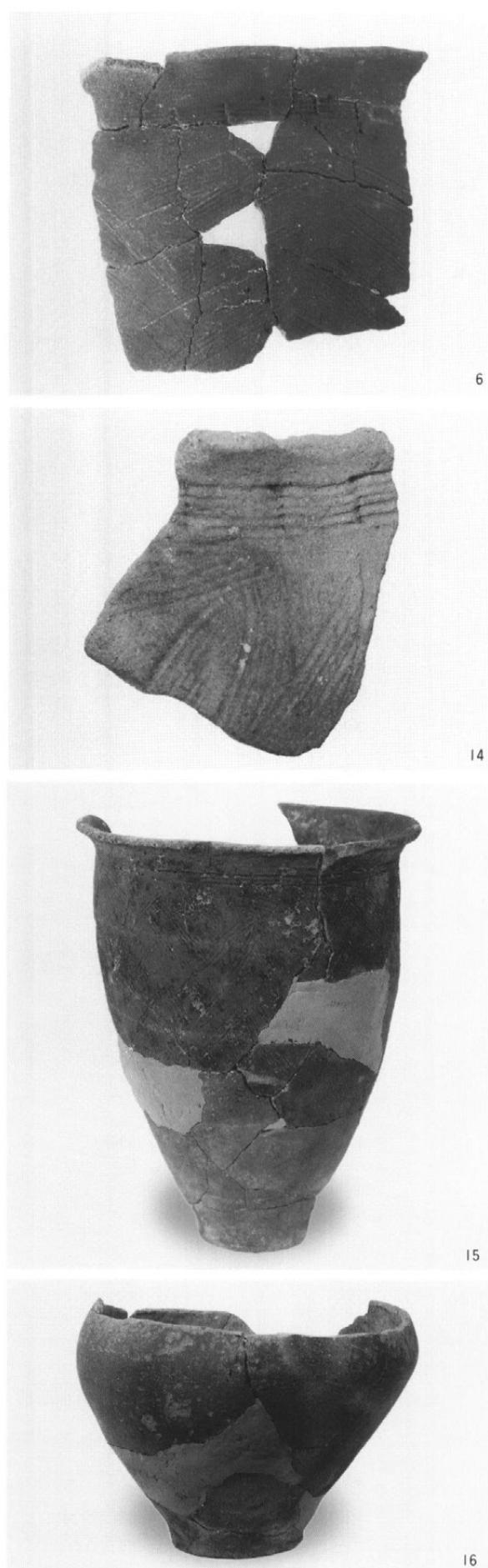
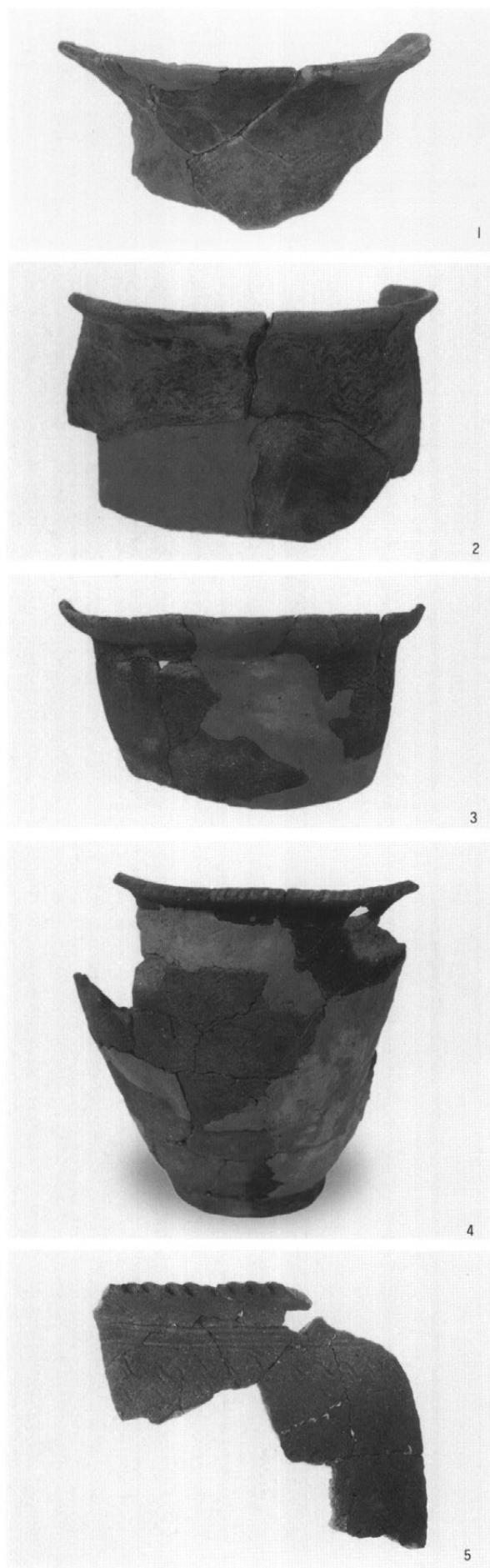


5 溝 (A区南西側)

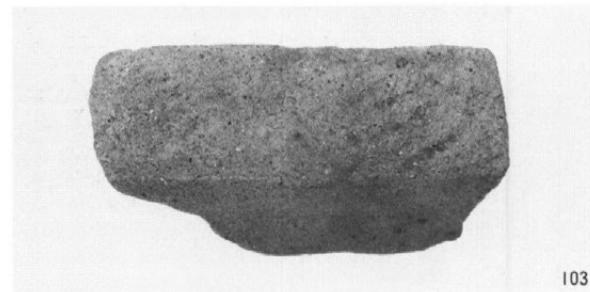
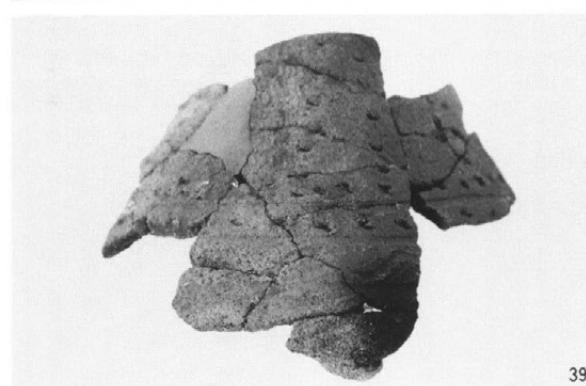
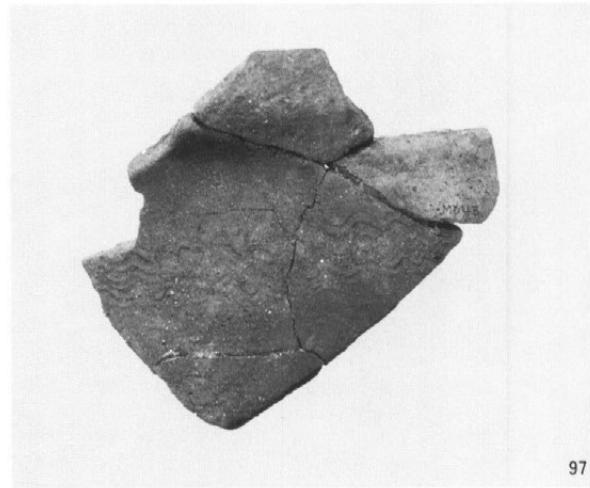
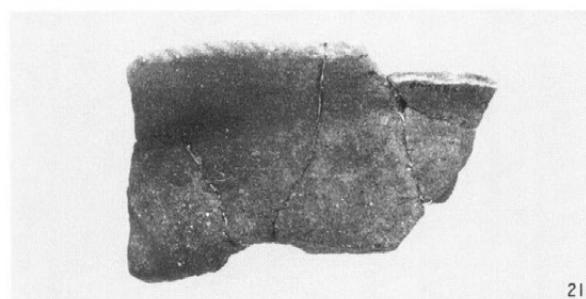
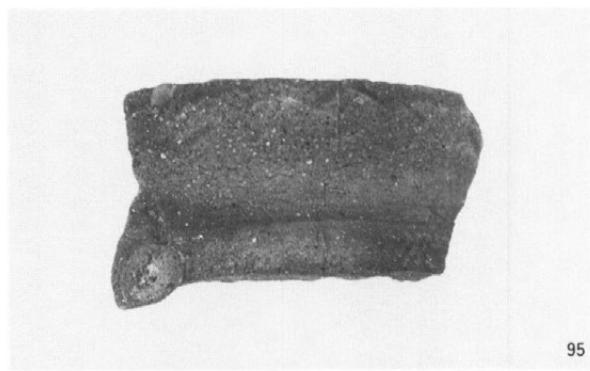
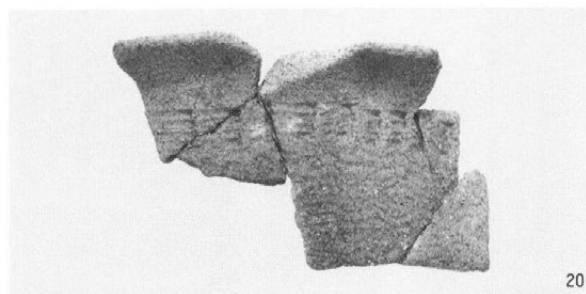
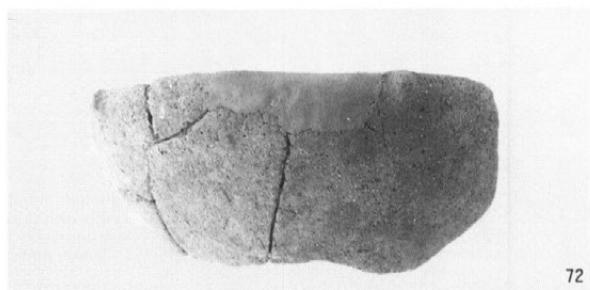
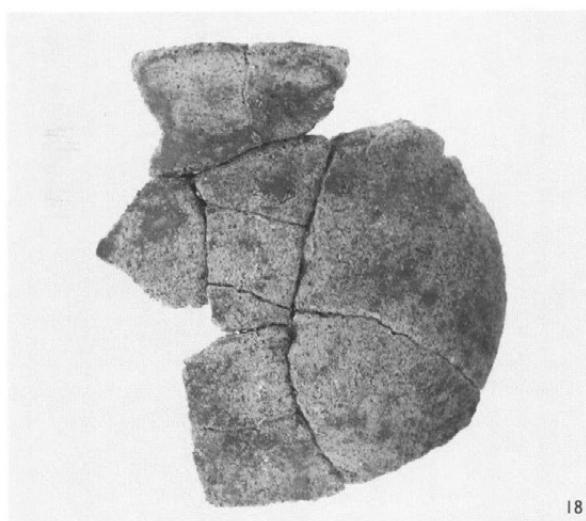
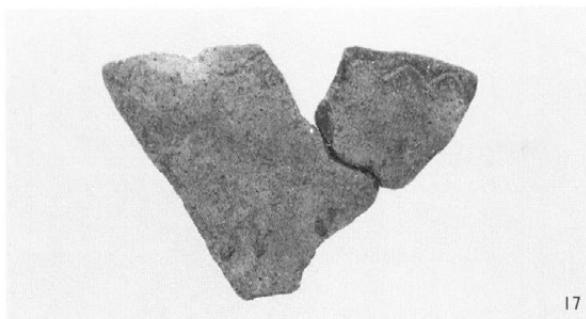


6 溝 (A区北西側)

図版30 遺 物



S B 1・S B 2 出土弥生土器

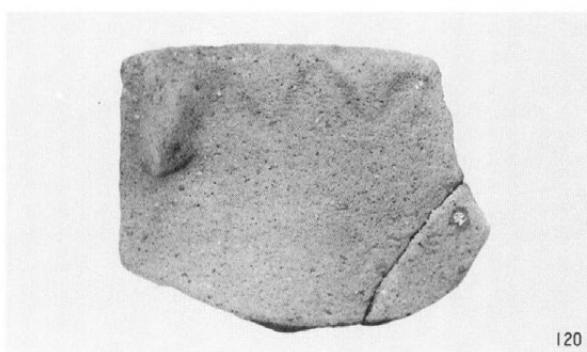


SB3・SB6・SB10, 土坑, ピット, 遺構外出土弥生土器

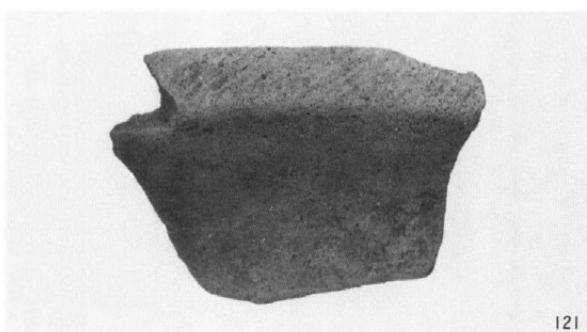
図版32 遺 物



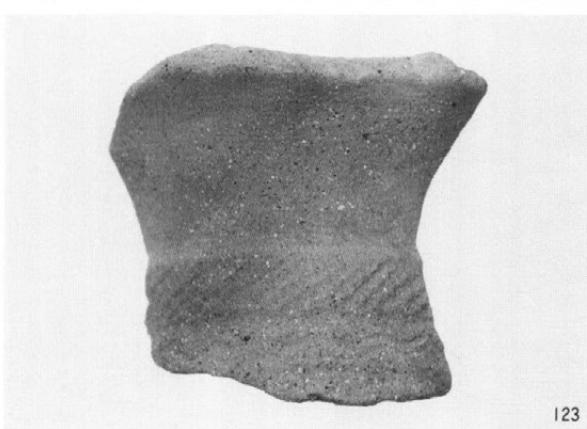
111



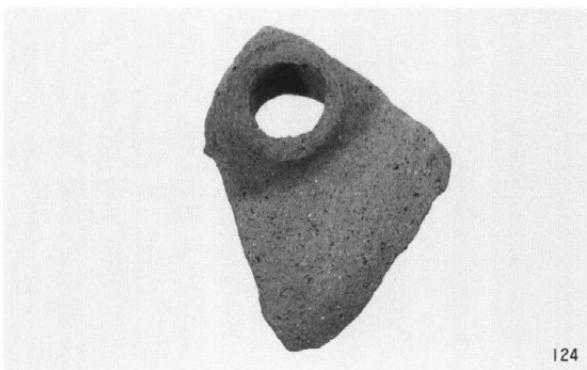
120



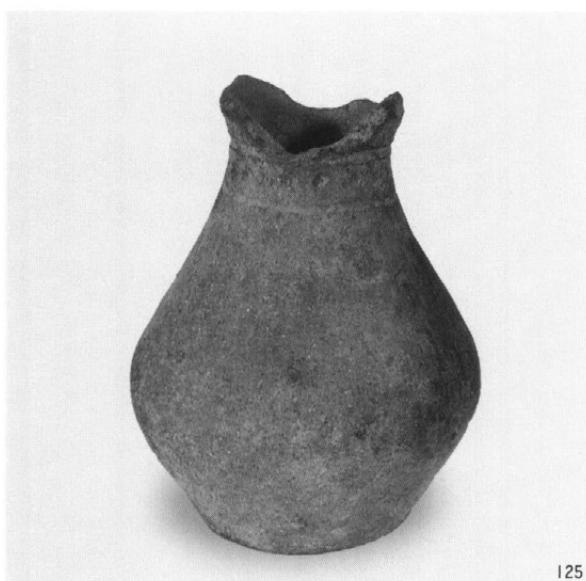
121



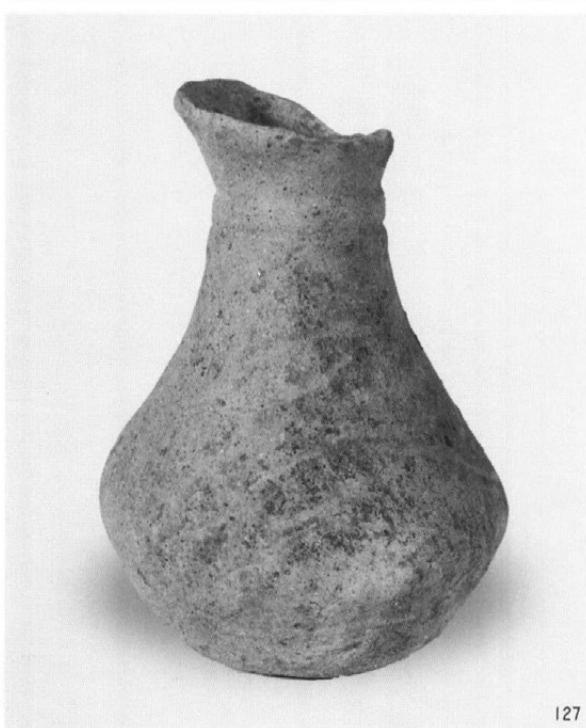
123



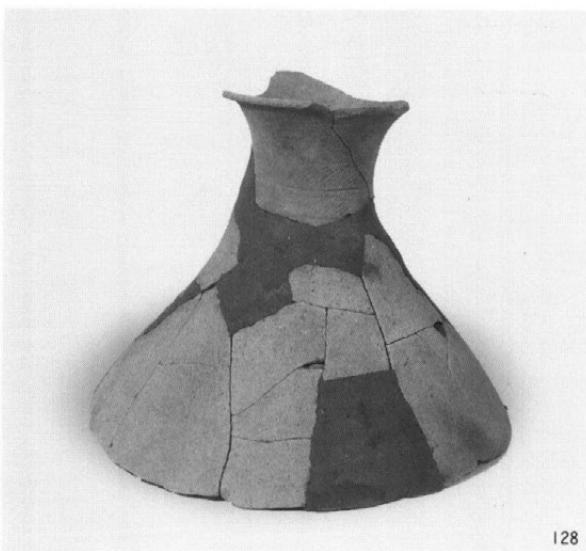
124



125

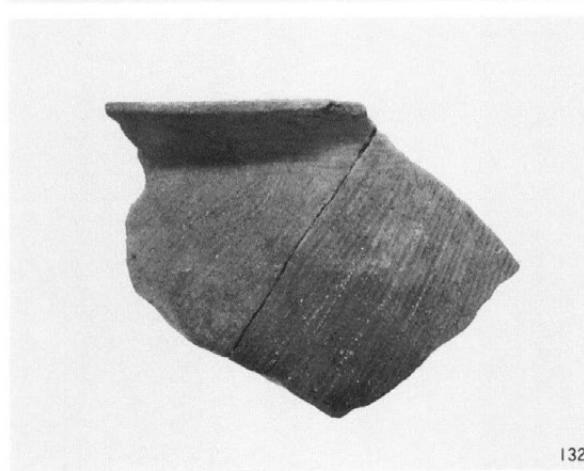
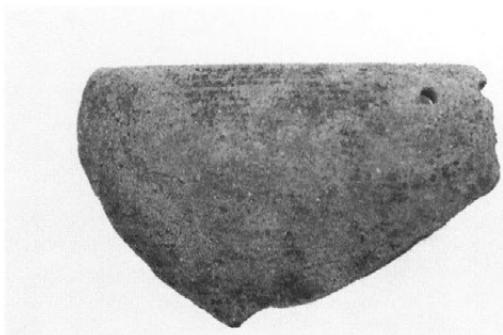
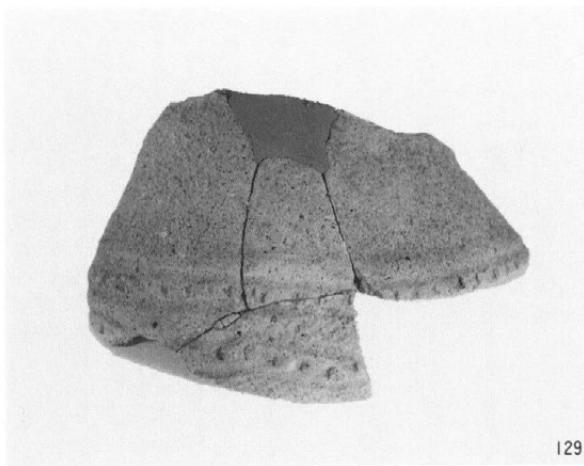


127



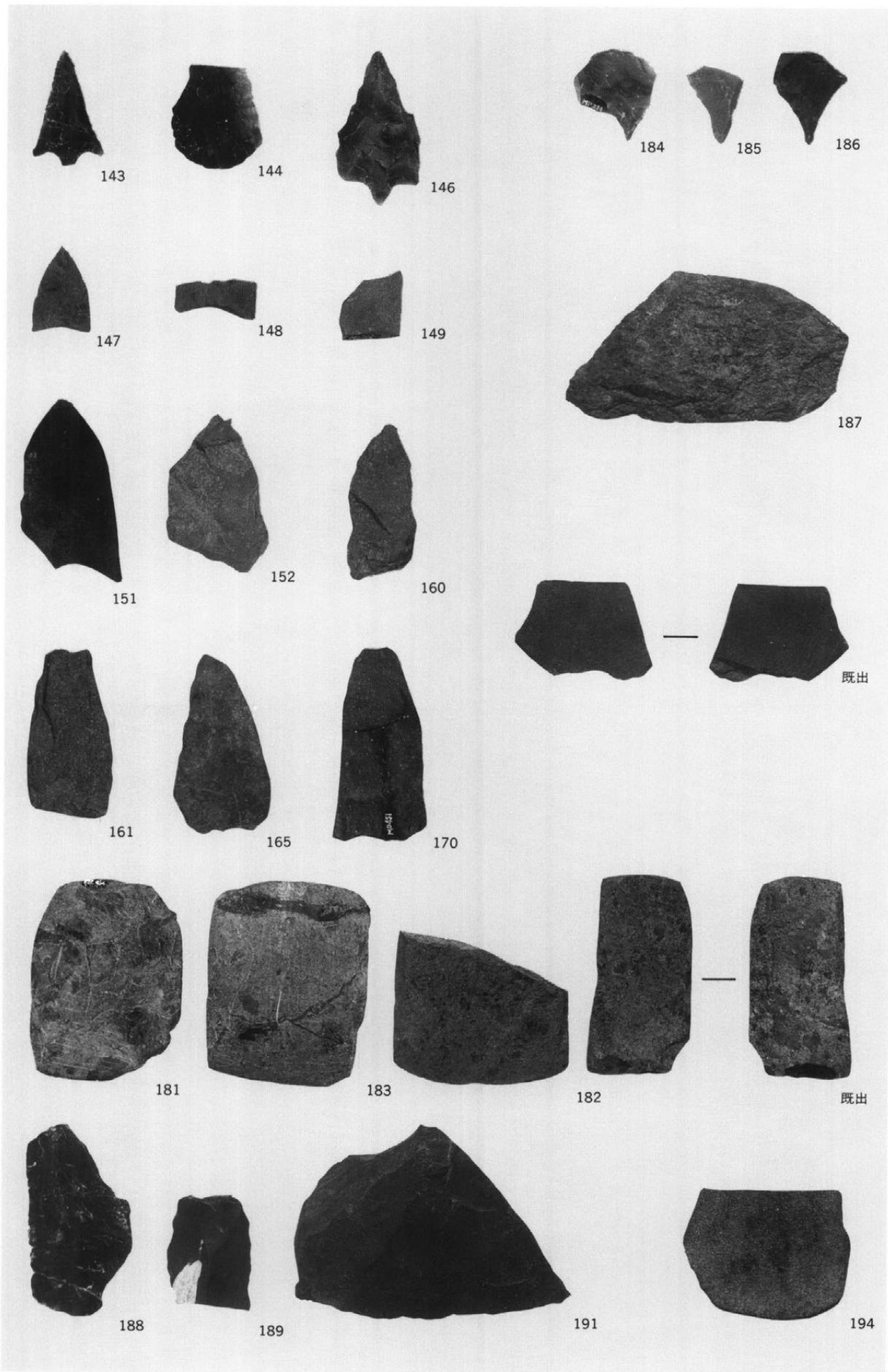
128

遺構外，既出弥生土器

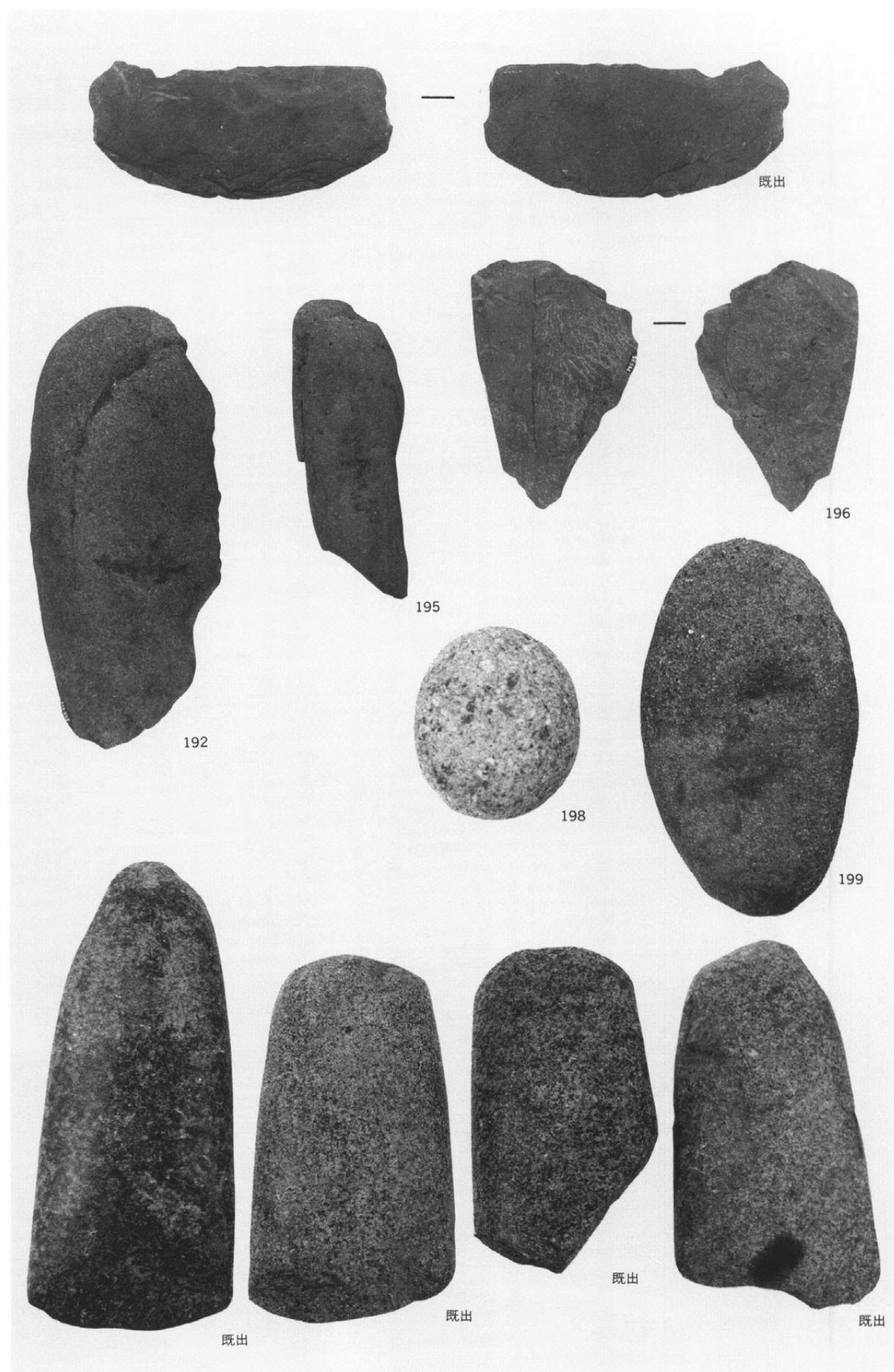


既出弥生土器

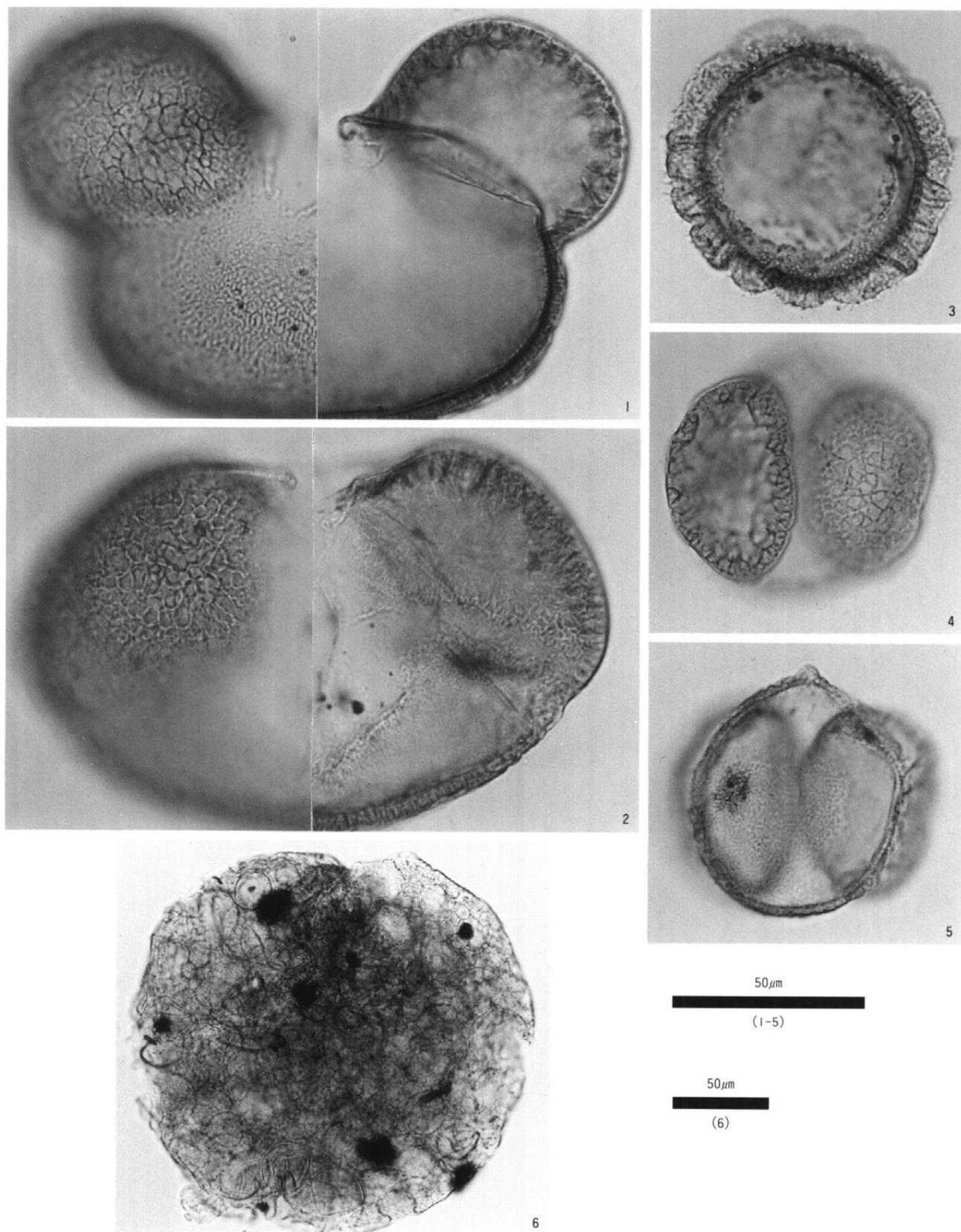
図版34 遺物



石器（1）

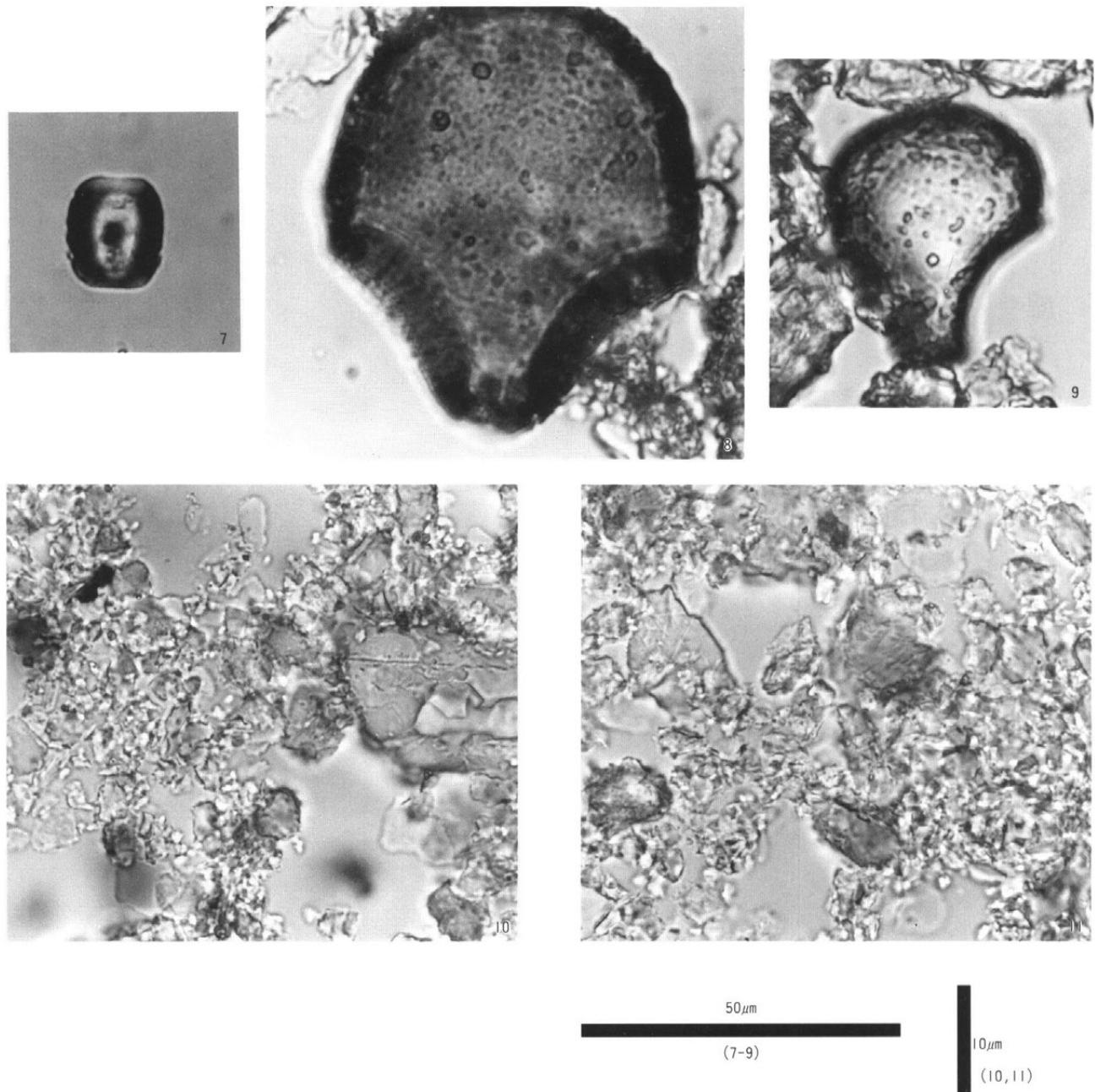


石器（2）



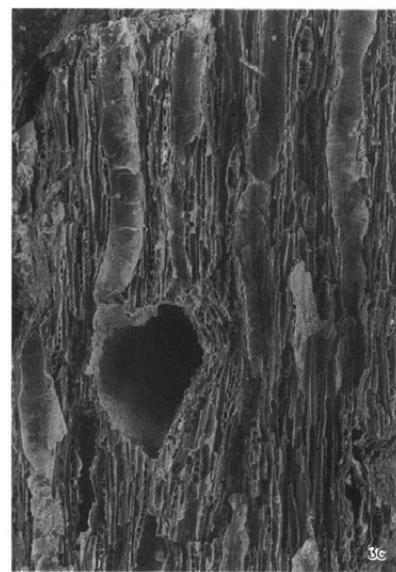
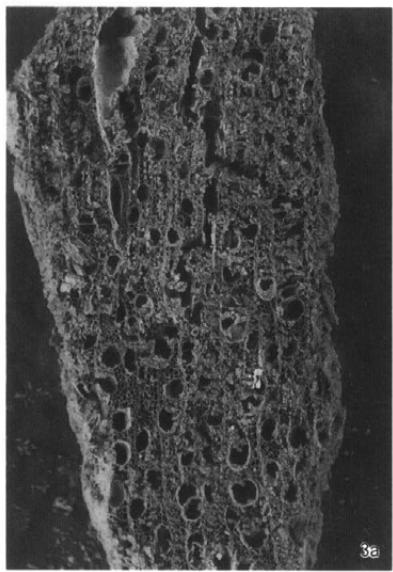
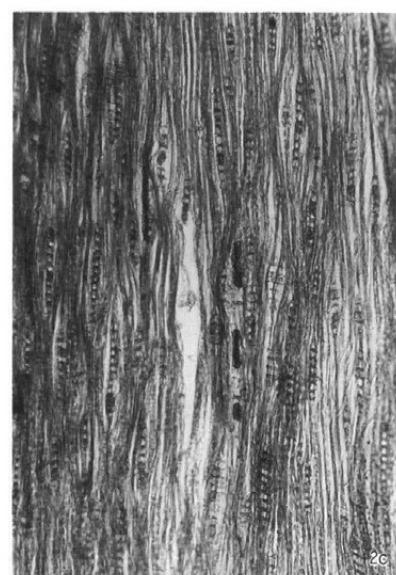
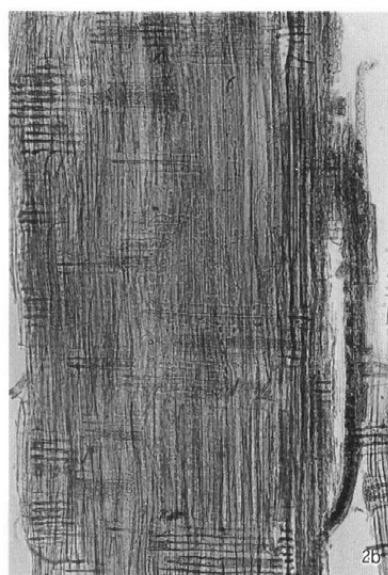
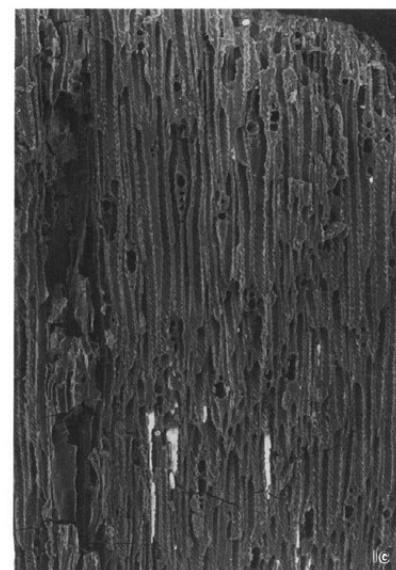
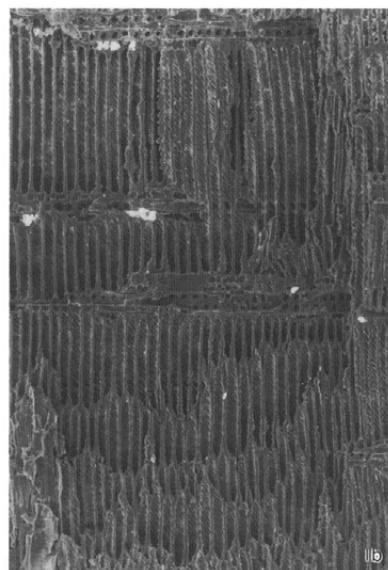
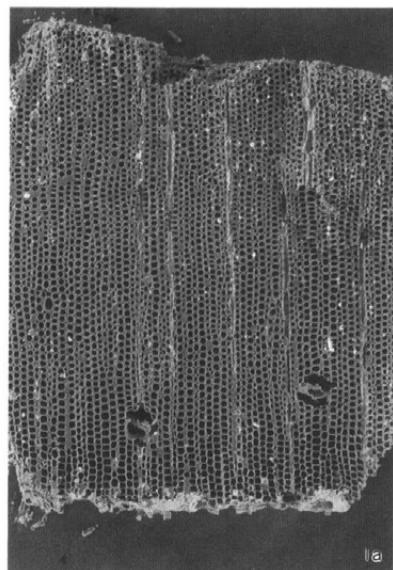
1 花粉化石

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. モミ属 (包含層: 40) | 2. トウヒ属 (包含層: 40) |
| 3. ツガ属 (包含層: 40) | 4. マツ属 (包含層: 40) |
| 5. マツ属 (包含層: 40) | 6. サンショウモ (包含層: 40) |



植物珪酸体・珪藻プレパラート内の状況

- 7. ヨシ属短細胞珪酸体（深掘；19）
- 8. ヨシ属機動細胞珪酸体（深掘；5）
- 9. イネ属機動細胞珪酸体（包含層；38）
- 10. 状況写真（包含層；38）
- 11. 状況写真（深掘；27）

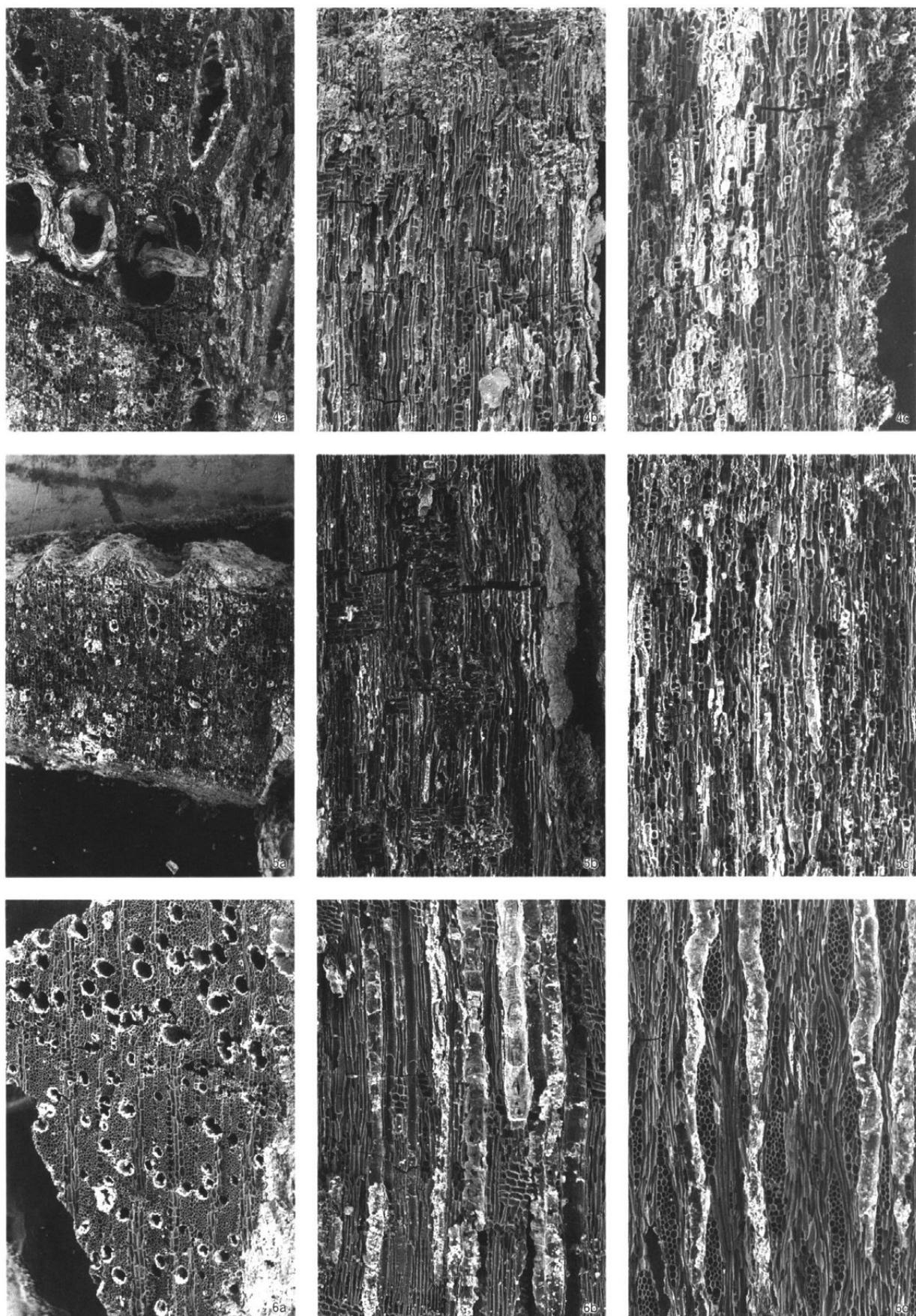


木材・炭化材（1）

1. マツ属複維管束亜属（P184出土炭化材）
 2. ヒノキ科（SB6床面出土材）
 3. ヤナギ属（SB9炉内の土）
- a: 木口, b: 桟目, c: 板目

200μm : a

200μm : b, c



木材・炭化材（2）

4. コナラ属コナラ亜属コナラ節（SB10炉内の土）
 5. クリ（SB10炉内の土）
 6. サクラ属（P184出土炭化材）
 a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200μm : a

200μm : b, c

図版40 調査スナップ



B区表土剥ぎ・検出



S B 1 床面精査



S B 6 床面精査



遺構（S B 1）測量



遺構測量



S T 1



A区検出



記念撮影

町田遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	まちだいせき						
書名	町田遺跡						
副書名	都市対策砂防事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	今村克 関全寿 パリノ・サーヴェイ株式会社 山田真一						
編集機関	豊科町教育委員会						
所在地	〒399-8205 長野県南安曇郡豊科町大字豊科4289-1 Tel 0263-72-2158						
発行年月日	西暦1999年3月20日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	′	m ²	
まちだいせき 町田遺跡	長野県南安曇郡 豊科町大字田沢 字小瀬幅	20461	36° 18' 28"	137° 56' 17"	19980701 ~ 19980930	1350m ²	河川(都市対策砂防事業)に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
町田遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物 10棟 掘立柱建物 3棟 土坑・ピット・溝 他	弥生土器(壺・甕・鉢 他) 石器(磨製石鎌・扁平片刃石斧・石包丁 他)	弥生時代中期後半の集落を調査。石器に磨製石鎌未製品や、砂岩製の大型スクレイパー類を多く認めるなど好資料を得た。		

町 田 遺 跡

都 市 対 策 砂 防 事 業 に 係 る
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

発行日 平成11年3月20日
発行者 豊科町教育委員会
長野県南安曇郡
豊科町大字豊科4289-1
印 刷 藤原印刷株式会社
松本市新橋7-21
